

荒畠遺跡・ラント遺跡・野田遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋藏文化財発掘調査報告書 11

2001年3月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

荒畠遺跡・ラント遺跡・野田遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 11

2001年3月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

序

中国横断自動車道尾道・松江線は「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の発展に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち三刀屋～松江間につきましては平成9年3月から銳意建設を進めてまいりました。その過程で路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である宍道町における荒畠遺跡など貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査が、はるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる誠意を表するものであります。

平成13年3月

日本道路公団中国支社
松江工事事務所

所長 村田 一廣

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成8年度から中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このほど報告書11集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、八束郡宍道町佐々布及び伊志見地区に所在する荒畠・ラント・野田の3か所の遺跡について調査成果を取りまとめたものです。中でも伊志見のラント遺跡は小規模にもかかわらず縄文時代前期の石器が多量に出土し、当時の縄文人の生活の様子や集落の変遷を知る上に貴重な資料になるものと思われます。本報告書が地域の歴史を解明する手がかりとなり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

なお、調査にあたりご協力いただきました日本道路公団中国支社、宍道町をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

島根県教育委員会

教育長 山崎悠雄

例　　言

1 本書は日本道路公団中国支社の委託を受けて、島根県教育委員会が平成11年度に実施した中国横断自動車道尾道・松江線の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2 本書に掲載した遺跡の所在地は次のとおりである。

荒烟遺跡：八束郡宍道町伊志見722-2外

ラント遺跡：八束郡宍道町伊志見704外

野田遺跡：八束郡宍道町佐々布3091外

3 調査組織は次のとおりである。

平成11年度　調査主体　島根県教育委員会

〔事務局〕 宮道正年（埋蔵文化財調査センター所長）

秋山 実（総務課長）・松本岩雄（調査課長）

今岡 宏（総務係長）・川崎 崇（総務係主事）

〔調査員〕 川原和人（主幹）・錦田剛志（主事）・奥村昌子（教諭兼主事）

中野靖睦（教諭兼主事）・赤木 努（教諭兼主事）・中岡宏樹（臨時職員）

沙魚川聰子（臨時職員）・角田 衡（臨時職員）

〔整理作業員〕 鐵尾愛子・藤原須美子・高椿幸江

平成12年度　報告書作成

〔調査員〕 川原和人・錦田剛志・奥村昌子・松崎恵美子（臨時職員）

〔整理作業員〕 佐々木孝子・土谷美鈴

4 発掘作業（発掘作業員雇用、重機借上げ、発掘用具調達、測量発注）については日本道路公団中国支社松江工事事務所、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者協議に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会島根支部

〔現場担当〕 布村幹夫（現場事務所長）・倉橋 恒（技術員）・角森竜二（技術員）

〔事務担当〕 石橋律子

5 報告書作成にあたっては、奈良大学教授泉拓良氏から有益な指導・助言をいただいた。記して謝意を表したい。

6 報告書に掲載した遺物の実測は主として以下の者が行った。

〔実測〕 川原・錦田・中野・奥村・角田・中岡・松崎・土谷・小豆沢

また、次の方々の協力を得た。 河野真由美・鐵尾愛子・藤原須美子・高椿幸江

7 報告書に掲載した遺物の写真是以下の者が撮影した。

荒烟遺跡・ラント遺跡：広江耕史（調査第6係長）

野田遺跡：錦田剛志

8 本書の執筆は川原・錦田が行い、文責は目次に明示した。

9 報告書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

10 採図中の方位は測量法の軸方位を示す。

11 採図の縮尺は図中に明示した。

12 出土遺物及び実測図、写真是島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）で保管している。

目 次

第1章 調査にいたる経過	(川原)	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	(川原)	2
第3章 荒畠遺跡	(川原)	5
第1節 位置と調査の概要		5
第2節 検出した遺構		10
第3節 出土遺物		16
第4節 まとめ		36
第4章 ラント遺跡	(川原)	41
第1節 位置と調査の概要		41
第2節 出土遺物		43
第3節 まとめ		51
第5章 野田遺跡	(錦田)	61
第1節 位置と調査の概要		61
第2節 調査の結果		63
(1) 基本土層		63
(2) I 区の遺構		63
(3) II 区の遺構		65
(4) III 区の遺構		67
(5) 出土遺物		67
第3節 小結		69

挿 図 目 次

第1図 調査遺跡の位置と周辺の遺跡 3

〔荒畠遺跡〕

第2図 調査前地形測量図	5
第3図 調査後地形測量図	6
第4図 調査全体図	7～8
第5図 第2調査区検出遺構全体図	9
第6図 第1土壤実測図	10
第7図 第2土壤実測図	11
第8図 第3土壤実測図	11
第9図 第4土壤実測図	12
第10図 第5土壤実測図	12
第11図 第6土壤実測図	13
第12図 第7土壤実測図	14
第13図 第8土壤実測図	15
第14図 第9土壤実測図	17
第15図 溝状遺構実測図	17
第16図 掘立柱建物跡実測図	18
第17図 第1調査区出土遺物実測図I	19
第18図 第1調査区出土遺物実測図II	21
第19図 第1調査区出土遺物実測図III	22
第20図 第2調査区A地区出土遺物実測図I	23
第21図 第2調査区A地区出土遺物実測図II	24
第22図 第2調査区B地区出土遺物実測図I	26
第23図 第2調査区B地区出土遺物実測図II	28
第24図 第2調査区C地区出土遺物実測図I	30
第25図 第2調査区C地区出土遺物実測図II	31
第26図 第2調査区C地区出土遺物実測図III	33
第27図 第2調査区C地区出土遺物実測図IV	35
第28図 灯明皿形土器変遷図	37

〔ラント遺跡〕

第29図 調査前地形測量図	42
第30図 黒曜石片等検出状況図	43
第31図 第1トレングチ土層図	44

第32図 出土遺物実測図 I	45
第33図 出土遺物実測図 II	47
第34図 出土遺物実測図 III	49
第35図 出土遺物実測図 IV	50
第36図 石器分類図	53
第37図 スクレイバー分類図	53
第38図 模形石器分類図	53
第39図 石斧分類図	53
第40図 島根県における石器変遷図	55
第41図 島根県における石斧変遷図	57
第42図 島根県における石匙変遷図	58
第43図 島根県における異形石器変遷図	58

[野田遺跡]

第44図 調査対象地位置図	62
第45図 調査前地形測量図・調査区配置図	63
第46図 I区・II区調査後地形測量図・遺構配置図	64
第47図 III区調査後地形測量図	65
第48図 各調査区土層断面図	66
第49図 I区溝状遺構実測図	66
第50図 I区SK01実測図	66
第51図 I区SK02実測図	67
第52図 I区SX01実測図	67
第53図 I区SK03実測図	67
第54図 I区SX02実測図	68
第55図 I区SX03実測図・土器出土状況図	68
第56図 II区SK04実測図	68
第57図 出土遺物実測図	69
第58図 出土古錢拓影	69

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	4
第2表 島根県における縄文時代石器組成一覧表	54

図版目次

〔荒畠遺跡〕

- 図版1 荒畠遺跡全景 (南から)
" (北から)
- 図版2 荒畠遺跡全景 (西から)
" (南東から)
- 図版3 第2調査区遺構検出状況 (南東から)
" (南から)
- 図版4 第2調査区第1土壤付近遺構検出状況
" 第1土壤検出状況
- 図版5 第2調査区第2土壤検出状況
" 第3・4土壤検出状況
- 図版6 第2調査区第3土壤検出状況
" 第4土壤検出状況
- 図版7 第2調査区第5土壤検出状況
" 第6土壤検出状況
- 図版8 第2調査区第7土壤検出状況
" 第8土壤検出状況
- 図版9 第2調査区第9土壤検出状況
" 据立柱建物跡検出状況
- 図版10 第1調査区出土土器
"
第1調査区出土石器
- 図版11 第1調査区出土石器
"
"
図版12 第2調査区A地区出土土器
"
"
"
図版13 第2調査区A地区出土遺物
" B地区出土土器
- 図版14 第2調査区B地区出土土器
"
"
"
図版15 第2調査区B地区出土土器
" C地区出土土器
- 図版16 第2調査区C地区出土土器
"
"
"
図版17 第2調査区C地区出土遺物
" 第2調査区出土鐵器

(ラント遺跡)

図版18 ラント遺跡全景（南から）

“ (東から)

図版19 ラント遺跡全景（西から）

“ (東から)

図版20 出土土器

出土石器

図版21 出土石器

“

図版22 出土石器

“

(野田遺跡)

図版23 1. 野田遺跡調査前全景

2. “ 1区調査後全景

3. “ II区調査後全景

図版24 1. 野田遺跡III区調査後全景

2. I区溝状遺構・SK03完掘状況

3. I区溝状遺構完掘状況

図版25 1. I区SK01完掘状況

2. I区SK02完掘状況

3. I区SK03検出状況

図版26 1. I区SK03遺物出土状況（全体）

2. I区SK03遺物（土師器）出土状況近景

3. I区SK03遺物（古銭）出土状況近景

図版27 1. I区SK03完掘状況

2. I区SX01検出状況

3. I区SX02検出状況

図版28 1. I区SX03検出状況・同 土師器出土状況

2. I区SX03半裁土層堆積状況

3. II区SK04集石検出状況

図版29 1. II区SK04半裁状況

2. II区SK04完掘状況

図版30 野田遺跡出土遺物

第1章 調査にいたる経過

中国横断自動車道尾道・松江線は、松江都市圏と山陽地方を結び、ネットワークを形成することにより、沿線地域の産業振興や観光開発を促進するとともに、地域経済の発展と活性化を図ることを目的に事業計画が立案された。

この計画に伴う埋蔵文化財の調査については、平成4年1月に建設省道路建設局から日本道路公団に対して松江・三刀屋について調査開始の指示があり、その一環として同年4月17日付けで島根県教育委員会に埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。そして、平成4年11月には日本道路公団に対して施行命令があり、平成5年9月には工事実施計画が承認され、事業の計画は着々と進められてきた。その間、県教育委員会では分布調査が実施出来ない状態が続いていたが、平成6年3月になってやっと全体の9割あまりを踏査することができた。

この調査結果をふまえ同年の6月と8月に道路公団と調査の打ち合わせを行った。この協議では今回の分布調査が500m幅を対象に行っているので、ルート確定後に再度踏査する必要があることや調査事業の円滑化を図るために用地買収、立木伐採等の環境整備の充実を要望した。未踏査部分の調査は平成7年4月に完了し、4月28日付けで公団に回答した。

同年4月には日本道路公団、県教育委員会、県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会を発足し、8月3日に第1回の連絡会を開催した。この会議では平成8年度から発掘調査に入ることを前提に用地買収や立木伐採方法等の環境整備について協議を行った。この問題については、その後二回連絡会を行って調整し、宍道町下倉～弘長寺間の4.6kmに所在する遺跡から調査を行うことが決定した。これを受けて日本道路公団、島根県教育委員会、社団法人中国建設弘済会島根支部の三者による埋蔵文化財発掘調査覚書を平成8年3月26日に交わし、作業員の確保、発掘現場における物件の調達、測量、進入路の整備等の調査補助業務を弘済会に委託して行うことになった。

玉湯から宍道インターまでの発掘は平成8年度から10年度にかけて48あまりの遺跡を調査した。また、この調査と並行して宍道インターと国道の連絡道及び松江道路から中国横断自動車道につながる連絡部についても調査を行った。

宍道インターから三刀屋インターまでの調査については平成7年までの分布調査で20あまりの調査対象地を確認していた。ところが平成9年3月及び5月の分布調査でジャンクション付近から新たに3か所の遺跡を発見したため、同年6月20日に協議を行って調査対象に加えることになった。そして、その後の分布調査や公団との協議で最終的な調査の対象を16あまりに減らすことにして、平成10年度から調査を行うことになった。平成10年度の調査はジャンクション付近の3か所について試掘調査を行い宅斗掘遺跡が外れることが分かった。平成11年度は、宍道三刀屋間に存在する15の遺跡について発掘調査を実施し、馬場遺跡の一部を除きほぼ終了した。

今回報告する遺跡は多量の縄文時代前期の石器を出土したラント遺跡、縄文時代から中世にわたる荒畠遺跡、そして中近世の遺構が見つかった野田遺跡である。これらの遺跡は宍道町伊志見地区及び佐々布地区に所在するもので、平成11年度に発掘調査したものである。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

この報告書に記載する荒畠遺跡、ラント遺跡、野田遺跡は宍道町の佐々布、伊志見に所在する。これらの地域は宍道町西部に当たり、西は斐川町、南は加茂町に接し、『出雲風土記』に見える意宇郡宍道郷及び出雲郡健部郷に該当するものと考えられている。佐々布付近には宍道駅が置かれ、古代山陰道が存在していたものと推定されており、古代より交通の要衝の地として栄えた所である。現在でも、鉄道としてJR山陰線と木次線が、国道では9号線と54号線が通っており、出雲平野部と山間部をつなぐ要となる地域である。また、ここは『出雲風土記』にいう佐雜崎（ささふのさき）で、意宇郡と出雲郡の境に当たる歴史上重要な地域である。

この地域は宍道川と伊志見川に挟まれた低丘陵地帯で、地形は複雑に入り込んでいる。南側の畠集落は標高315mの大黒山から東側に伸びている緩やかな斜面に当たり、東の端は宍道川によって形成された谷につながる。南側には標高282mの大山を中心とする高い山が聳え、北側には標高120m代の丘陵が連なる。この地域には現在のところ古代の遺跡があり知られていない所で、わずかに黒曜石が出ている新田畠II遺跡、土師器が表採されている佐々布I遺跡、それに谷の入り口の弥生土器、須恵器等が採集されている平田遺跡等が存在するが実態は明らかでない。中世の遺跡としては経塚が2か所知られており、宝篋印塔も1基存在している。このように畠地区は遺跡の数は少ないが、弥生時代～中世にかけての遺跡が所在している所である。

佐々布地区の萩田・小佐々布・佐々布下・佐々布中は畠集落の北側に聳える山から出雲平野に向かって伸びている低丘陵地帯で、この中には森林公園や工場それに新しく作られた団地等が存在している。この地域は『出雲風土記』に出てくる宍道駅が存在していたところで、数多くの遺跡が存在している。現在のところ旧石器時代や縄文時代の遺跡は知られていないが、弥生時代以降になると遺跡が増えてくる。弥生時代の遺跡については中國横断道及びその関連事業に伴う調査でその実態が明らかになった。上野II遺跡では大規模な鉄製品の工房跡が見つかり、弥生時代後期の社会的な背景を知る大きな手がかりになるとともに出雲地方の鉄文化を考える上に欠かすことの出来ない重要な遺跡として注目された。また、上野I遺跡、北ケ市遺跡等では竪穴住居跡が数棟検出され、中には立派な溝を伴うものもあった。古墳時代になると丘陵の北端にある佐々布下一号墳がまず造られ、その後、前期末ころに粘土被を伴い神獣鏡、勾玉、鐵劍等が出土した径40mあまりの上野I号が造られる。この古墳は宍道町内では初めて出現した大型古墳で、出雲地方における古墳の普及を知る上に極めて重要なものである。このように、この地域は古墳時代前期において宍道町内では中心的な役割を持っていたが、中期以降になるとその中心が東部の同道川流域に移ってしまい、顯著な古墳は姿を消し、小規模な鋸崎古墳群、足頭古墳群等が造られようになる。集落跡では萩田団地造成に伴う調査で古墳時代中期～平安時代初めにかけての建物跡が6棟見つかっており、遺物として繩の羽口、砥石、灯明皿形土器等が出土している。

伊志見地区は伊志見川によって形成された細長い小さな谷があるところで、谷の入り口には国指定史跡になっている伊志見一里塚が存在し、谷のほぼ中央には『出雲風土記』に記載されている伊甚神社が鎮座している。この谷には現在5か所あまりのところから須恵器、土師器が表採されており、左右にある丘陵には貝輪等が出土した軍原古墳や軍原丘上古墳群などが存在している。



第1図 調査遺跡の位置と周辺の遺跡

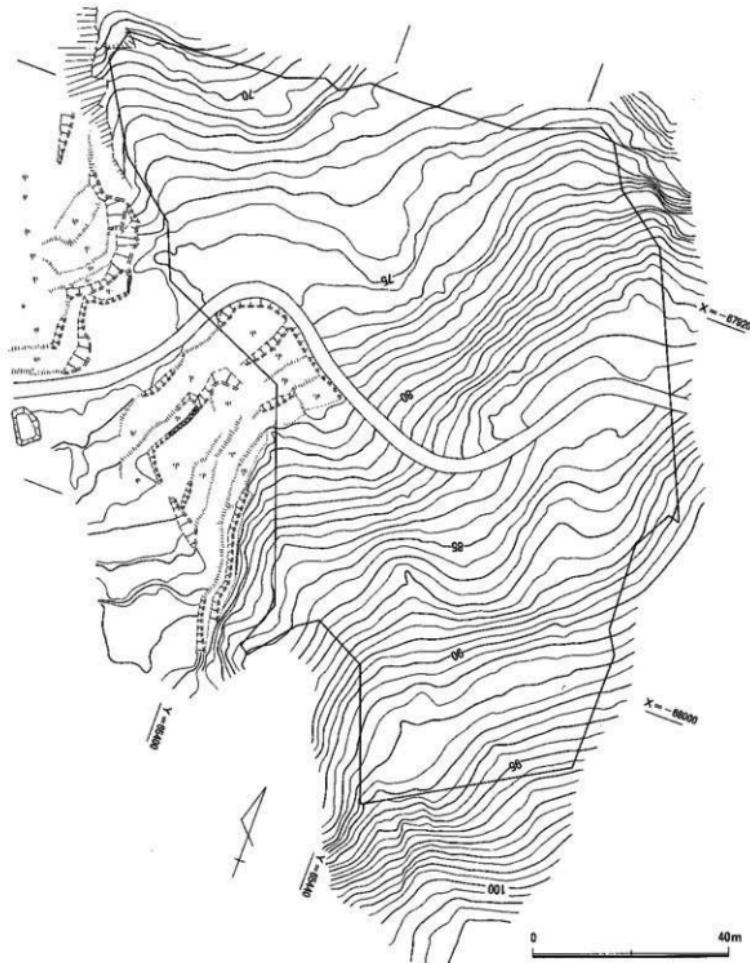
No	遺跡名	所在地	種別	出土遺物等
1	荒畠			
2	ラント			
3	野添			
4	伊志見一里塚	宍道町伊志見	一里塚	国指定史跡
5	車原千人塚古墳	斐川町学頭	古墳	円墳(半壇)
6	車原古墳	"	"	円墳 磨管玉 直刀 貝輪等
7	車原丘上古墳群	"	"	3基(方墳2 不明1) 箱式石棺 須恵器
8	大井古墳	"	"	酒瓶
9	原添	宍道町伊志見	散布地	須恵器片
10	龜田	"	"	"
11	上ソリ	"	"	"
12	寺ノ前	"	"	"
13	上	"	"	"
14	新田畠II	斐川町学頭	"	黒曜石
15	祐宗寺の宝鏡印塔	加茂町岩倉	古墓	宝鏡印塔
16	経塚	"	"	経塚 地名のみ
17	煙京学経塚	宍道町佐々布	"	
18	佐々布I	"	散布地	土師器
19	普門院跡	"	寺跡	
20	平田	"	散布地	弥生土器 須恵器他
21	佐々布要害山城跡	"	城跡	山城
22	矢谷上	"	散布地	須恵器片
23	敷手	"	"	"
24	矢谷下	"	"	"
25	竹ヶ崎	"	古墳 敷地	H10年調査 横穴墓2 弥生土器
26	上野I	"	古墳・住居跡	H9・10調査 円墳1 方墳1 弥生住居跡6 1号墳(積土標 墓輪棺 銅劍 銀玉類)
27	" II	"	住居跡	H11調査 弥生後期 鉄製品工房跡 古墳時代竪穴住居跡等
28	西屋敷	"	"	須恵器 土師器片
29	城山城跡	"	城跡	
30	大畠ケ	"	散布地	須恵器片
31	観音寺横穴	"	古墳	
32	海部城跡	"	城跡	
33	掛屋山城跡	"	"	
34	佐々布下古墳群	"	古墳	方墳3基
35	岩穴畠	"	散布地	須恵器片
36	鷺崎	"	"	"
37	鷺崎古墳群	"	古墳	H10年調査 横穴墓4 他に前方後方墳1
38	屋敷古墳群	"	"	H10年調査 弥生住居跡3 古墳6 横穴墓7 炭窯1等を検出
39	椎ノ木廻古墳群	"	"	方墳3基
40	北ヶ市	"	住居跡	弥生後期 円形竪穴住居跡2 1997調査
41	長廻古墳群	"	古墳	方墳1(箱式石棺1 刀子1) 横穴墓2(須恵器 大刀 鉄鎌 人骨4体分)
42	小界古墳	"	"	方墳
43	秋田	"	住居跡	S48調査古墳時代中期～平安時代 竪穴住居を含む6棟の建物跡 最治工房2
44	足頭古墳群	"	古墳	方墳3基 S60年・H10調査(箱式石棺2 木棺1 土壙3 刀子2)
45	小佐々布古墳群	"	"	方墳3 円墳1
46	鹿田	"	散布地	須恵器片
47	ソラ田	"	"	"
48	小佐々布横穴群	"	古墳	5基

第1表 周辺遺跡一覧表

第3章 荒 畑 遺 跡

第1節 位置と調査の概要

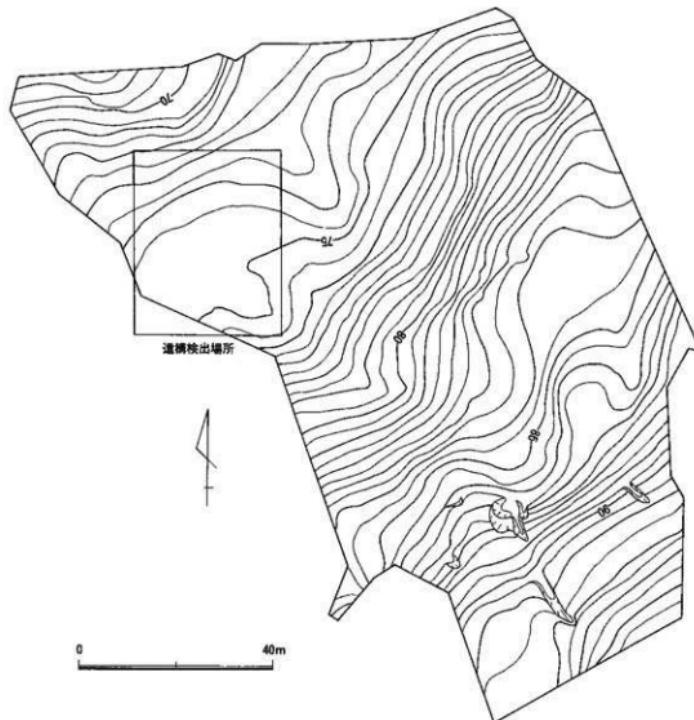
荒畠遺跡は八束郡宍道町伊志見722-2外に所在している。ここは、宍道町の西方に聳える標高177mの山塊から出雲平野に向かって延びる丘陵の中腹にあたる高さ80mあまりの緩やかな斜面で、



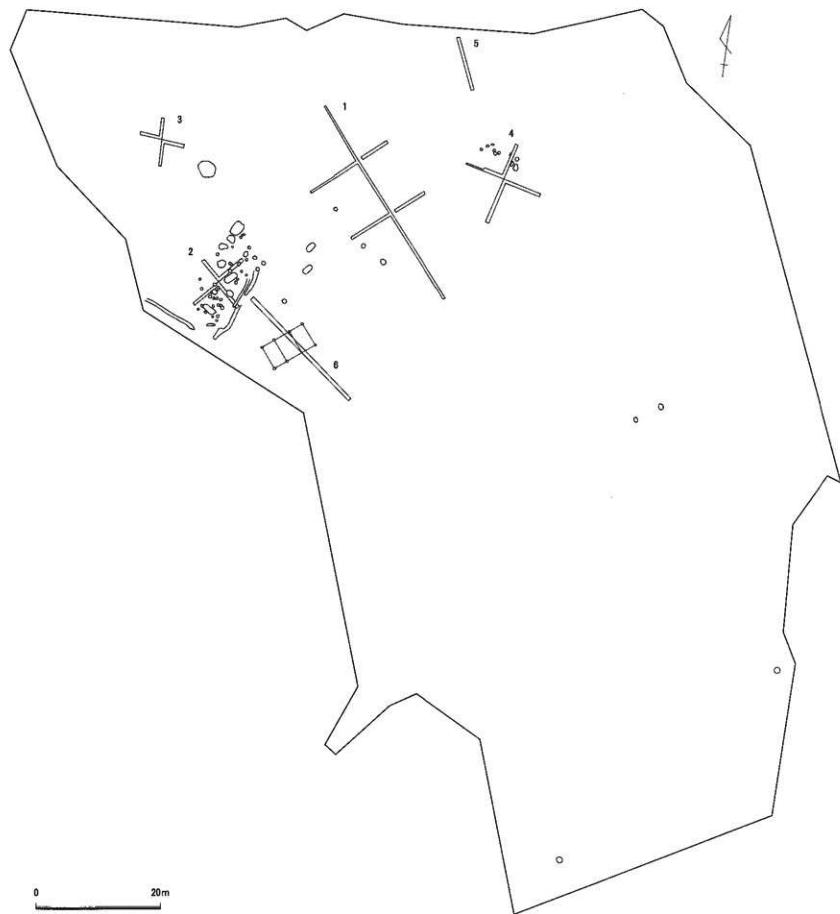
第2図 調査前地形測量図

眼下に出雲平野及び宍道湖を望むことが出来る景勝地である。西側には伊志見川が流れ、この川によって形成された狭長な谷が北側に存在している。谷の入り口には国指定史跡の伊志見一里塚があり、谷には伊基神社が鎮座し、古墳時代～奈良時代の土器が散布している遺跡が5か所あまり確認されている。これらの遺跡は調査されていないため実態が明らかでないが、この谷は古くから人が住み続けていたものと推定される。また、荒畠遺跡から下方の丘陵地には小佐々布横穴群や足頭古墳群等の存在が知られている。

調査はまず遺跡の範囲、性格等を把握するため平成10年11月2日～12月16日にかけて30本のトレントチを設置して試掘調査を行った。その結果、北側の緩斜面から多量の古墳時代～中世にかけての土器片が出土するとともに、南側の上方部からも黒曜石片や土器が見つかり、9000m²にも及ぶ遺跡であることが判明した。この遺跡は標高が70m～95mで、東西幅約50m～約110m、南北長約150mを測り、遺構が存在していると思われる緩やかな斜面は5か所あまり存在している。しかし、この緩斜面の上方には谷状の地形がある所が多く、地滑りの痕跡と考えられる不自然な地形をなしている。なお、調査区の中段西方には水田ないし畑の石垣が残っており、最近まで耕作地として利用されていたものと思われる。

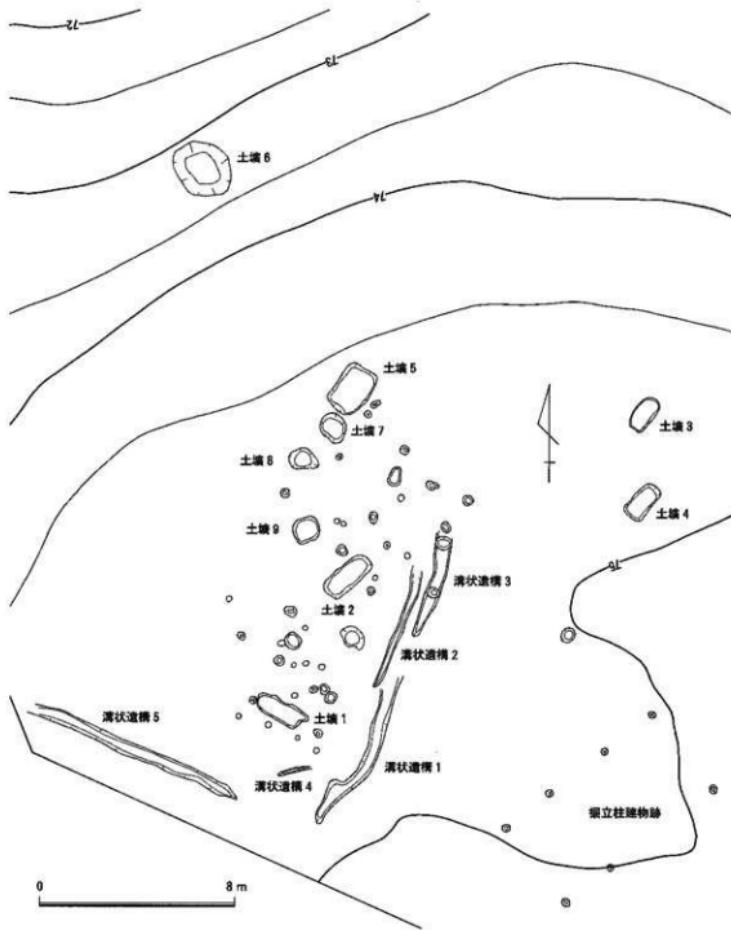


第3図 調査後地形測量図



第4図 調査全体図

本調査は平成11年4月14日から12月10日にかけて、県職員1名、教員の調査員2名、調査補助員1名の4人体制で〔調査の中盤以降は2名体制〕、斜面上方を第1調査区、下方を第2調査区とし、第2調査区はさらに東側の緩斜面をA地区、中央部の谷地形をB地区、そして、西側の緩斜面をC地区として調査に入った。その結果、第1調査区からは最近のものと思われる土壌しか見つけることができなかったが、下方の第2調査区C地区からは土壌9、溝状遺構5、掘立柱建物跡1等を検出した。当初、大集落を想定していたが地滑りと、田畑の開墾によって地形が改変されていたため一部の場所から性格不明の遺構を検出するに留まった。出土遺物は第2調査区の緩斜面から縄文～中世にわたる土器が多量に出土した。その中で量的に多いのは弥生時代後期及び6世紀～9世紀に



第5図 第2調査区検出遺構全体図

かけての土器で、奈良・平安時代のものと思われる灯明皿形土器が8点あまり出ているのは注目された。また、第1調査区の標高83m～94mラインの緩斜面からは黒曜石片と石鎚、楔形石器、スクレイパーがまとまって出土した他、古墳時代後期及び奈良・平安時代の須恵器、中世の糸切り底の土器が若干出土している。

穴道町では今まで標高80mあまりの高所の遺跡は知られていなかったが、中国横断道建設予定地の調査が進むにつれて野津原、山守免、上野といった遺跡から弥生時代後期及び古墳時代の住居跡が見つかってきている。しかし、この荒堀遺跡からは他で見られなかつた奈良～中世の遺物が出土しているのは注目される。

第2節 検出した遺構

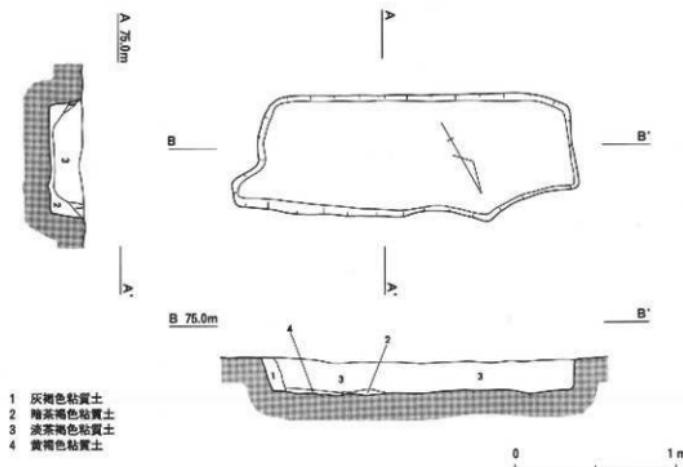
今回の調査では第2調査区C地区の標高75m前後の平坦地から9基の土壙、5つの溝状遺構、1棟の掘立柱建物跡を検出した。これらはいずれも遺物を伴っていないなく、性格時期とともに不明であるが、以下その概要を述べる。

1) 土壙

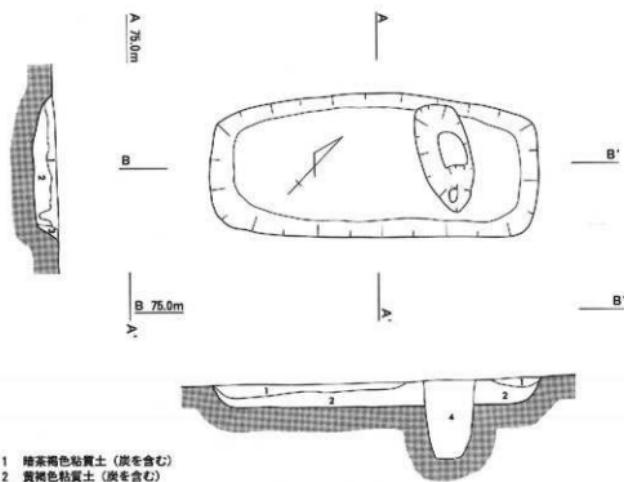
検出した土壙には幅80cm前後、長さ1.4m～2.0mの長方形を呈するもの、1.3m×1.9mのやや幅広の長方形プランを持つもの、そして、径1m前後の小型の円形、径2m前後の大型の円形プランを持つものの4種類がある。

第1土壙（第6図）

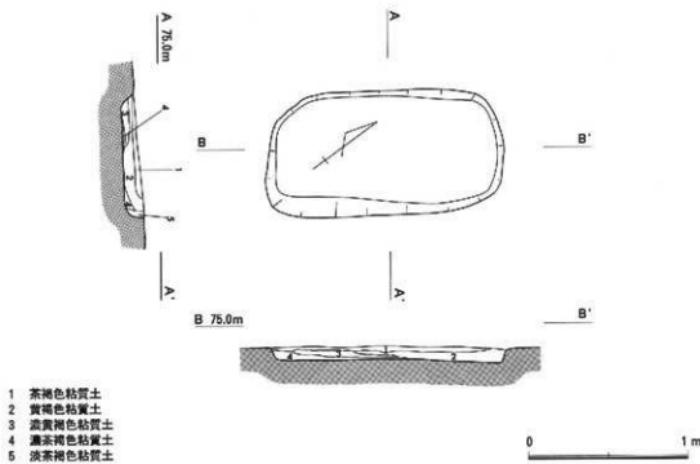
この土壙はC地区の西側から検出された長さ1.95m、幅0.75mを計るややいびつな長方形を呈しているもので、深さは0.19mあまりである。長軸は北西・南東に伸び、北側の短辺及び東側の長辺の一部は搅乱のため不整形となっているがもとは隅丸の長方形をなし、深さも0.5mあまりあったものと推定される。底はほぼ平らで、淡茶褐色粘質土が詰まっていた。底の凹んだところには暗茶



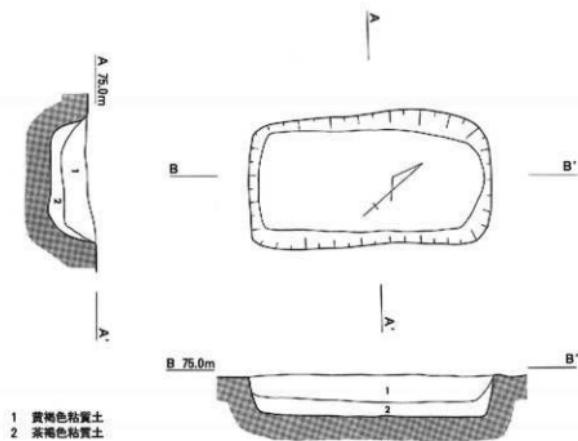
第6図 第1土壙実測図



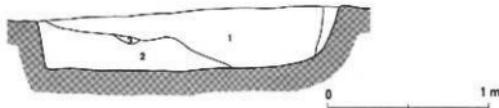
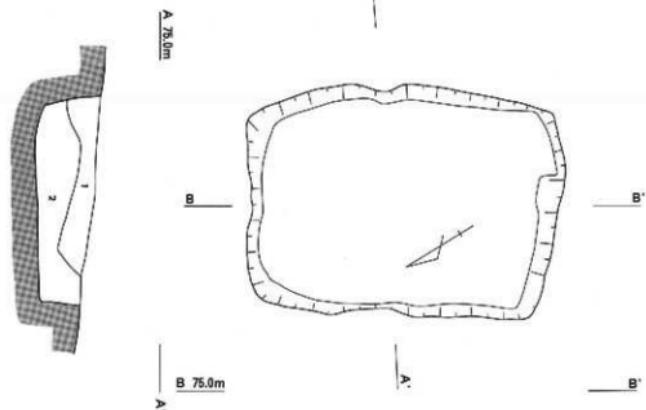
第7図 第2土壤実測図



第8図 第3土壤実測図



第9図 第4土壤実測図



第10図 第5土壤実測図

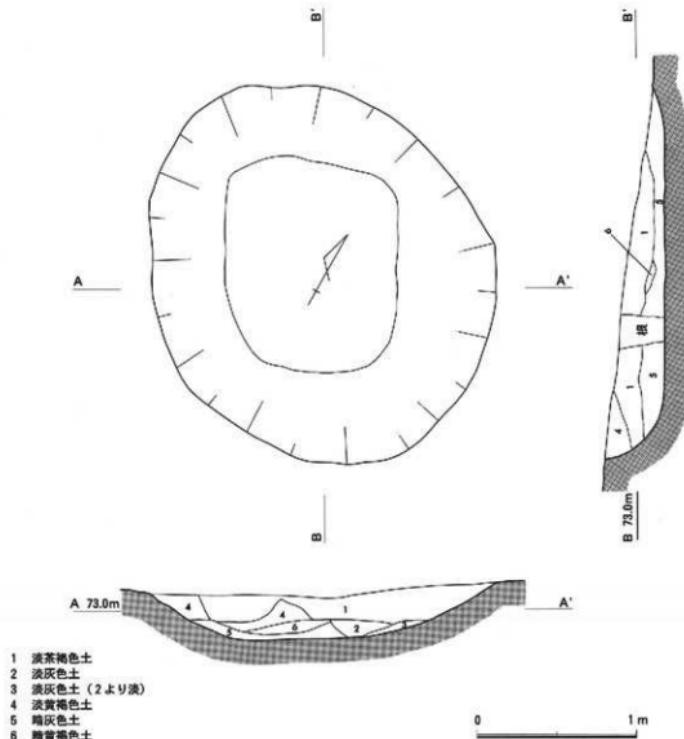
褐色及び黄褐色粘質土をのせて平らになるよう整地し、短辺の壁際にはあたかも棺の外側に粘質土を貼付けるような形で灰褐色土が堆積していたことは注目される。この土壤は出土遺物がなく性格は不明であるが墓になる可能性がある。

第2土壤（第7図）

第1土壤の北約5mあまりのところから検出された長さ2.04m、幅0.89mを計る隅丸長方形をした土壤で、深さは0.15mあまりである。北東よりのところには $0.69m \times 0.31m$ 、深さ0.5mを計る新しい長円形の穴がある。底はほぼ平らで、壁は斜めに内湾して立ち上がっている。壁の下場は長さ1.78m、幅0.7mを計り、暗茶褐色及び黄褐色の粘質土が埋まっていた。黄褐色の粘質土には小さな木炭片を含んでいた。この土壤は上部が削り取られているものと思われる。

第3土壤（第8図）

第2土壤の北東12mのところに造られた長さ1.45m、幅0.77m、深さ0.08mを計る隅丸長方形を呈した土壤で、第1、2土壤よりやや小形である。床はほぼ平らで浅いが5つの土層で埋まっていた。長軸は北東・南西方向で、上方は削られているため浅くなっているものと考えられる。



第11図 第6土壤実測図

第4土壤 (第9図)

第3土壤の南2mのところにある長さ1.50m、幅0.81mの隅丸長方形を呈した土壤で、第3土壤と同じ北東・南西方向に長軸があることからほぼ同じ時期に築造されたものと思われる。床はほぼ平らで、壁は外傾もしくは内湾して立ち上り、中には黄褐色及び茶褐色の粘質土が詰まっていた。なお、底の部分は長さ1.40m、幅0.62mを計る。

第5土壤 (第10図)

この土壤は第3土壤西方11mのところに存在する長さ1.90m、幅1.35mを測るやや幅広の長方形を呈しているものである。長軸は北東・南西方向を示し、底は平らで、深さは0.37mあまりである。中にはまず黄褐色粘質土が北側から下がって堆積し、その上に茶褐色粘質土が詰まっていた。底は長さ1.70m、幅1.24mを計り、壁は垂直ぎみに立ち上がっている。

第6土壤 (第11図)

第5土壤から北側に下がった緩斜面上に存在する円形の土壤である。上場の径は2.13m×2.33mで、深さは最も深いところで0.32mを計り、斜面下方にいくにしたがって浅くなる。底は平らで、壁は内湾して立ち上がっている。底の平面形は方形に近い形になっており、淡灰褐色土の他5つの土層で埋まっていた。

第7土壤 (第12図)

第5土壤の南西に隣接して

掘られている土壤で、1.1m

×0.95m、深さ0.37mを計る

不整形な形をしているもので

ある。すなわち北側の半分は

隅丸方形をなし南半分は円形

となっている。壁は外傾して

おり、底はわずかに凹んだ皿

状を呈している。底の直上に

は径20cm～30cm大の石が3個

存在し、その内の一つは東壁

の底に貼付るような状態で検

出したが性格等は不明であ

る。中の土はほぼ水平に堆積

しており、人口的に埋められ

たものと思われる。

第8土壤 (第13図)

第7土壤の南西に隣接して

存在している径0.9m×1.0m

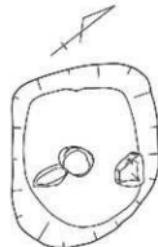
の不整形の土壤で、深さは

0.36mあまりである。東側が

直線的に伸びている他は円形



A A'. 75.0m



A A'

A A' 75.0m



0 1 m

第12図 第7土壤実測図

をなしている。底から幅が10cm前後、長さ15cm～20cmの石が2個立った状態で検出された。その性格は不明である。底はほぼ平らで、壁はやや内湾して立ち上がっている。深さは0.36mあまりである。

第9土壤（第14図）

第8土壤の南側2mあまりのところに掘られている径1.09m×0.94m、深さ0.22mを計る方形形状の平面形を持つ。南北の壁上部は直線的に伸び、東西の壁上部は弧状である。底はほぼ平らで、壁は内湾ぎみである。底の北よりのところには長さ30cm、幅23cm、厚み12cmの平らな石が一つ置かれていた。堆積していた土は黄褐色粘質土と茶褐色粘質土で、ほぼ中央部に木の根の痕跡と思われる落ちこみがあった。

2) 溝状遺構（第15図）

南北に伸びるもの3本、東西方向のもの2本、計5本の溝状遺構がC地区北西部から検出された。その内第4、5溝状遺構は中に詰まっていた土質や周辺の水田の位置等から考えて水田に伴う新しいものと判断した。よって、ここでは第1～3の溝状遺構についてその概要を述べる。

第1溝状遺構

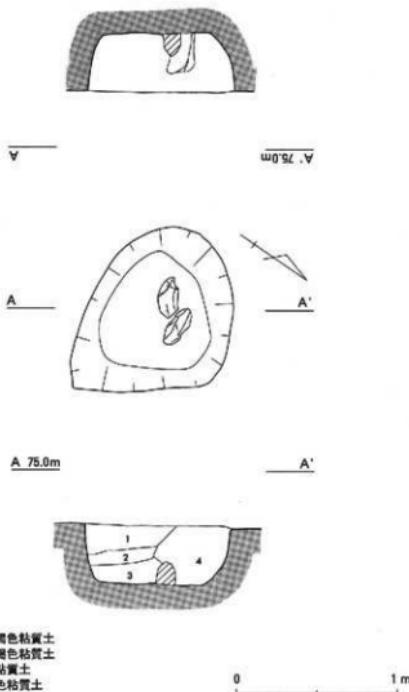
第1土壤の東側3mのところに掘られた南北に伸びる溝で、現存長6mあまり、幅0.5～0.6mを計る。深さは最も深いところで0.16mを計る。この溝は北側にある第3溝状遺構に本来続いていた可能性がある。また、溝の東側には遺構が検出されていないことから、この溝は西側に存在している土壤群を意識しているものと思われる。

第2溝状遺構

第1溝状遺構の北側で、少し西にふった位置に存在する現存長5mあまりの深い溝である。幅は0.2m～0.3mを計り、北端がやや幅広となっている。溝の中には、淡茶灰色及び淡茶褐色の土が詰っていたが、遺物はなにも検出することはできなかった。

第3溝状遺構

第2溝状遺構の東側に隣接して存在する残存長4mあまりの溝で、南北に伸びている



第13図 第8土壤実測図

が中ほどのところで若干西側に屈曲している。幅は0.6m～0.5mで、深さは深いところで0.06mである。溝の中には淡白灰色の土が詰まっていた。

3) 堀立柱建物跡

堀立柱建物跡（第16図）

第1～3溝状造構の南東8mのところに存在する1間×3間の堀立柱建物跡。その規模は7.56m×3.56mで、柱間隔は2.28m～2.80mを計る。その内、真ん中の柱間隔が最も広く、統一された柱間隔になっていない。建物の主軸は北東～南西方向を示しており、柱穴は上場で径26cm～36cm、深さは8cm～46cmを計る。この建物はやや凹んだ谷間状のところに直行して建てられているが、低い部分に掘られている柱穴は浅いものが多いことから、もとは整地されて平坦な上に存在していたものと考えられる。

第3節 出土遺物

荒烟遺跡からは遺構に伴う遺物は検出することができなかったが、縄文から奈良・平安時代及び中世の土器、石器、鉄器等が見つかった。以下出土地点ごとに遺物を見ていきたい。

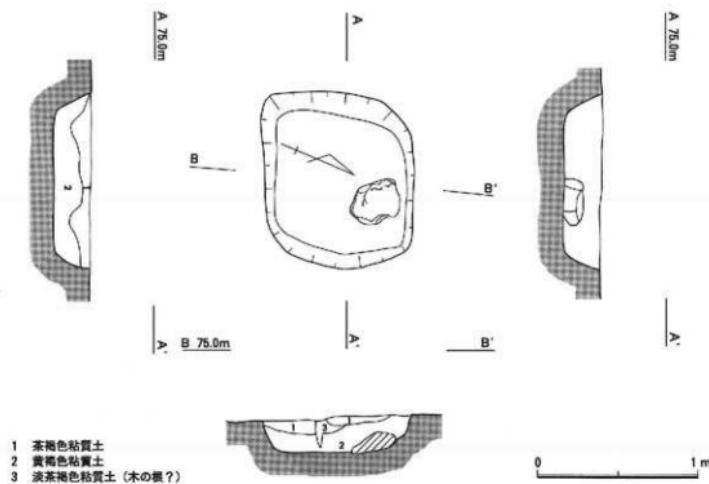
1) 第1調査区出土遺物（第17～19図）

第1調査区からは須恵器及び中世土器が少量出土するとともに、標高85m前後の西側緩斜面から黒曜石の石器がまとまって見つかった。

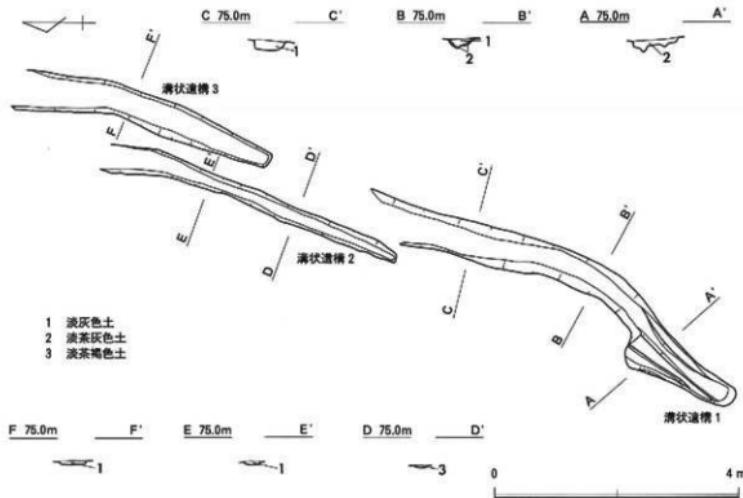
須恵器（第17図1～5） 1は直口壺の頸部から上の破片で、口径8.9cm、残存している高さは5.3cmあまりを計る。頸部から口縁部にかけてはやや外傾して上がり、2本の沈線とその間に櫛歯による波状文が施されている。口唇部は丸く、器厚はやや薄手で、波状文は5本齒の櫛状工具で一条廻る。色調はやや黒っぽい灰色を呈し、胎土焼成とも良好である。2は大形の甕の頸部から口縁部にかけての破片である。頸部には上部と下部に2本一組になった凸帯及び沈線が廻り、その間に整美な波状文が施されている。上方の凸帯はしっかりしており、突起も顕著である。沈線は幅が0.5cm～0.6cmを計る。口縁部は幅が2cmあまりで中央部がやや外側に張り出した形態となっている。器面には自然釉がかかって緑灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。1、2はいずれも古式の須恵器の特徴を持っており5世紀末～6世紀にかけてのものと思われる。3は、口径14cm、残存高2.0cmを計る奈良時代の蓋と思われるものである。口縁部は高さ0.9cmあまりで、口唇部からやや外反して綾線にいたっている。口唇部は丸く仕上げており、胎土、焼成とも良好である。4は壺等の底部になるもので、底部の径7.0cm、残存高2.7cmを計る。底部には糸切りの痕跡が残っており、奈良・平安時代のものと思われる。5は残存高17.2cm、胴部最大径22.8cmあまりを計る平瓶で淡灰色を呈している。底部は径12cmで、底部から胴部にかけては外傾して上がり、最大径になるところには幅約0.5cm、高さ0.2cmの帯状の凸帯が廻る。この凸帯は中央部がやや凹んでいる。肩部はやや丸みを持っており、この部分に把手がついていたものと思われる痕跡が残っていた。

中世の土師器（第17図6） 6は淡黄灰色を呈した中世の土師器で、底部には糸切りの痕跡があり、皿か壺の破片と思われる。

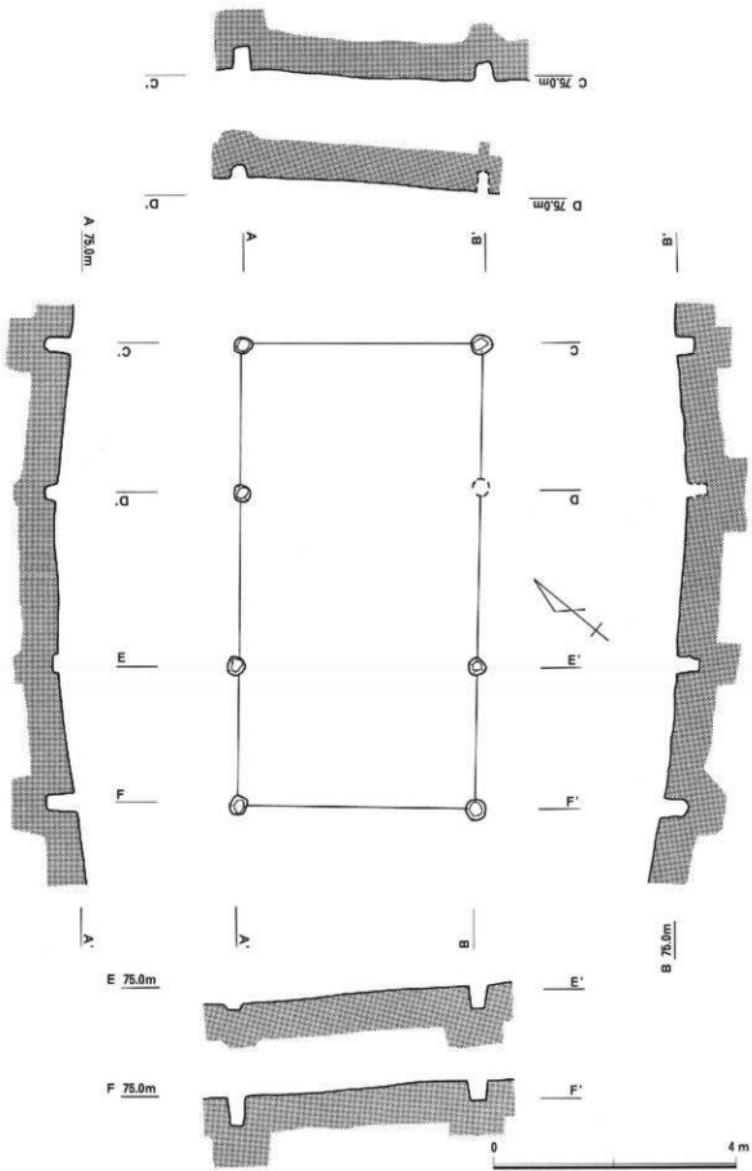
石鎌（第18図7～16） これらの石鎌はすべて黒曜石製の無茎石鎌である。7～11はえぐりの形が三角形のもので、大形と小形の二つに分けられ、小形のものはえぐりが浅いものが多い。7は先端及脚部の一部を欠くが、推定の長さ2.5cm、幅2.2cm、えぐりの深さ0.8cm、厚さ0.4cmを計る。脚端



第14図 第9土壤実測図



第15図 溝状遺構実測図

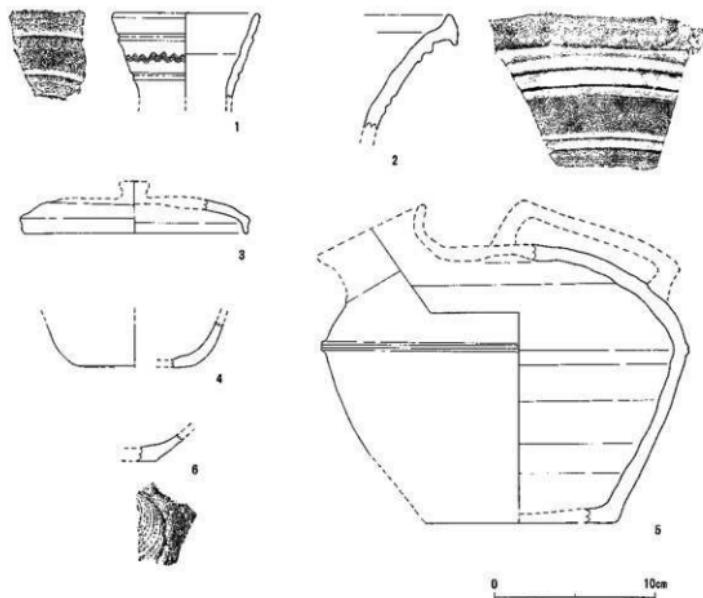


第16図 挖立柱建物跡実測図

部は純角の山形をなし、脚部の幅は0.7cmあまりである。8も一部欠損したところがあるが推定の長さが2.4cmあまりを計る大形品で、えぐりも深い。脚は先端にいくにしたがって幅が狭くなり、端部は鋭角となっている。9は長さ1.9cmあまりで両側縁は直線的に伸び先端が鋭い。10は長さ2.0cm、幅1.3cmを計るやや細身の鐵である。両側縁は若干内湾ぎみに伸び、えぐりの深さは0.2cmあまりで浅い。脚部は先端に行くにしたがって幅が細くなり、端部は平らである。11は長さ1.7cm、幅1.4cmを計る小形品で、両側縁の中央部あたりが外反して凹んでおり、脚部先端は一方が尖りもう一方は平らである。大きさの割りには厚く、0.4cmを計る。

12は平基無茎鐵と呼ばれるもので小形品である。長さ幅ともに1.1cmあまりの正三角形を呈した厚みの薄い鐵で、中央部は両面とも未調整である。

13～16は基部が円弧状に曲がっているものある。13は長さ1.9cm、幅1.2cmあまりのやや細身の鐵で、両側縁は若干内湾し、脚端部は尖る。えぐりは0.4cmの深さを持つ半円形を呈し、丁寧に調整が施された出来上がりのいい鐵である。14は長さ1.6cm、幅1.1cmを計るやや小形の石鐵。えぐりは0.4cmの深さを持ち、脚端部は丸く仕上げている。調整は一部に荒いところが見られ、厚みは0.3cmを計る。15は長さ2.1cm、幅1.5cm、えぐりの深さ0.4cm、脚部幅0.5cmを計る。両側縁は直線的伸び、調整は丁寧である。脚端部は一方は側縁の線がそのまま端部にいたって三角を呈している。また他の一方は側縁の線が端部手前で屈曲して水平の線とながっている。16は長さ2.0cm、幅1.3cmを計るもので、両側縁の下方は内側に丸く外湾して端部にいたっているため、最大幅は端部より上方0.6cmあまりのところにある。



第17図 第1調査区出土遺物実測図 I

石器の未製品（第18図17～23） 17は上半部が欠損しているもので、片面が未調整部分が多い。18は側縁と基部の一部に調整加工が見られ、長さ1.9cm、幅1.8cmを計る。19は調整加工が全面に施された面と基部及び側縁の一部に加工が見られる面を持つもので、長さ1.6cmを計る。20は三角形をした剥片に一部加工が見られる。21～23は石器としての形が整っていないが両面に調整加工が施されているもので、製品として取り扱われた可能性がある。22はやや大形で、長さ2.6cm、幅1.9cmを計り、21、23は1.8cm～2.3cmあまりの大きさで、23は両側縁に稜がある五角形状の形を呈している。

楔形石器（第19図24～26） 24は長さ2.6cm、幅1.4cm、厚み1.1cmを計る柱状を呈したもので、上部に不規則な剥離面が見られ、上端にはつぶれが存在する。また、加壓部に向かってフィッシャーが生じている剥離面もある。25は長さ3.3cm、幅1.9cm、厚み1.0cmあまりを計るもので、下端につぶれが観察される。不規則な剥離面が見られるとともに、上下に走るフィッシャーが存在する。26は長さ2.3cm、幅2.0cm、厚み1.2cmを計るやや幅広のもので、上下端にはつぶれが見られ、上端は断面が三角状に尖り、不規則な剥離面が存在する。

スクレイパー（第19図27～29） 27は幅4.3cm、長さ2.6cm、厚さ1.2cmを計るもので、横長の剥片を素材に、下方の一辺に調整加工して刃部を形成している。加工は片面のみ施されており、裏面は無調整である。28は幅4.8cm、長さ4.0cm、厚さ0.7cmあまりの大きさで、横剥ぎの剥片を使用している。片面は自然面が多く、刃部は片面から調整加工している。29はサスカイト製のやや大形のスクレイパーで、幅8.5cm、長さ4.5cm、厚さ1.1cmを計る。刃部は下方の一辺に片面から調整加工して作られており、裏面にはほとんど加工した痕跡がない。

二次加工のある剥片（第19図30・31） 30は長さ2.2cm、幅0.8cm、厚さ0.5cmを計る細長の剥片で、側縁の一部に調整加工した痕跡がある。31は長さ4.5cm、幅4.9cm、厚さ1.4cmあまりの剥片で一辺に調整加工を施している。

第2調査区出土遺物

第2調査区からは東側のA地区、谷地形になっている中央部のB地区、それに西側の緩斜面であるC地区から縄文～中世にかけての土器片及び鉄器が出土した。以下その概要を述べる。

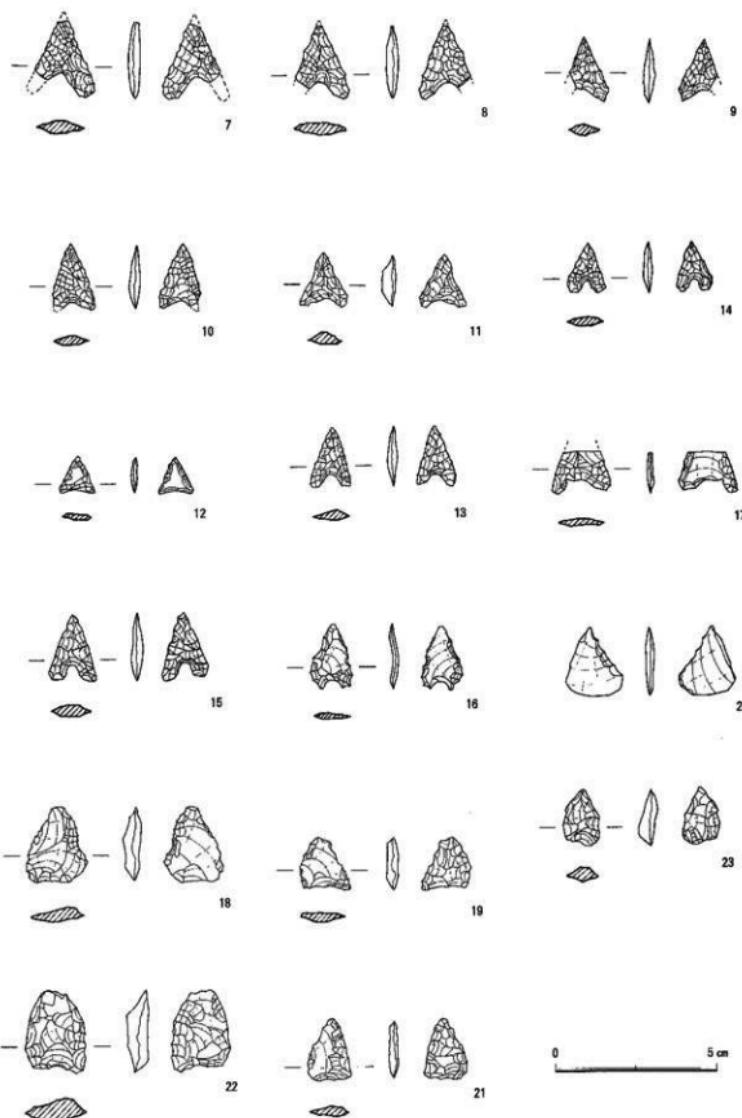
A地区の出土遺物（第20・21図）

縄文土器（第20図1） 縄文土器は1点出土している。これは深鉢の口縁部付近の破片で、外面には荒い条痕が縦方向に施されている。口縁部先端は平らで、やや厚手のものである。

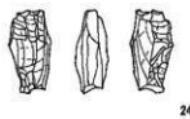
弥生土器（第20図2～6） 2～4は底部の破片。2は底径10.9cmあまりの平底で、1.7cmの厚みを持つ。底部の端からやや内傾して3cmあまり上がり、そこから外反して胴中央部に向かって伸びる。3は底径6.35cmを計る上げ底で、「ハ」の字形の断面を持つ。底部から胴部にかけては「く」の字形に屈曲して上方に伸びている。4も底径5.8cmを計る上げ底である。5、6は壺ないし甕の口縁部付近の破片である。5はいわゆる複合口縁の頸部から口縁にかけての破片。6は口径12.1cmを計る。口縁部は無文で、やや外反しており、高さは2.9cmあまりである。

土師器（第20図7） 7は古墳時代のものと思われる甕の破片で口径18cm。頸部から口縁部にかけてはやや外反した「く」の字形を呈し、肩部以下の内側にはケズリが施されている。

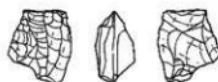
須恵器（第20図8～22） 8～11は蓋坏である。8は口径12.9cm、高さ4.45cmを計る蓋坏の蓋で、天井部から口縁部にかけて内湾しながら下がっている。口唇部は丸く、淡い灰色で焼成は良好。9



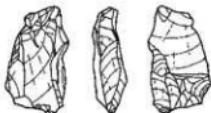
第18図 第1調査区出土遺物実測図II



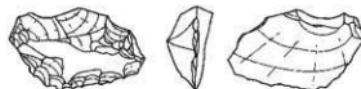
24



26



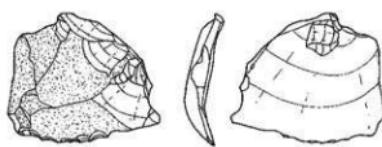
25



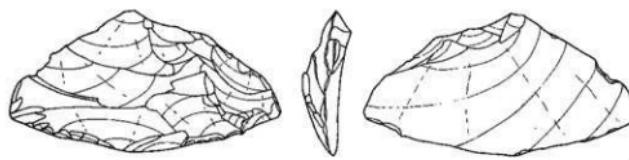
27



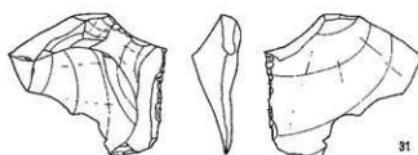
30



28



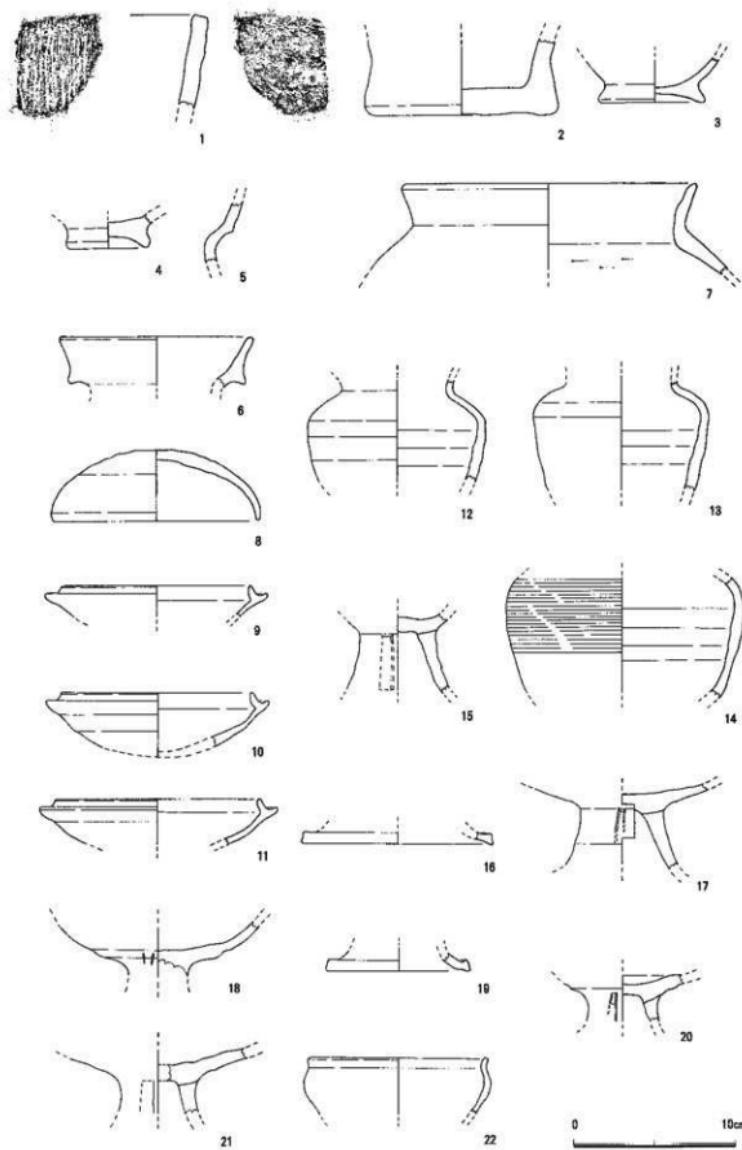
29



31

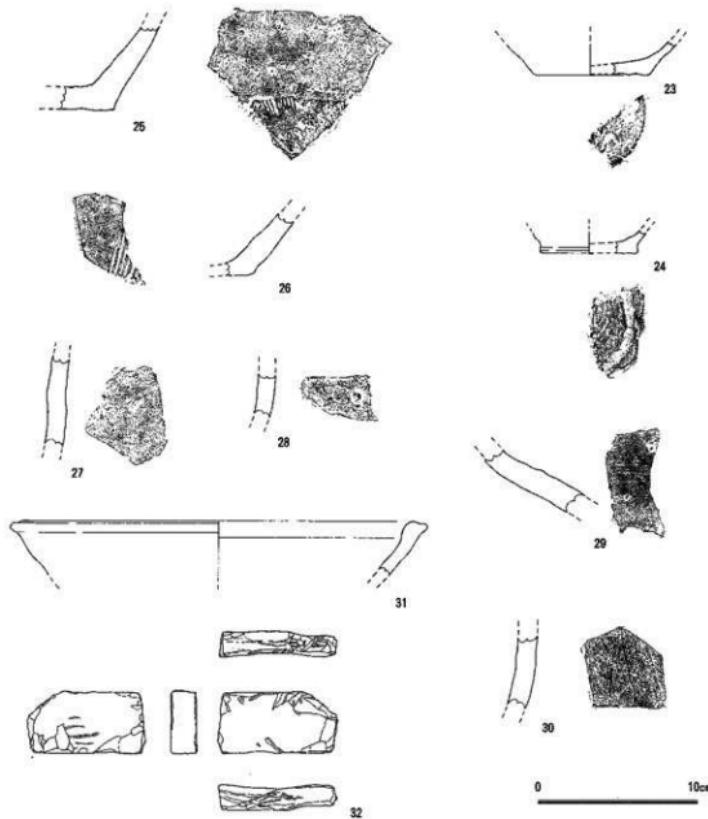


第19図 第1調査区出土遺物実測図III



第20図 第2調査区A地区出土遺物実測図 I

～11は蓋坏の身になるもので、9は口径11.75cm、立ち上りの高さ0.5cmを計る。受け部は上方に若干伸び、立ち上り部分は若干外反して口唇部にいたっており、厚みを持っている。10は口径11.9cm、立ち上りの高さ0.5cm、推定の器高4cmあまりの身で、外面には自然釉がかかっている。11は口径12.7cm、立ち上りの高さ0.5cmあまりのものである。12～14は壺の胴部片である。12は胴部最大径11cmあまりを計るもので、肩がやや張っている。13は胴部最大径が上方にあり、肩部の幅が短い。胴部は内側に直線的に下がっている。14は内湾した胴部片で、最大径14.8cmを計る。外面にはカキ目が施されている。15～21は高坏の破片で、脚部から坏部にかけてのものが多く、方形の透しを持っている。脚基部の径は15、17、21がやや大きく4.8cm～5.2cmあまりを計り、20は4.3cm、18は3.8cmである。16、19は脚端部の破片で、16はやや大きく底径12cmを計る。19はやや小形の脚部で底径が9cmあまりである。22は坏の破片と思われるもので、口径11.9cm、残存高3.5cmを計る。色調は濃い灰色で焼成は良好である。



第21図 第2調査区A地区出土遺物実測図Ⅱ

中世の土師器（第21図23・24）いずれも底部の破片である。23は底径6.8cm、残存高1.8cmあまりのもので、底部には日のやや詰んだ糸切の痕跡があり、底部から上方に向かっては軽く内湾している。24は底径5.8cmあまりで、底の厚みは0.7cmを計る。底部には幅広の糸切の痕跡があり、底部から0.5cmまではまっすぐ上方にあがり、そこから外傾して伸びている。

備前系焼物（第21図25～30）25は甕の底部片で推定底径17.5cmあまりの平底である。底の厚みは1.4cmを計り、胴部下方の外面には左回転のケズリが施され、底部内面には指でナデた痕跡がある。また、底部外面の一部にはハケ目状の痕跡がある。色調は茶灰色を呈し、焼成は充分である。26は摺鉢の底部付近の破片。体部下方の外面にはケズリが施され、内面には7本以上の沈線からなるハケ目がある。茶褐色を呈し、焼成は良好である。27～30は甕の胴部及び肩部の破片で、28、29の外面には自然勧がかかっている。厚みは1.2cm～1.4cmで、29は肩部の破片、その他は胴部片と思われる。茶灰色、茶褐色をしており、焼成は良好である。

瓦器系焼物（第21図31）口径24.3cmを計る鉢状を呈した器形の口縁部付近の破片。口縁部内側は丸く膨らみ、口唇部は中央がやや凹んでいるという複雑な形態を持っている。口縁部から下方は外傾しており、ナデが施されている。

砥石（第21図32）長さ3.9cm、幅7.3cm、厚み1.6cmを計る直方体の砥石で、小豆色をした石である。両面には左右に砥いた痕跡が残っており、中央部がやや凹んでいる。長辺の側面には溝状の細長い凹線が數本ある。

B地区の出土遺物（第22・23図）

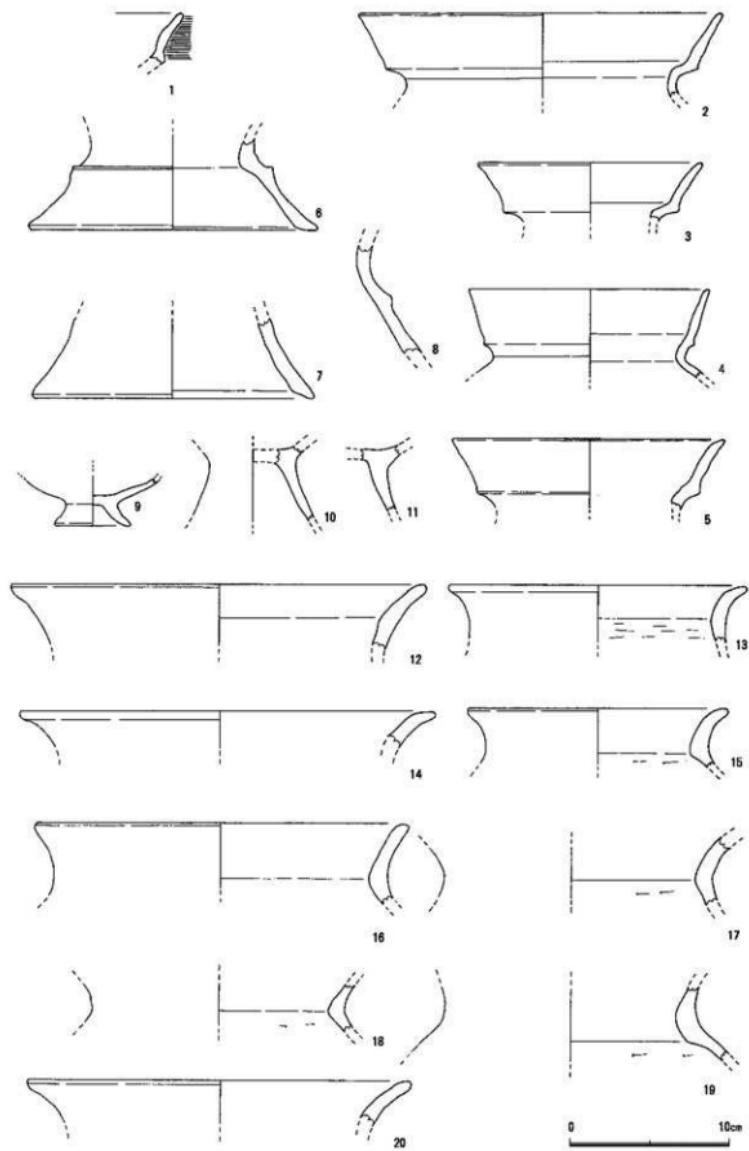
弥生時代末～古墳時代初頭の土器（第22図1～11）

壺・甕（第22図1～5）1は口縁部外面に擬回線を施したもの、2～5はいわゆる複合口縁と呼ばれている無文の土器である。2は口径22.6cm、口縁部の幅3.6cmを計るもので、口縁は直線的に外傾し、口唇部は丸い。厚みは口縁部下方が最も厚く、先端に行くにしたがって徐々に細くなっている。3は口径13.8cm、口縁部の幅3.0cmあまりのもの。口縁部はやや外反しており、端部は細くて丸い。外面の一部に煤が付着している。4は口径14.9cm、口縁部の幅3.6cmを計るもので、2、3の土器より口縁部が立っている。厚みは1と同じで口縁部下方が最も厚い。5は外傾した口縁部を持つもので、口径17.5cm、口縁部の幅3.0cmを計る。口縁部の器壁はやや厚く0.65cmあまりである。先端付近は器壁が薄く端部は丸く尖っている。

鼓形器台（第22図6～8）6は底径15.0cm、残存高5.6cm、脚部の高さ3.9cmを計る器台。脚部は中央部あたりが最も薄く、接地面付近及び上方部がやや厚い作りになっている。形状はやや外反して「ハ」の字形に開き、くびれ部との接するあたりに幅0.5cmあまりの平坦面がある。また、くびれ部はやや厚く1.1cmを計る。7は底部径17.3cmを計る脚部の破片と思われるものである。器壁は0.9cmあまりで、先端は細くて丸い。8はくびれ部から脚部にかけての破片。

低脚坏（第22図9）底径4.7cm、残存高3.0cmを計るもので、脚部は「ハ」の字形に開き、その高さは1.4cmである。脚端部は丸く、坏部は外側にやや内湾ぎみに伸びている。

高坏（第22図10・11）いずれも脚部の破片である。10は脚基部の径5.4cmあまりを計るもので、脚部は「ハ」の字形に開いており、脚基部が最も器壁が厚く、下方に下がるしたがって薄くなっている。脚部と坏部の境の厚みは1.0cmあまりである。11は10の高坏と同じような形態を持つもので、残存高4.0cmあまりである。



第22図 第2調査区B地区出土遺物実測図 I

古墳時代の土師器壺・壺（第22図12～20）12は口径25.6cmを計るラッパ状に外反した口縁部片で、口唇部は丸い。厚みは口唇部から1cmあまり下がった所が最も薄い。13は外反した口縁部片で、口径18.3cmを計る。口縁端部から2.3cm以下にはケズリが施されて器壁がやや薄くなっている。口縁端部は指で摘み出しているためやや薄い。14は口径25.5cmを計るラッパ状に外反した口縁で、口縁端部は丸く、やや尖っている。15は口径16.1cmを計る口縁部片で、外側に大きく外反して端部にいたっている。端部から2.8cm下がったところが最も厚く、そこから下はケズリが施されて、極端に器壁が薄くなる。16は口径23.0cmあまりの破片で、頸部から口縁部にかけて外側に外反している。頸部付近が最も器壁が厚い。17～19は頸部の破片で内面下方にケズリが施されている。19はケズリによって極端に器壁が薄くなっている。20は口径23.7cmあまりの破片で、ラッパ状に開く口縁である。

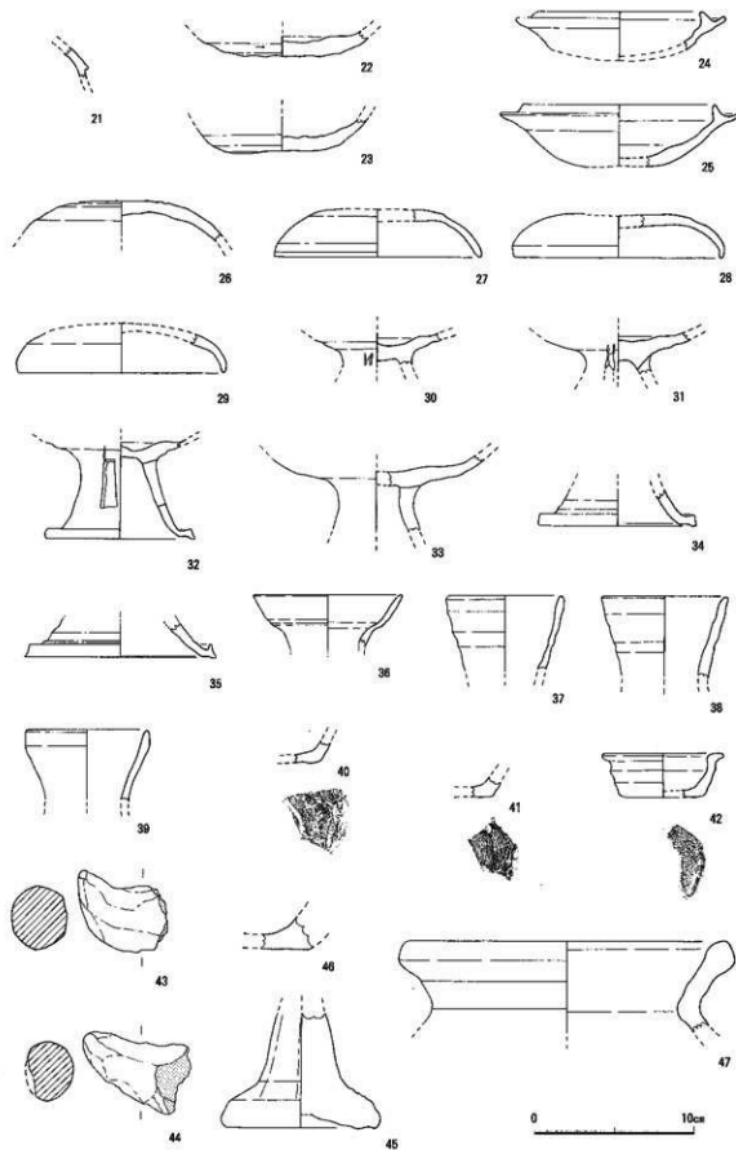
須恵器（第23図21～42）

蓋壺（第23図21～29）21は蓋壺の蓋で古い形態を持つものである。天井部と口縁部との境にしっかりした段を有する。段の上下とでは器壁の厚みが極端に違っている。淡い灰色を呈した焼成良好なものである。22・23は身底部の破片と考えられるもので、外面には左回転のケズリが施されており、器壁はやや厚い。24は口径10.2cm、高さ3.0cmあまりの身で、立ち上りはやや内傾し、その高さは0.6cmを計る。淡灰色を呈し、焼成は良好。25は口径12.0cm、高さ3.9cmを計る身である。受け部は器壁が薄く外上方に伸びている。立ち上りは下方が厚く、上方に向かって細くなっている。その高さは0.8cmあまりである。26は蓋の天井部の破片で、外面の下方には回転ナデ、上方にはヘラ状工具で切り離したような痕跡がある。淡い灰色を呈し、やや軟質である。27は口径12.3cm、高さ3.4cmあまりの蓋である。口縁端部は丸く、体部の上方まではほぼ同じ厚みを持っているが、天井部はやや厚くなっている。28は口径13.0cm、高さ2.6cmを計る蓋で、やや凹んだ天井部から内湾しながら下がり、口縁部付近で大きく曲がり端部にいたっている。29は口径12.8cmあまりの口縁部付近の破片である。口縁端部から0.7cmあまりまではほぼ垂直に立ち上り、そこから内側の内湾して天井部にいたっている。

高杯（第23図30～35）30、31は壺部から脚部にかけての破片。脚部にはわずかに透しの痕跡があり、基部の径は4cm前後である。壺部の底は凹み、厚みは1.1cm～1.4cmを計る。脚部は「ハ」の字形に開くものと思われる。32は底径9.3cm、脚基部径4.7cm、残存高6.3cmを計るもので、脚部は内傾して上がり、上の幅がやや短い方台形の透しが2か所に開けられている。底部から0.6cmあまりまでは内傾して上がり、いったん内側に大きく内湾して凹みをつくりそこから内傾して壺部にいたっている。また、脚端部付近の内面は、かるい「S」字形に屈曲して上方に伸びている。厚みは脚上方が厚く下方が薄い。33は脚基部径4.7cmを計る破片。透しの痕跡がわずかに残っている。壺部は外側に大きく開くものである。34・35は脚下方部の破片で、底径9.6cm～11.8cmを計る。脚端部は0.6cm～0.8cm高さのところまで内傾して上り、そこから内側にやや凹んだ段を持っていて。

甕（第23図36）36は9.1cmあまりの口径を持つ甕の口縁部片。口縁部と頸部の境は外側にかかるく屈曲しており、その部分に浅い沈線が2本廻っている。

長颈壺（第23図37～39）いずれも頸部から口縁部にかけての破片である。37は口径7.0cmあまりを計るもので、外形は逆「ハ」の字形に開いているが、細かく見てみると頸部からやや外湾ぎみに上がり、口縁部近くで内湾して端部にいたっている。器壁は最も内湾しているあたりが薄い。38は



第23図 第2調査区B地区出土遺物実測図II

口径7.75cmを計るもので、頸部下方が最も厚く上方にいくにしたがって薄くなり、口縁端部は若干外側に摘み出して尖っている。外形はラッパ状に開いている。39は逆「ハ」の字形に開いている形態を持ち、口径7.4cmを計るものである。下方からやや外反しながら上方にあがり口縁部下2cmあまりのところから内湾して端部にいたっている。この内湾しているあたりが最も厚い。

灯明皿形土器（第23図40～42） 40、41はこの器種になるとと思われる底部の破片で、いずれも糸切りの痕跡がある。42は口径7.7cm、器高2.7cm、底径5.0cmあまりを計るもので、糸切り痕のある底部からやや内湾ぎみに上方に伸び口縁部付近で外反して端部にいたっている。口縁部は逆L字形を呈し、上面はやや丸みを持っており、くびれているあたりが最も厚い。

瓶（第23図43・44） いずれも瓶の把手の破片である。43は長さ4.7cmあまりを計り、上部はやや外反している。基部の径は4.0cmあまりで、端部は尖っている。44は外上方にまっすぐ伸びているもので、長さは約6.5cmである。

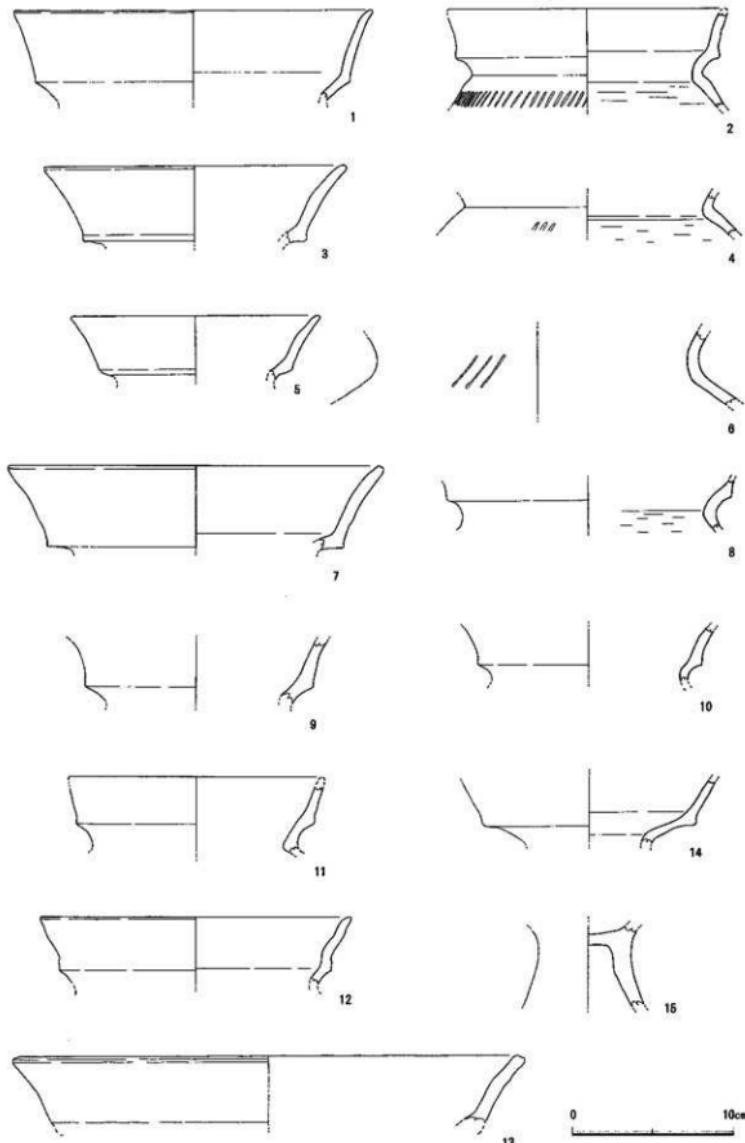
土製支脚（第23図45） 脚部の破片で、底部径9.5cm、残存高7.2cmあまりを計る。脚部にはヘラ状工具で面取りが施され、底部はやや上げ底となっている。

備前系陶磁器（第23図46・47） 46は壺類の底部の破片。内面には緑灰色の自然釉がかかっており、回転ナデが施されている。47は壺の口縁部から頸部にかけての破片。口径は推定19.8cmあまりである。外形は頸部からやや外反ぎみに上がり、大きく内湾して口縁端部にいたっている。内外面には自然釉がかかっており、横ナデの調整が施されている。

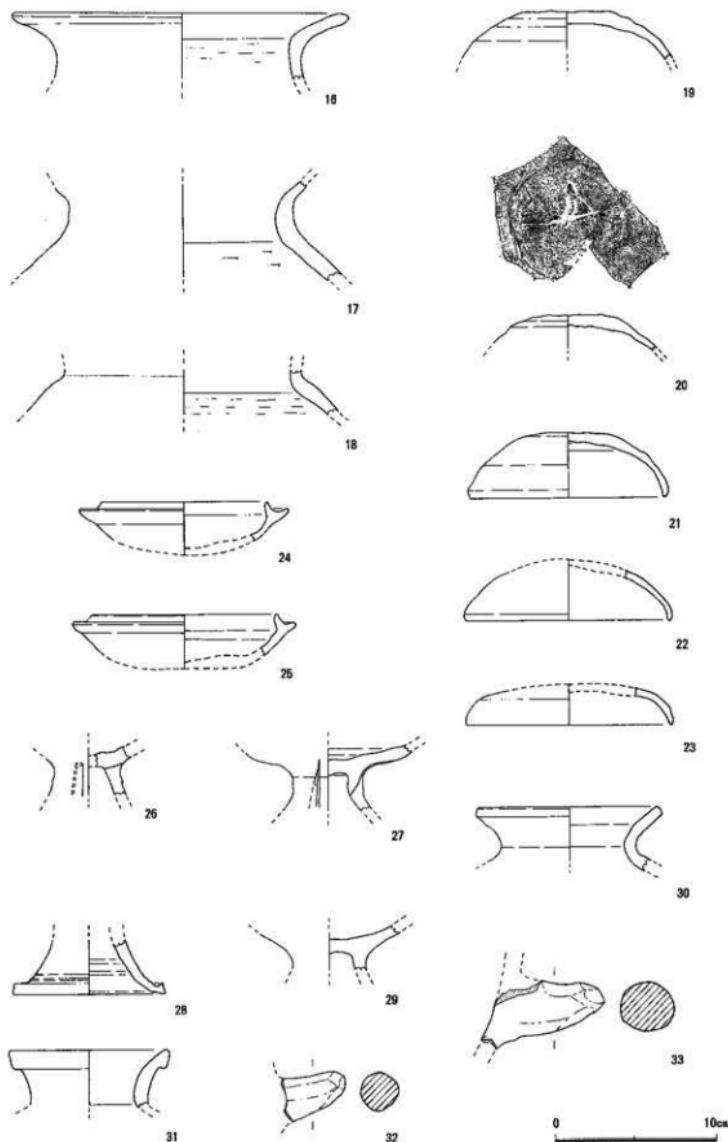
C地区の出土遺物（第24・25図）

弥生時代末～古墳時代初頭の土器（第24図）

壺（第24図1～13） いずれも複合口縁をもち、内面の肩部以下に横方向のケズリが施されているタイプの土器である。1はやや外傾した口縁部で、端部はやや尖りぎみ、推定口径22.5cmあまりを計る。色調は淡褐色を呈しているが、風化しているため器面調整は不明である。2は口縁端部を欠くが肩部まで残っている破片。口縁部はやや外反し、器壁はやや厚い。肩部にはヘラ状の工具による長さ1.2cmあまりの「ノ」の字文が廻り、内面には横方向のケズリが施されている。色調は淡黄褐色で、胎土には雲母を含む。3はラッパ状に開く口縁部を持つもので端部は丸い。推定口径18.8cmあまり。4は頸部から肩部にかけての破片。外面にはヘラ書きの「ノ」の字文、内面には横方向のケズリがそれぞれ施されている。5は外反した口縁部の破片で、口径15.6cmあまりを計る。端部は丸いがやや尖りぎみ。外面の一部に煤が付着している。6は頸部から肩部にかけての破片で、外面にはやや長目のヘラ書き「ノ」の字文が廻っている。内面にはケズリが施されていると思われるが風化のため痕跡が残っていない。7は口径23.4cmを計るやや厚みを持った口縁部片。やや外反して開いている。幅は5cmあまりで、頸部との境は大きく屈曲している。調整は内外面とも横ナデが施されている。8は口縁部下半から頸部にかけての破片。大きく外反した頸部から外傾した口縁部につながっている。内面の下半には横方向のケズリが施されている。9、10は口縁部下半から頸部上半にかけての破片で、小さく外反する口縁部を持つ。11は端部を欠くが口縁部から頸部にかけての破片。推定口径15.9cmで、外傾した口縁、外湾した頸部を持つ。淡黄褐色をした色調をしており、風化しているため器面調整は不明。12は口径19.2cmを計る口縁部の破片。口縁部は下方から0.5cmあまりまではほぼ垂直に上がり、小さく外湾して、斜めに立ち上り端部近くでかるく外反して端部にいたっている。調整は内外とも横ナデが施されている。13は口縁部片で口径30.0cmあ



第24図 第2調査区C地区出土遺物実測図 I



第25図 第2調査区C地区出土遺物実測図II

まりを計る大型のものである。口縁部はかるく外反しており、端部は平らで内傾している。色調は黄褐色を呈し、横ナデの調整が見られる。

器台（第24図14） 14は鼓形器台の筒部から受け部にかけての破片と考えられるものである。筒部は上半のみで大きく外に開き、受け部にいたっている。受け部はラッパ状に開き横ナデが施されている。色調は淡褐色を呈し、胎土に雲母を含む。

高坏（第24図15） 15は高坏の脚部の破片で、脚基部の径5.8cmあまりを計る「ハ」の字形に開くものである。内面にはシボリの痕跡が残っており、外面には煤が付着している。色調は黄褐色で胎土、焼成とも良好である。

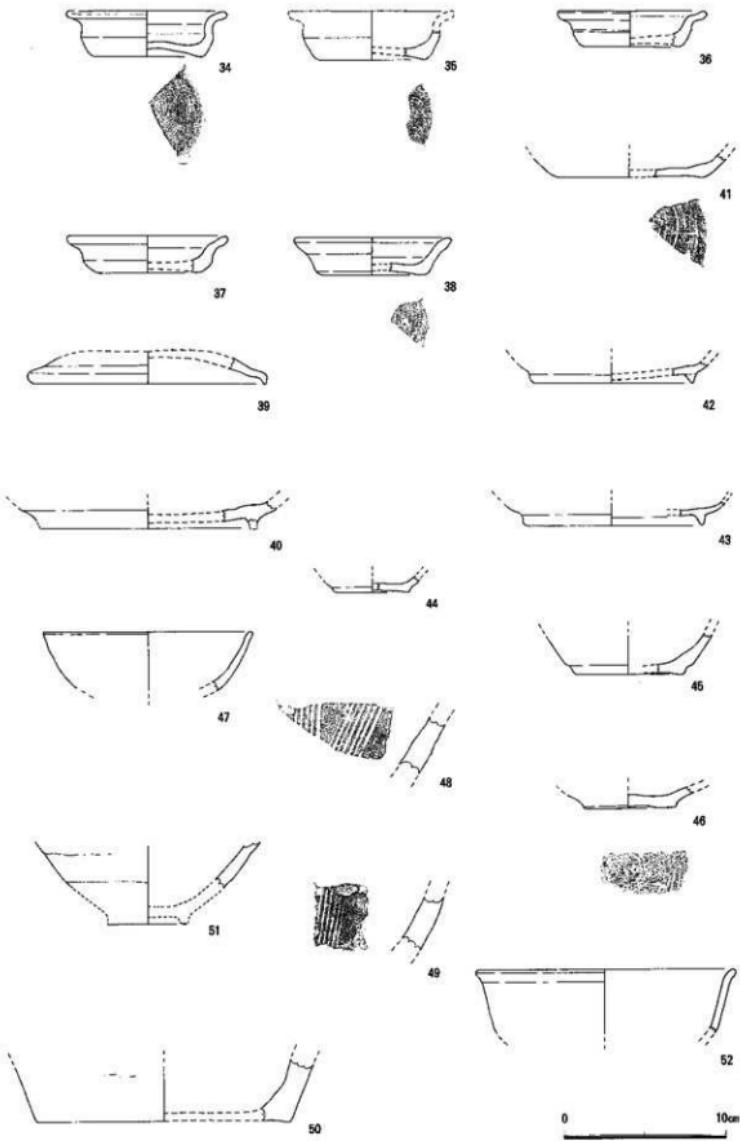
古墳時代の土器（第25図16～31）

土師器（第25図16～18） 16は口径20.3cmを計る口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部は大きく外反している。端部は丸く、内面の屈曲部より下方には横方向のケズリが施されている。17は頸部から肩部にかけての破片。頸部の径は14.0cmあまり、肩部内面には横方向のケズリが存在している。肩から頸にかけては器壁が厚く、口縁部に向かって薄くなっている。口縁部は外側に開くタイプになると思われる。18は頸部下半から肩部にかけての破片。内面下方には横方向のケズリ、上方には横ナデがそれぞれ施されている。頸部の径は15.0cmあまりである。

須恵器（第25図19～31）

蓋坏（第25図19～25） 19は蓋の天井部の破片で、中央付近にはヘラ状工具による切り離し痕がある。この部分は器壁が厚いが、それより下方は薄くなっている。天井部は丸みを持っており、外側下方及び内面下方には回転ナデが施されている。20は19と同様、中央付近にヘラ状工具による切り離し痕がある蓋天井部の破片である。調整も19と同様であるが、天井部外面に窯記号と思われる沈線がヘラ状工具で直線的に引かれている。21は口径12.1cm、器高4.1cmを計る蓋である。口縁部端部から上方に向かって内湾ぎみに上がり天井部にいたっている。天井部の中央付近にはヘラ状工具による切り離しの痕跡がある。色調は濃灰色で焼成、胎土とも良好である。22は天井の中央部を欠くもので、口径12.8cm、残存高3.2cmあまりを計る。口縁部はやや内湾して端部にいたっており、先端は丸い。全体的に器壁は薄い。23は口径12.6cm、残存高2.3cmを計る器高のやや低い蓋である。口縁部端部はやや尖りぎみで、淡灰色を呈している。24は口径10.3cmあまりの身で、下半部を欠く。立ち上がりは受け部の底から0.7cmあまりの高さで、若干外反して端部にいたっている。25も下半部を欠くもので、口径11.6cmあまりを計る。立ち上りは器壁がやや厚く、内傾して0.7cmの高さまで伸びている。端部は丸くやや尖っている。

高坏（第25図26～29） 26は脚上方部から坏にかけての破片で、脚基部の径4.1cmあまりを計る。脚部は下半部を欠くが「ハ」の字形に開くタイプのものと推定され、長方形と思われる透しが存在する。淡灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。27は坏部が外側に開いているもので、脚基部の径4.4cmを計る。脚部は基部から1cmあまりまではほぼ垂直に下がり、そこから外側に大きく開かれている。また、三角形のと思われる透しが穿てれているが、透しの上方は坏表面までいたっている。28は脚部の破片で、脚端部の径は9.4cmあまりである。脚部は「ハ」の字形に開いており、端部は0.7cmの高さまで内傾し、そこから「U」字形に下がって脚部にいたっている。淡灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。29は脚上方部から坏にかけての破片。脚基部の径4.5cmあまりを計るやや白ぼい灰色を呈した高坏。



第26図 第2調査区C地区出土遺物実測図III

臺（第25図30・31） 30は逆「ハ」の字に開く口縁部の破片で、口径11.3cm、頸部径8.5cmを計る。口縁部は頸部からのびる厚みをそのまま保ち、端部はやや丸みを持った面を持っている。器表面の調整はほとんどが横ナデであるが、頸から肩にかけての内面にはタタキの痕跡がある。淡灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。31は口径9.7cm、頸部径7.4cmを計る口縁部片である。頸部から口縁部にかけてはやや外側に開き、口縁部は幅1.1cmあまりの帯状の高まりが廻る。内面の下方にはタタキの痕跡がある。

古墳時代～奈良時代の瓶（第25図32・33） いずれも瓶の把手の部分の破片で、32は残存長3.8cmあまりで、基部の径2.8cmを計る。やや上方にそっており、端部は丸く、面取りされた痕跡が残っている。33は残存長6.8cmで、32と同様端部は丸く、面取りされた痕跡がある。器面には一部煤が付着しており、色調は暗黄褐色である。

奈良時代～平安時代の土器（第26図34～43）

灯明皿形土器（第26図34～38） 34は口径9.7cm、器高2.9cm、底部径6.8cmを計る。底は上げ底になっており、糸切りの痕跡がある。底から口縁部にかけては「S」字形の形態をなしている。口縁端部は丸く、調整は横ナデ及びナデである。35は灯明皿形土器の底部から体部にかけての破片。底部はやや上げ底ぎみで、糸切りの痕跡がある。底部の推定径6.6cmあまり。やや黒っぽい灰色を呈し、焼成は良好である。36は底部を欠くが、口径9.1cm、器高2.3cm、底部径6.2cmを計るものである。外形は「く」の字形に屈曲して口縁部が開き、端部は丸い。底部に糸切り、体部の内外面に横ナデが見られる。37は底からかるく外半して口縁部にいたっているもので、口径9.9cm、器高2.3cm、底部径6.6cmを計る糸切り底を持つものである。濃い灰色を呈し、胎土、焼成とも良好で、体部には横ナデが施されている。38は淡い灰色をした口径9.6cm、器高2.3cm、底径6.6cmを計る逆「ハ」の字形を呈したものである。

蓋坏（第26図39～41） 39は蓋になると思われる破片で推定口径14.6cmあまりである。口縁部は鳥の嘴状に屈曲して端部にいたっている。青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。40は坏の底部片で推定底径12.4cmを計る。底の端には高台が付いているが大半を欠く。濃い灰色で、調整は横ナデ及びナデである。41は糸切り痕を持つ坏の底部片。推定底径9.1cmで、横ナデ及びナデの調整が見られる。胎土、焼成とも良好。

土師器（第26図42・43） いずれも高台が付いている坏の底部片で、推定底径は42が9.8cm、43が11.0cmである。42は高台を貼付けた痕跡がよくの残っており、淡い褐色を呈している。高台は先端が丸く尖っていて、断面が三角形をなしている。43は全体的に薄造りで、内面の一部に煤が付着している。高台は、三角形の断面を持っている。

中世土師器（第26図44～47） 44は底径4.5cmを計る坏底部の破片である。全体的に風化して調整は不明であるが、糸切り底と思われる。底の厚み0.5cmあまりで、淡い褐色を呈している。45はやや厚手造りの底部から体部にかけての破片。推定底径6.6cmを計る。底部には糸切り痕があり、体部の内外面には横ナデが施されている。体部は内湾ぎみに外側に開いており、器高のやや高い坏になるものと思われる。46は皿と思われる底部の破片である。底部は風化しているが、わずかに糸切りの痕跡が残っており、0.8cmの厚みを持つ。底部から体部にかけてはやや外反して上方に上がっている。47は口径13.0cm、残存高3.9cmを計る碗形土器の破片。体部から口縁部にかけては内湾ぎみに外側に開いており、口縁端部は丸い。調整は横ナデである。

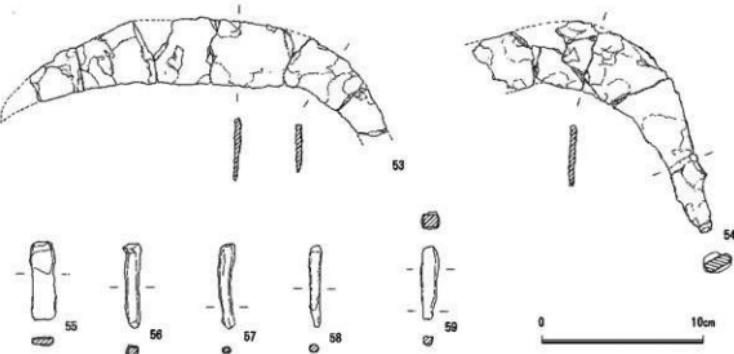
備前系焼物 (第26図48~50) 48・49は摺鉢の体部の破片。48は7本歯の櫛状工具で摺り目を入れている。厚みは1.3cmあまりで、茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。49は48と同様内側に摺り目が入っているが、その溝は浅く、断面はあざき色を呈している。50は壺の胴下部の破片で、推定底径15.9cmを計る。外面にはケズリ状の粗い横ナデが施されており、砂粒が右方向に動いている。内面にはナデが見られる。

その他の焼物 (第26図51・52) いずれも碗と思われるの破片で、51は黄瀬戸風の黄緑色の釉が内面及び外面上部にかかっている陶器で、内面には重ね焼きの痕跡が残っている。52は口径16.0cmを計る青磁と思われるものであるが年代的には新しいものである。

鉄器 (第27図53~59)

鉄鎌 (第27図53・54) 53は刃先及び柄の部分を欠くが、残存長21.0cmあまり、最大幅4.0cmを計る鎌である。背の部分は湾曲しているが、刃部は比較的直線である。厚みは最も厚い部分で0.4cmを計る。刃は片刃か両刃か不明。54は身の大半を欠く。残存長21.0cm、最大幅4.1cmで、柄は長さ6.0cm、最大幅1.8cmを計る。53よりは刃の部分が湾曲し、やや小形のものと思われる。厚みは身の部分で0.3cm、柄の部分で0.6cmを計る。柄の断面は長方形を呈している。

その他の鉄器 (第27図55~59) 55は長さ4.9cm、幅1.4cm、厚み0.3cmを計る板状の鉄器で用途は不明である。56~59は鉄釘と思われるものである。56は釘の頭の部分が残っている角釘で、下半部を欠く。残存長5.3cm、幅0.6cmあまり。57は断面が方形を呈したもので、残存長4.5cm、最大幅0.9cmを計る。58は長さ5.1cm、最大幅0.7cmを計り、先端にいくにしたがって幅が狭くなり、断面は丸い。59は残存長5.4cm、最大幅0.9cmを計る角釘と思われるものである。



第27図 第2調査区C地区出土遺物実測図IV

第4節 まとめ

今回の調査では第2調査区の西側に当たる緩斜面から土壌9、溝状造構5、掘立柱建物1を検出した。土壌は隅丸長方形と楕円形の2つに分けられるが、内部から遺物が検出されなかつたため時期、性格とも不明である。ただ、第1土壌では木棺状のものを安置したと考えられる土層が観察できたので、隅丸長方形の土壌は墳墓になる可能性がある。また、掘立柱建物は1間×3間のものであるが、単独に一棟だけ検出されていることや、谷間に横断するような場所に建てられていることなど通常の検出状況とは異なっており時期、性格とも明らかにできなかった。

出土遺物としては縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土器、陶磁器、石鐵、楔形石器、鉄鎌等があり、縄文時代から中世まで各時期のものがある。遺物の量が多いのは石器類、弥生時代末～古墳時代前期にかけての土器及び6世紀後半代の土器である。石器は黒曜石で作られたものが大半を占め、石鐵が最も多く、未成品を含んでいる。石鐵はすべて無茎のもので、基部のえぐりが三角のものと半円形を呈したものがある。これらの石鐵は小さな谷を挟んだ西側に存在しているラント遺跡から出土したものに類似しており、縄文時代前期頃のキャンプ的な集落が付近に存在していたものと推測される。また、弥生時代末～古墳時代前期及び6世紀後半代の土器は器種や出土量からみて集落に伴うものと思われ、地滑りや開墾によってそれが破壊されたものと考えられる。荒畠遺跡は標高70m～90mの緩斜面に立地している遺跡で、穴道湖南岸の高地には、今まで弥生時代の遺跡が知られていたが、縄文時代及び古墳時代～奈良平安時代のものは数が少なく注目される。

今回の調査で検出した遺物の中で最も注目されるのは灯明皿形土器と言われる須恵器である。この土器は最近、林健亮氏によって奈良時代の仏教関係遺跡からの出土例が多いことから、仏教に関する遺物で、灯明専用の土器と位置付けられた⁽¹⁾。荒畠遺跡では奈良時代から平安時代にかけての遺物が少ないと8点ほどの出土例があったので、灯明皿形土器について検討をしてみたいと思う。

島根県における灯明皿形土器は現在のところ約25の遺跡から出土しているが、出土遺跡の分布を見てみると穴道湖及び中海の南岸地域に18の遺跡が集中している。その他の遺跡は、松江北部の柴尾遺跡⁽²⁾他3遺跡、出雲市の三田谷I遺跡⁽³⁾、奥出雲の頬原町板屋皿遺跡⁽⁴⁾、それに石見部の浜田市石見国分寺跡⁽⁵⁾等があり、松江北部を除くと出土例は少ない。出土遺跡の種類は瓦を伴う寺院跡として、松江市の来美廃寺跡⁽⁶⁾、山代郷南新造院跡⁽⁷⁾、石見国分寺跡があり、報告されている出土数は山代郷南新造院跡が最も多く26点にも及び、他の寺院は1点～4点である。次に集落跡は安来市の高広遺跡、穴道町荻田遺跡⁽⁸⁾等11の遺跡があるが、各遺跡ごとの出土数は少なく1点～6点あまりである。その他、瓦塔を伴う仏教的な遺跡である安来市才ノ神遺跡⁽⁹⁾、水に係わる祭祀遺跡と考えられている出雲市三田谷I遺跡⁽¹⁰⁾、仏教関係の遺跡と推測されている東出雲町島田池遺跡⁽¹¹⁾、それに瓦を伴わない寺院跡である穴道町堤平遺跡等がある。このように灯明皿形土器は仏教関係や祭祀遺跡からの出土例が多く、この手の土器が仏教や祭祀と係わりが深いことを伺わせている。ところが、普通の集落跡からの出土例が多いことが問題となってくる。そこで、この問題を解く鍵として灯明皿形土器がどのような使い方をしているかを改めて検討してみたい。

まずは、煤の付着状況を調べて灯明としてどれだけの比率で使用されていたのか検証してみた。その結果、実見することのできた66点のうち26点から皿の内側に煤の付着が認められ付着率は39%

灯明皿形土器・灯明					共伴土器
	A	B	C	D	
I					 龜田池遺跡 8区 SB02
					 根尾丘遺跡 2号窯灰坑遺構
II					 勝負遺跡 SK14
					 龜田池遺跡 2区 SB02
					 才ノ神遺跡 SB01
III					 荒塚遺跡
					 猪見山遺跡 上段土器埋まり
IV					
					妙見山遺跡 加工段
V					 才ノ神遺跡 SB06

第28図 灯明皿形土器変遷図

あまりであった。ただ、総数の66点内、約60%が1／2以下の破片であるので灯明として使用された比率はそれより若干下がる可能性がある。遺跡の種類ごとでは、集落跡の板屋Ⅲ遺跡では6点中5点に付着が認められたが、他の遺跡では付着が認められないものが多いのは注目された。一方、仏教的な祭祀を行ったと考えられている島田池では17点中11点に認められる他、水に係わる祭祀を行っている三田谷Ⅰ遺跡でも半数以上に煤の付着が見られる。このように祭祀を行った可能性のある遺跡では灯明として使用されている確率が高いことは興味深いことである。ところが、瓦塔を伴って仏教的な色彩が強い才ノ神遺跡では灯明皿形土器7点に煤が認められなったことから、ここでは供え物の器や酒杯といった灯明以外の用途が考えられる。そして集落から出土しているこの手の土器に煤が付着していないものが多いのも灯明以外の使用があったものと思われる。また、北陸の明寺山魔寺は9世紀に創建された瓦を伴わない寺院跡で、ここから出土した灯明は100点以上に及ぶがそのほとんどが須恵器・土師器の無台环の転用品であることからも⁽¹³⁾、この手の土器が灯明皿専用器種として作られたか疑問である。このように灯明皿形土器は灯明以外に使用された可能性が高いと考えれる。

出雲地方以外で灯明皿形土器が出土しているのは北陸地方である。金沢市三小牛ハバ遺跡⁽¹⁴⁾や松任市横江遺跡⁽¹⁵⁾等から出土しているが、底部の切離し技法が出雲のものとは異なっており、時代もやや新しくなるようではあるが、出土量も少ない。また、8世紀中葉以降畿内で重要役割を果した京都府篠塚群では、出雲地方で出土する8世紀～9世紀の灯明皿形土器を生産している痕跡が現在のところ確認されていないない⁽¹⁶⁾。このように出雲地方における灯明皿形土器は他地域より出土例が多く、地元で生産されたものと思われる所以、次に灯明皿形土器の変遷を考えてみたい。

出雲地方で灯明皿形土器が出土している25あまりの遺跡内、遺構及び出土状態からみて同時期と思われる壺、蓋等の須恵器が共伴しているものを選びだして検討してみた。その結果、8世紀後半～末と考えられている高広偏年IV B期⁽¹⁷⁾のものが大半を占め(II期)、それよりやや古いIV A期が島田池遺跡8区SB02で見られ(I期)、IV期より新しいものとして徳見沖遺跡土器洞り⁽¹⁸⁾出土(III期)のものがある。また、器形を見てみると、体部の上方で小さく外側に外反するAタイプ、体部の中ほどから外側に大きく外反するBタイプ、Bタイプに近いがわずかに外反するCタイプ、底部から逆「ハ」の字形に開くDタイプの四つに大別できる。

現在のところ最も古いと思われるI期の島田池遺跡からはAタイプとBタイプが出ており、これらは他の土器と比べ器高が高く、やや大型である。II期になると新たにC、Dタイプが板屋Ⅲ遺跡2号溝状遺構や勝負廻遺跡SK14から出てくる。その他、この時期には島田池遺跡2区SB02のAタイプや才ノ神遺跡SB01のA、Bタイプ等、色々な形態の灯明皿形土器がこの時期に集中する傾向がみられる。Aタイプは「く」の字形に外反するものや丸く湾曲するもの、さらに口縁端部を軽く外側につまみ出しているものなど器形が定まっていない。また、AタイプとBタイプの中間的な形態を持つものまで出てくる。A、BタイプはI期のものに比べ器高は低くなる傾向があり、頸部から口縁端部にかけてのくびれが小さくなるようである。III期になるとAタイプはくびれがわずかに見られる程度になる。また、B、Cタイプは見られなくなり、直線的に開くDタイプが混在し定形化することなく9世紀前半に消滅していることは興味深い事実である。消滅後の9世紀末には山岳信仰に係わる祭祀遺跡と考えられている木次町妙見山遺跡から土師器の环を転用した

灯明が出土している。このような上師器転用の灯明は10世紀中葉のオノ神遺跡 S B 0 2 からも出土しており、灯明は9世紀末以降、土師器を転用したものに変わってくるようである。また、安来市のオノ神遺跡 S D 0 6 から12世紀の綠釉陶器と共に出土したの京都府の篠窯跡産の灯明皿形土器は、Bタイプに入るものであるが、出雲地方で出ているこの手の土器とは年代に隔たりがあることや底部切離しの技法の異なること、さらに9世紀末以降、灯明が土師器の坯を転用するようになって消滅していること等から考えて系譜が異なるものと思われる。

それでは、灯明皿形土器が8世紀後半に集中し、多様な形態をなしているのはなぜであろうか。第一に考えられることは、この器形の土器が煤の付着状況からみて灯明として使用された比率が比較的低く、灯明専用の土器として認められないことである。すなわち、瓦塔を伴うオノ神遺跡で出土した7点の灯明皿形土器や集落跡から検出されたこの手の土器に煤が付着していないのが多いことから共軸用の器や酒杯等といった他の使用形態が考えられ、用途が多様化しているため器形が定着せず、短期間しか生産しなかったものと思われる。

ところで、灯明皿形土器が集中する8世紀後半は国分寺が創建して間もない時期であり、須恵器窯跡が各地域に分散して窯跡が作り出される直前の段階にあたる。出雲地方では古墳時代後期に一貫した管理体制のもとで生産されていた松江市の朝駒・大井地区の窯跡群は奈良時代になても中心的な役割を果たしてきたと考えられる。ところが、松江市忌部地区に新たに須恵器窯が出現することや須恵器窯跡とは性格が異なる私的な瓦窯が現われるなど複雑な様相がこの時期に現れてくる。松江市忌部の湯崎窯跡⁽¹⁰⁾は、意宇勢力が出雲の玉作を掌握する過程の中で出てきたものと考えられ、官窯的性格を持っている。この窯跡からはヘラ書き土器や灯明皿形土器を焼いていたことが知られており、ここで焼かれたヘラ書き土器は玉湯町蛇喰遺跡や出雲国守から出土している⁽¹¹⁾。この窯跡の出現は須恵器窯跡が分散していく鍵を握っているものと推測され、看過するとの出来ない重要な遺跡である。また、灯明皿形土器が最も多く出土している松江市の山代郷南新造院は、寺に隣接する小無田II瓦窯跡⁽¹²⁾で瓦が焼かれ、出雲国分寺や国分尼寺、安来市の教吳寺等も寺の近くで瓦を生産している。このように出雲地方では朝駒・大井地区で一本化されてきた焼き物生産が奈良時代になると瓦と須恵器に分かれるとともに、その後、他の地域でも須恵器窯が出現するなど複雑化していく。このように一貫した生産体制が崩れたことが9世紀になって本格的に須恵器窯が出土全体に分散していく要因になったものと考えられ、この時代の流れとともに瓦生産と関連のある仏教関係遺跡からの出土が多い灯明皿形土器は定形化せず短期間に衰退していったと推測される。いずれにせよ、この問題については朝駒・大井地区の奈良時代の須恵器窯跡や湯崎窯跡の本格的な調査及び灯明皿形土器の出土例の増加を待って再検討する必要がある。

出雲地方の灯明皿形土器は8世紀後半に集中してみられ、定形化するこなく消滅するようである。また、用途については確かに仏教関係遺跡との関係は否定できないが、灯明専用のものではなく酒杯や供物を入れる器として使われた可能性があり、仏教を含めた祭祀関係に利用されたものと推測される。荒畠遺跡から出土した灯明皿形土器は、煤の付着が認められないことから何らかの祭祀関係に伴っていたものと考えられる。

註

- 1 林 健亮 「灯明皿型土器から見た仏教関係遺跡」『出雲古代史研究』第10号 2000年
- 2 松江市教育委員会 『宮尾古墳群発掘調査報告書』 1996年
- 3 烏根県教育委員会 『二田谷Ⅰ遺跡』「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』 2000年
- 4 烏根県教育委員会 『板屋Ⅱ遺跡』「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 5」 1994年
- 5 浜田市教育委員会 『石見因分寺跡第1期調査概報』 1989年
- 6 烏根県教育委員会 『来美廬寺』「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書12」 1998年
- 7 烏根県教育委員会 『島根県松江市山代町所在四王寺跡』「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書IV」 1985
〃 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書V』 1988
〃 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書X』 1994
- 8 兴道町教育委員会 『萩田遺跡』「兴道町歴史叢書」 1998
- 9 烏根県教育委員会 『才ノ神遺跡』「一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14」 1998
- 10 註3と同じ
- 11 烏根県教育委員会 『島出池遺跡』「一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区W」
- 12 福井県清水町教育委員会 『越前・明寺山廢寺』「清水町埋蔵文化財発掘調査報告書IV』 1998
- 13 松山和彦 『北陸における古代寺院の一様相』「清水町埋蔵文化財発掘調査報告書IV」 1998
- 14 松任市教育委員会 『東大寺領横江庄遺跡II』 1996
- 15 京都府埋蔵文化財調査研究センター 『篠島跡群Ⅱ』「京都府遺跡調査報告第11冊」 1989
- 16 烏根県教育委員会 『高庄遺跡発掘調査報告書』 1984
- 17 烏根県教育委員会 『徳見津遺跡』「一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集」 1996
- 18 山本 清 『山陰の須恵器』「島根大学開学十周年記念論文集」島根大学 1960
- 19 片岡詩子 『土器の特徴と年代』「蛇喰遺跡」玉湯町教育委員会 1993
- 20 松江市教育委員会 『小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報』「松江市文化財調査報告書 第75集」

第4章 ラント遺跡

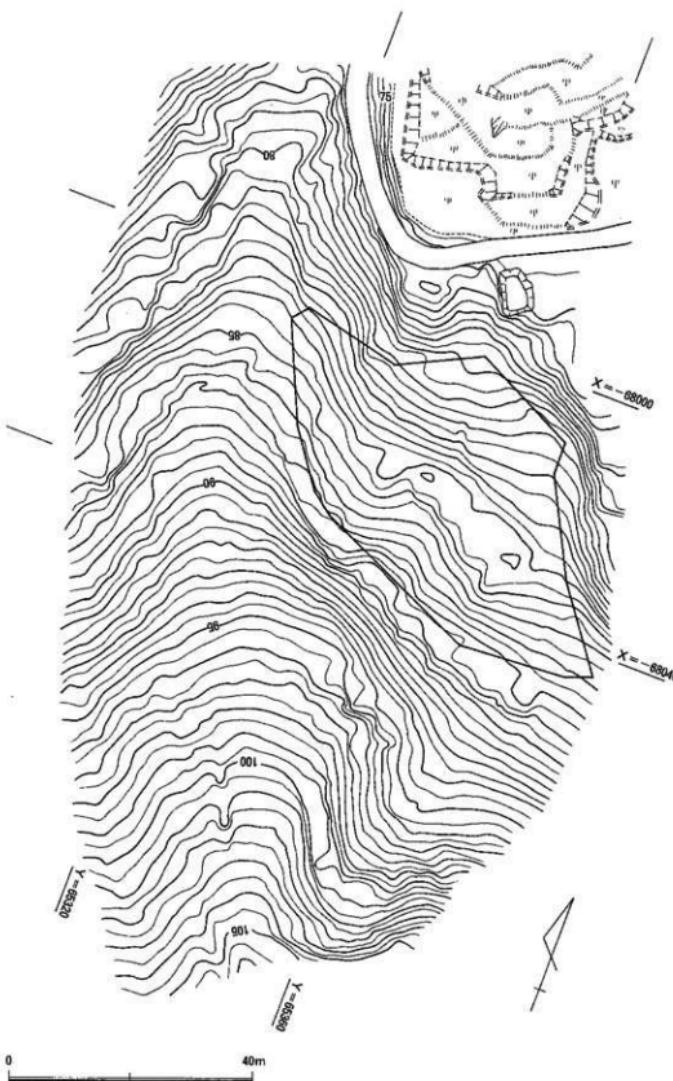
第1節 位置と調査の概要

ラント遺跡は八束郡穴道町伊志見704番地外に所在している。ここは伊志見の谷に沿って伸びる標高177mを頂点とした緩やかな北向きの斜面に当たる。東側には小さな谷を隔てて荒畠遺跡が存在しており、西側は深い谷となっている。また、北側にはやや開けた谷が出雲平野に向かって伸び、この谷の山際には古墳時代の須恵器が出土している上ソリ田遺跡等の遺跡が知られている。調査対象地は標高70m～110mにおよび、中央に北向きの尾根が伸び、その両側に小さな谷がある。西側の谷は標高90mあたりまでは広んだ地形をなしているが、それより下方は緩やか斜面が続いている。斜面の北東側には小さな谷があり、その下がった所には水田耕作用と思われる小さな池が造られている。

調査はまず遺跡の範囲、性格を把握するため平成10年11月4日～19日にかけて34本のトレンチを調査対象地の尾根や斜面に設置して試掘調査を行った。その結果、北東斜面の標高79m～88mのところから須恵器、土師器、石鏃、石斧等の遺物と數十点の黒曜石片が見つかったため約1600m²について平成11年11月1日～12月10日にかけて県職員1名、調査補助員1名の計2名の体制で本調査を実施した。

ここはちょうど、荒畠遺跡で黒曜石製の石器が数多く見つかった地点と小さな川を挟んで相対する位置に当たるため荒畠遺跡との関連が注目されるとともに、縄文時代の石器工房跡の存在が考えられたので黒曜石のチップ片及び石器について一点づつ出土地点を押さえながら発掘作業を進めるにした。黒曜石片は表土を剥ぐとすぐに目に付くようになり、最終的には700点あまりを確認したが、遺物としては8点あまりの縄文土器、數点の須恵器、土師器、そして多量の石器が見つかった。石器には石鏃、楔形石器、スクレイパー、石斧等があり、石鏃等の未製品も數多く出土したことからこの付近で石器を製作しているものと思われたが、工房跡の遺構は検出できなかった。出土遺物は調査区の東側の緩斜面から見つかったが、特に急斜面から緩斜面に移る標高83m～84m付近で大きく東西2か所分かれて密に分布し、それより下方は標高が下がるにしたがって数が少なくなっていた。遺物が集中的に出土した斜面は、地形が不規則であるためトレンチをいれて下層の観察を行ったところ遺物包含層の下に旧表土と思われる黒っぽい土層の存在が明らかになった。さらに遺物出土地の上方には地滑りによってできたと思われる谷状の窪みがあることから遺物が多く出土した急斜面から緩斜面に移る付近は地滑りによって形成されたものと判断した。そのため古墳時代と縄文時代の遺物が同一の土層から混在して出土するとともに住居跡等の遺構が検出できなかったものと思われる。

今回の調査で遺構を検出することはできなかったが、この付近に季節ごとに食料を求めて移動するキャンプ的な縄文時代の小集落が存在していたものと思われ、そこで石鏃やスクレイパー等の石器を製作し、主に獣の狩猟を行っていたものと考えられる。この遺跡は縄文時代の集落の変遷や実態を知る上で重要な史料となりえるものと思われる。



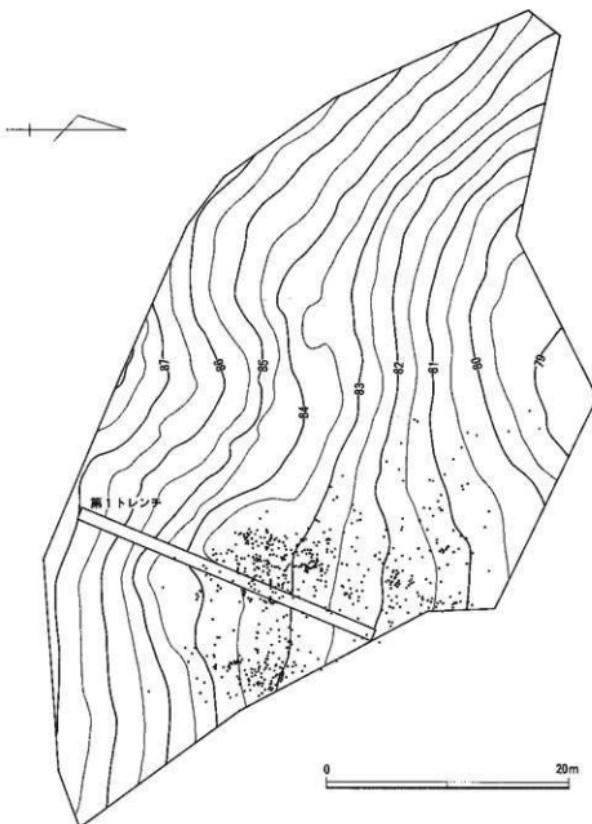
第29図 調査前地形測量図

2. 出土遺物

今回の調査では縄文土器、須恵器、土師器それに石鏃、楔形石器、スクレイパー、石斧等の石器が出土した。以下その概要を述べる。

土 器 (第32図 1~12)

縄文土器 (第32図 1~8) いずれも深鉢と思われる土器の破片で、ほとんどが条痕か無文のものである。1は淡茶褐色を呈した0.6cmあまりの厚みを持つもので、外面には棒状の工具で横方向に二列並行に刺突文が施されている。刺突は上方のものが径0.2cmの円形状の形をなしているのに対



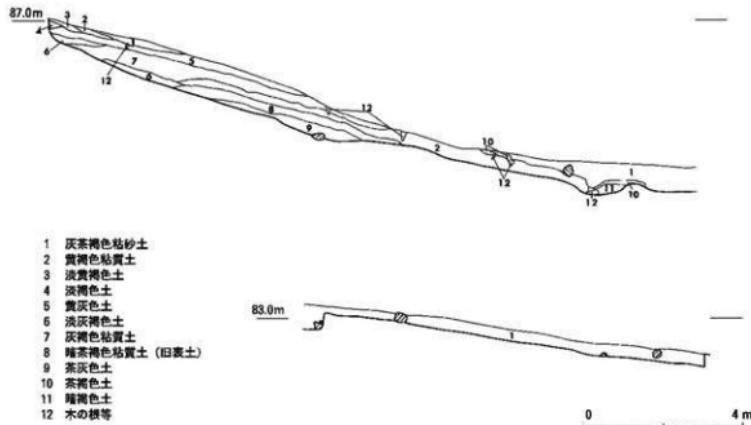
第30図 黒曜石片等検出状況図

して下方のものは三角形の形状である。いずれも刺突は浅くわずかに痕跡が残っているにすぎない。調整は風化しているので明確ではないが外面は無文、内面は条痕が施されているものと思われる。2は1と同一個体のものと思われるもので、上方に二列の刺突文が施され、4cmあまり下がったことにも1列の刺突文が廻る。3～8は無文の粗製土器でほとんどが風化しているので調整は明確ではないが3は外面、6～8は内面に貝殻による条痕が施されているものと思われる。また、4の内面には指でナデのような痕跡がある。

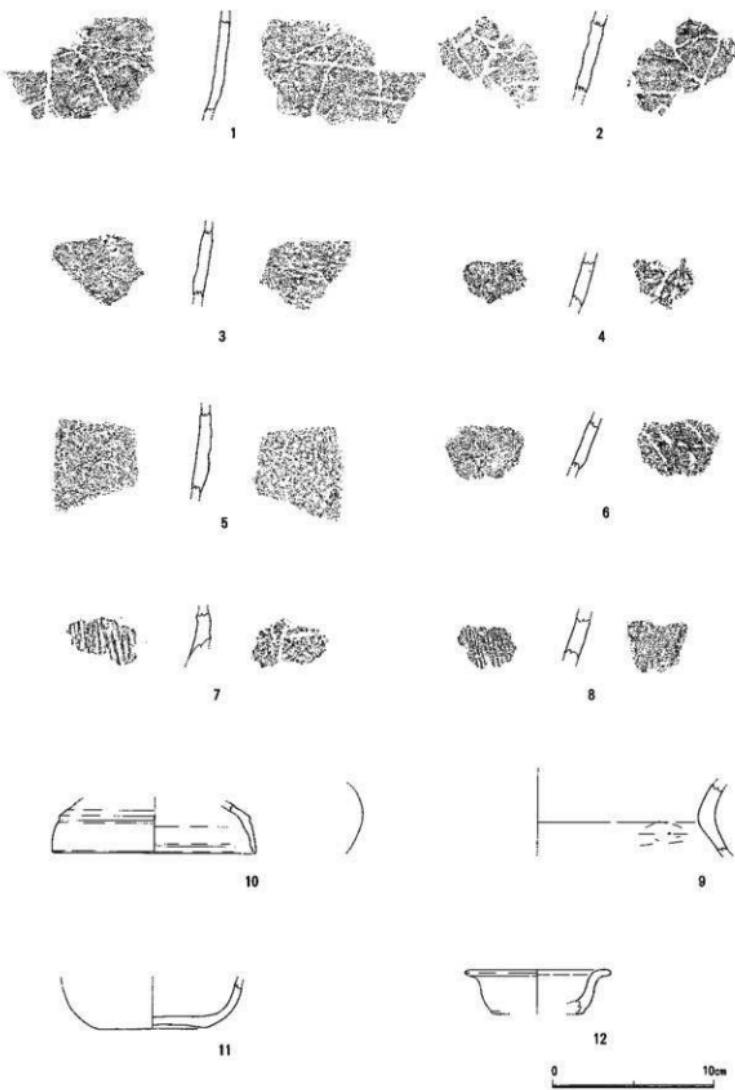
土師器（第32図9）「く」の字形に屈曲した頸部の破片で、淡黄褐色を呈した焼成良好のものである。内面上方には刷目、下方にケズリがそれぞれ施されている。また、外面にも刷目が見られ、胎土は砂粒を含む。

須恵器（第32図10～12）10は蓋環の蓋で、口径12.6cm、残存高3.1cmあまりを計る。天井部と口縁部との境には段を有し、口縁端部にも段を持つや古式タイプの須恵器である。口縁端部の段は端から0.5cm上方に粘土紐を巻いてできたものと思われ、外面の段は口縁部と天井部を接合する時に出来たものと考えられる。色調は外面がやや黒っぽい灰色で、内面は淡青灰色を呈している。また、器面には横ナデの調整が施されている。11は壺の底部片。底径6.8cmを計る糸切り底で、やや上ヶ底ぎみになっている。底の厚みは0.6cmあまり、調整は横ナデが施されている。12はいわゆる灯明皿形の須恵器で、口径8.6cm、残存高2.8cmを計り、底部を欠く。口縁部は外側に外反しており、端部は丸い。底部は糸切りがなされていたものと思われる。器面には横ナデが施され、色調は淡黄灰色で、胎土、焼成とも良好である。

石鐵及び未製品（第33図13～35）これらの石鐵は22を除きいずれも黒曜石製の無茎石鐵である。13～15はえぐりが三角形を呈し、脚部が尖っているものである。13は長さ2.0cm、幅1.6cm、えぐりの深さ0.5cmを計る鐵である。14は片方の脚部を欠くもので、長さ1.8cm、推定幅1.4cm、えぐりの深



第31図 第1トレンチ土層図

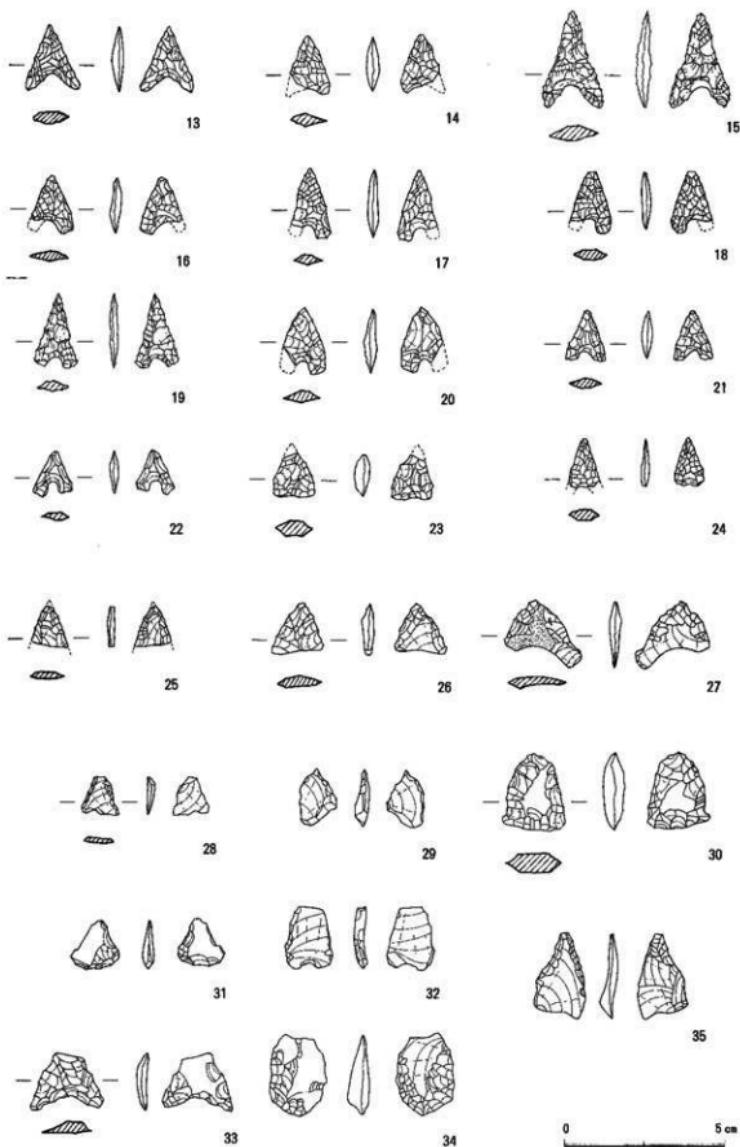


第32図 出土遺物実測図 I

さ0.2cmあまりのやや厚手のものである。両側縁は若干の丸みを持つ。15は側縁中央部がやや外湾して先端にいたっているもの。長さ3.0cm、幅1.5cmを計る。脚部は先端にいくにしたがって幅が狭くなり先は尖る。16～23は基部が円弧状に凹み、脚部の先端が尖っていないものである。16は脚部の片方を欠く。側縁は一方は直線的であるが、片方はやや丸みを持ち内湾ぎみである。脚端部は斜め上方向に直線的に伸びている。長さ1.8cm、推定幅1.4cmを計る。17は長さ2.2cm、推定幅1.2cmのやや細長い三角形を呈した鎌で、脚端部は鈍角の二辺からなっている。18は先端及び脚部の片方を欠く。両側縁は直線的に伸びているが、脚部は丸い。残存長は2.0cmである。19はやや細身で先端が鋭く尖っているものである。長さ2.3cm、幅1.4cmで、脚端部は鈍角の二辺からなる。20は両側縁が内湾しているもので、脚部の片方を欠く。脚端部は斜め上方向に直線的に伸び、えぐりの幅がやや狭い。長さ2.1cm、推定幅1.6cmを計る。21は長さ1.5cm、幅1.2cmあまりのもので、両側縁は直線的に伸び先端は鋭角に尖る。脚端部はほぼ水平に直線的に伸びる。22はサヌカイト製の鎌で、長さ1.4cm、幅1.2cmを計る正三角形に近い形態を持っている。基部は半円状に0.4cmえぐられており、脚端部は上方向に直線的に伸びる辺がある。23はえぐりのない平基の無茎鎌と呼ばれているものである。先端を欠くが、推定長1.6cm、幅1.3cm、厚み0.5cmあまりを計る身の厚い鎌である。側縁は片方が内湾ぎみでもう一方が外湾ぎみのややいびつな形態を持っている。基部は若干凹んでいるがほぼ直線的である。24は脚を欠くものである。細身の鎌で、両側縁から先端にかけては鋭く尖っている。25～35は石鎌の未製品と考えられるものである。25は基部を欠くもので、両側縁は加工しているが身の部分は未加工である。先端は鋭く、両側縁は直線的な辺となっている。26は平基の無茎鎌の形をしているが、片面の身の部分が未調整である。27は長さ2.1cmあまりの幅広のもので、片方の脚を欠く。基部あたりが未加工。28は長さ1.2cm、幅1.2cmを計る。片面は両側縁のみ加工した痕跡が残っているが、もう一方の面はまったく手をつけていない。29は側縁に調整した剥離痕があり、鎌としての形にならないものである。30は平基無茎鎌の未製品と思われるもの。基部及び両側縁に加工痕があり、先端はまだ丸みを持っている。31は長さ1.5cm、幅1.5cmあまり。まだ、基部は丸く未完成であるが、側縁から先端にかけては鋭角で、縁の一部に加工痕がある。32は基部のえぐりを加工して鎌としての形を整える段階のもので、長さ2.0cm、幅1.5cmを計る。33は脚部の形が出来上がっているもので、身の上半部を欠く。片面に未調整のところがある。脚は先端に行くに従って幅が狭くなり先が尖っている。基部は三角形にえぐれている。34は鎌としての形が整っていない段階のもので梢円形を呈している。縁周辺部には加工痕がある。35は鎌の先端を整えようとしているもので、基部は未整形である。側縁の上半部には調整した剥離痕があるが下半部は未調整のものである。

異形石器（第34図36）36は糸巻形を呈したもので、身の中央部が湾曲してくびれ、上下の端が直線的な辺をなしている異形の石器である。長さ1.6cm、上下端の幅1.2cm、くびれ部の幅0.7cm、厚み0.5cmを計り、器面には調整した剥離痕が全面に施され、上下の端の断面は尖っている。全体的に扁平で、黒曜石製のものである。

楔形石器（第34図37～47）いずれも黒曜石製である。全体的に大きいもの（37・38）幅があるもの（39～45）細身のもの（46・47）に分けられる。37は長さ3.0cm、最大幅2.4cmを計る梢円形を呈したもので、断面は両端が尖り、中央部分が膨らんでいる。最大の厚みは1.4cmあまりである。下端にはつぶれが見られ、上部には不規則な剥離面がある。38は細長のやや歪な台形をなしている



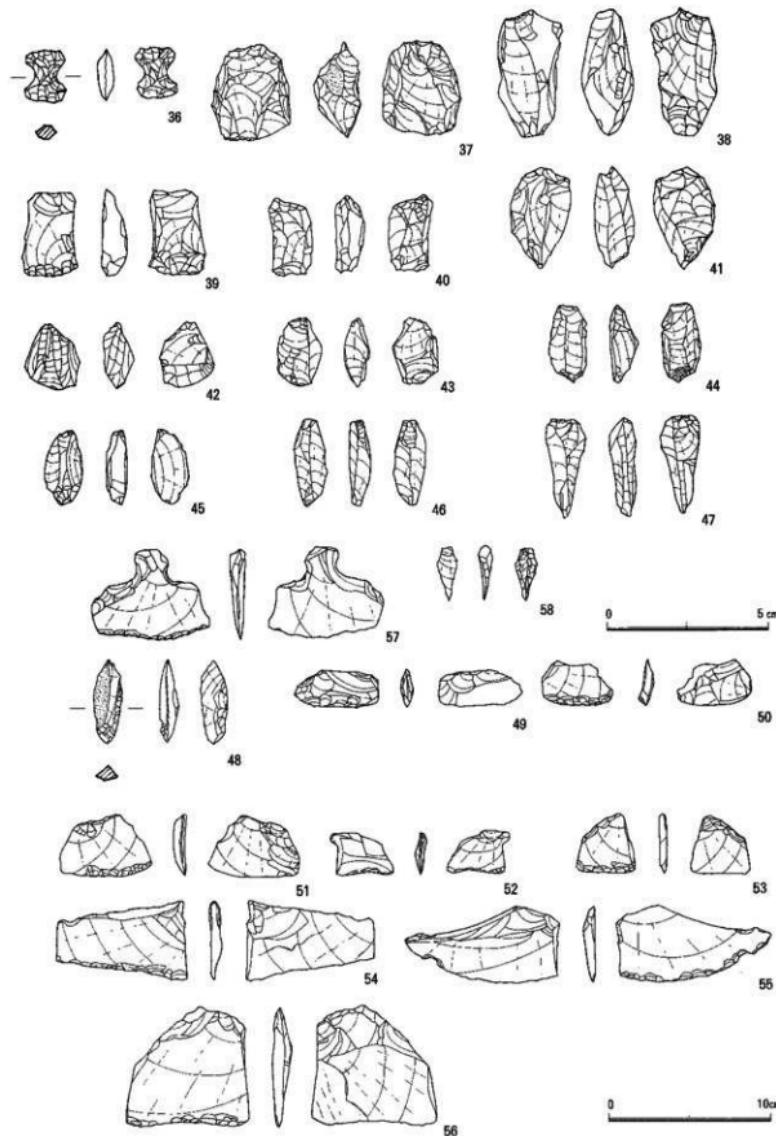
第33図 出土遺物実測図Ⅱ

もので、下部は丸く尖っている。長さ4.0cm、最大幅2.0cmを計る。断面は下から1.5cmあまり上がったところが最も厚く内湾ぎみに膨れている。その厚みは1.6cmあまりである。上下端にはつぶれが存在し、不規則な剥離面とフィシャーが見られる。39は上端につぶれ、上下端に不規則な剥離面がみられるもので、長さ2.6cm、最大幅1.6cmを計る長方形を呈している。40は長さ2.5cm、最大幅1.2cmあまり。上部に不規則な剥離面が見られる。側縁はいずれも若干内湾しており、上端は斜め上方に伸びる刃を持つ。41は上方は梢円形を呈し、下方に行くにしたがって幅が狭まり、先端は尖るもので、上下端に不規則な剥離面がある。42は長さ2.1cm、最大幅1.6cmを計る。上部につぶれがあり、上からの加熱によって生じたと思われる剥離面が見られる。43は上下端につぶれがあり、衝撃を上下から受けたものと思われる。長さ2.1cm、最大幅1.4cmあまり。44は長さ2.5cm、最大幅1.1cmあまりで、上下端につぶれと不規則な剥離面がある長方形状の形態を呈している。45はやや丸みを持ち先端が尖る梢円形状の形態を持つ。長さ2.4cm、最大幅1.2cmあまりを測る。46は細長い棒状のもので、長さ2.7cm、最大幅0.9cmあまりを計る。上部には上からの加熱によってできた不規則な剥離面がある。47は上部が幅が広く下方に向かって尖っているもので、長さ3.1cm、最大幅1cmを計る。

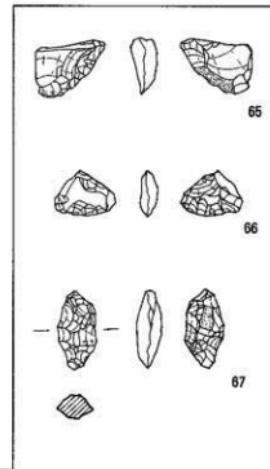
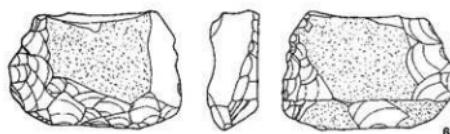
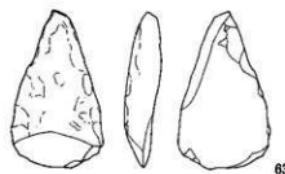
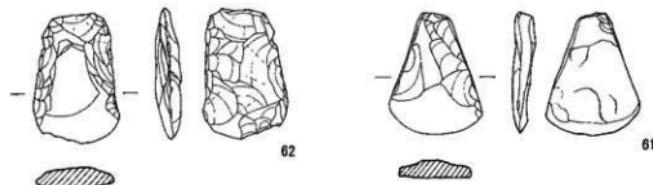
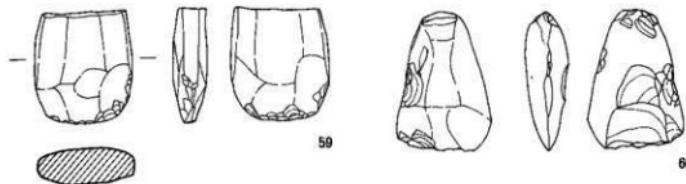
スクレイパー（第34図48～56）48は長さ5.2cm、最大幅1.7cmを計る木の葉の形を呈したもので上下の先端は尖る。一部自然面が残っているが横剥ぎされた素材に側縁の片方に調整加工して刃部を形成している。加工は片面だけに施され、石材は黒曜石である。49はサヌカイト製のもので、横幅5.2cm、縦長2.2cmを計る。刃部は片面だけに加工が施してあり、端には上方に伸びる刃を持つ。50は上方を欠くもので、下方の一辺に調整加工して刃部を作りだしている。横幅4.5cm残存縦長2.7cmを計るサヌカイト製。51は横剥ぎされた黒曜石の素材を用いたもので、下方の一辺に押圧剥離を行って刃部を形成している。刃部はやや円弧状の丸みを持ち、片面のみに加工痕がある。横幅5.6cm、縦長3.8cm、厚み0.7cmを計る。52は刃部の一部を欠くもので、残存横幅3.7cm、縦長2.6cmあまりのサヌカイト製。刃部はやや内湾しており、調整加工は両面に施している。53も刃部の一部を欠いている。下方の一辺に片面だけ調整加工して刃部を形成している。残存横幅3.6cm、縦長3.6cmを計る。54はサイドが欠けているが残存横幅8.1cmを計る大形のものである。石材はサヌカイト製で、刃部は若干の反りを持って凹んでおり、片面だけ調整加工している。縦長は基の部分が4.9cm、先端が2.5cmを計り、端に行くにしたがって狭くなっている。55は刃部の一部を欠くもので、残存横幅9.5cm、縦長4.8cmあまりのサヌカイト製。刃部は円弧状に外側に反っており、サイドは尖っている。刃部は片面に押圧剥離を行って調整加工している。56は横幅7.8cm、縦長7.2cmを計る大形のもので、石材はサヌカイト製。下方の一辺に片面だけ調整加工して刃部を形成している。刃部は若干内側に反っている。

石匙（第34図57）57はつまみを持ついわゆる横型の石匙と呼ばれているもので、残存横幅3.6cm、縦長1.9cm、つまみ部の長さ0.9cmを計る。刃部は外側に若干張り出で円弧状を呈し、片面に押圧剥離を行って刃部を形成している。つまみは基部から外反して上部に伸び、先端は丸い。石材はサヌカイト製である。

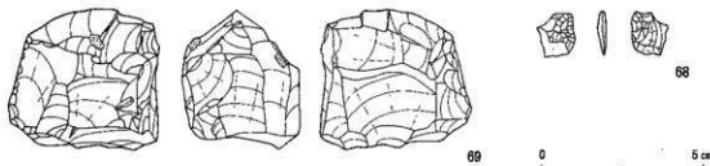
小形ナイフ（第34図58）58は長さ1.7cm、最大幅0.6cmを計る小形のナイフになると思われるものである。上端は0.4cmあまりの直線的な刃をなし、そこから0.5cmあたりまで側縁が「ハ」の字型に開き、その下方は先端に向かって鋭角に尖っている。素材は黒曜石を縦剥ぎした剥片を用い、両側縁の片面だけ押圧剥離を行って刃部を形成している。



第34図 出土遺物実測図III



0 10cm



第35図 出土遺物実測図IV

石斧（第35図59～64）59は磨製石斧で基部の上半を欠いている。残存長7.2cm、最大幅6.1cmを計る。正面と側面との間に稜があり、断面は角丸長方形を呈する。刃は円刃ではっきりした刃面を持つ。刃縁には使用痕跡と思われる剥離が存在している。60は長さ8.5cm、最大幅5.9cmを計る磨製石斧である。基部は丸く、刃部に向かって「ハ」の字形に開き、刃部から内側に傾いて刃縁にいたっている。断面は長円形で、厚みは2.1cmあまりである。刃部に存在している剥離痕は刃こぼれと思われる。61は長さ7.6cm、最大幅5.7cmあまりを計る磨製石斧で扁形をしている。刃部は円刃で外側に円弧状に張り出し、断面は船刃である。断面は角丸長方形で、厚みは1.1cmを計る。片面の基部には大きく剥げ落ちた痕跡がある。62は刃部と基部の一部が磨製の長さ8.2cm、厚み1.5cmあまりのものである。幅は上方がやや狭く3.6cm、刃部が5.2cmを計る。刃は一部刃こぼれがあるが円弧状の円刃と思われ、断面は船刃。基部の調整は縁から中央部に向かって敲打されている。63は基端が尖り刃部に向かって開いているもので、長さ9.7cm、刃部幅5.5cm、厚み2.0cmを計る。刃部は磨製、基部は敲打で作られている。刃は円刃、断面は片凸刃である。64は基部の大半を欠く扁平打製石斧である。残存長さ7.2cm、刃部の幅10.6cmを計る。刃部及び基部の一部に調整を加えていないところがある。刃は両平刃になると思われる。

二次加工のある剥片等（第35図65～69）65は横剥ぎの剥片の一辺に調整を加えた黒曜石製のもので、長さ1.5cm、幅2.1cmを計る。66は下部の一辺に押圧剥離を行って刃を形成しているものでスクレイバーの一部になる可能性がある。67は長さ2.4cm、最大幅1.2cmを計る。上下端が尖り、中央部分が膨らんでいる形状をなしている。縁の部分に調整が施してある。68は刃の一辺に調整を加えた黒曜石製のものである。69は石鎚等を作成するため剥片をとった母石となる黒曜石の石核と思われるもので、長さ4.3cm、幅4.7cm、厚み3.6cmを計る。

第3節 ま と め

今回の調査では遺構を検出することが出来なかつたが多数の石器と少量の土器が出上したので、これらの遺物からラント遺跡の時期及び性格についての検討してみることにする。

土器について

出土した土器はすべて破片で、縄文土器12点、須恵器26点、土師器14点である。須恵器は6世紀中葉と奈良・平安時代のものに分けられ、土師器は古墳時代のものである。石器の時期を示していくと考えられる縄文土器は、ほとんどが条痕か無文のもので年代の決めてにはならないが、わずかに刺突文の痕跡が残っている土器片が2点ある。この2つの土器片は同じ個体の破片と思われ、上方に1列、下方に2列の計3列の刺突文が施されている。刺突文は風化していく磨滅がひどいため、菱形、長丸、三角等さまざまな形態を呈しており、その長さは0.2cm前後で小さい。刺突文は縄文時代前期の羽島下層式や轟式で見られ⁽¹⁾、島根県下でも、松江市西川津遺跡、金城町岩塚II遺跡等から出土している。西川津遺跡の海崎地区から出土した刺突文土器は縄文土器の中で40%を占め、横向方に施文したA類では2列～8列にわたって文様を施している⁽²⁾。岩塚II遺跡では羽島下層II式に併行する3の字状、北白川下層併行のD字形、C字形の刺突文が出ており前期前葉に位置付けられている⁽³⁾。ラント遺跡の刺突文土器は文様の形にばらつきが見られるが、2列に文様を施しているところは相対して刺突が見られることから爪形文の上下端の痕跡が残っているもの

とも考えられ、織維が混入していないことと合わせて、ここでは一応、縄文時代前期に位置付けておくことにする。

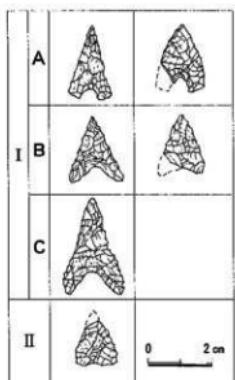
石器について

出土した石器は石鏸、楔形石器、スクレイバー、石斧、剥片等で、総重量1,549.59 g、総個体数782点である。その内、剥片が736点を占め、成品、未成品は46点で全体の6%あまりである。また、剥片は0.2 g～1.0 g のものが最も多く43.3%で、続いて1.0 g～3.0 g (24.4%)、0.01 g～0.2 g (18.3%)、5.0 g～(8.7%)、3.0 g～5.0 g (5.3%) となっている。これらの剥片はほとんどが黒曜石で、石核から石器の原体を取り出す時に出る剥片が量的には多く、調整段階の剥片がそれに続く。石核と思われるものは1点しかなく、原石は検出できなかった。成品及び未成品は石鏸が最も多く全体の50%を占め、それに続いて多いのが楔形石器で、以下、スクレイバー、石斧の順になっている。

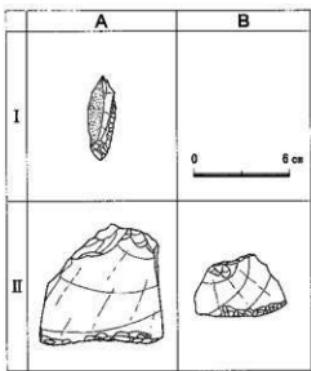
これらの石器は出土している土器から縄文時代前期ころと推定されるが、時期の分かる土器の出土量が少ないので、発掘調査で検出されている島根県下の縄文時代の石器と比較して時期を決定することにする。対象にした遺跡は、調査の行われている良好な中期の遺跡がないので早期～前期と後晩期の遺跡を取り上げた。早期～前期の遺跡としては、神戸川上流の頓原町板屋Ⅲ遺跡⁽⁴⁾、朝酌川の川沿いにある松江市西川津遺跡⁽⁵⁾、石見山間部の瑞穂町堀田上遺跡⁽⁶⁾、金城町岩塚Ⅱ遺跡⁽⁷⁾、石見海岸部の日脚遺跡⁽⁸⁾である。そして後晩期遺跡として出雲山間部の神原Ⅰ遺跡⁽⁹⁾、森遺跡⁽¹⁰⁾、出雲市の三田谷Ⅰ遺跡⁽¹¹⁾、石見山間部の九郎原遺跡⁽¹²⁾、ヨレ遺跡⁽¹³⁾、水田ノ上A遺跡⁽¹⁴⁾を対象にした。

まず、石器の組成について見てみると石鏸、スクレイバー、楔形石器、石皿・磨石の組合せが草期～前期の遺跡でほとんど出土している。これらは、狩猟、動物等の解体、石器作り、料理の道具が一通りセットで揃っていることになる。ラント遺跡でも石皿は検出できなかったが他はすべて揃っており、石器の組成は早期～前期の遺跡に近いといえる。その他の石器で注目されるのは魚を捕る網に用いられた石錐である。石錐は比較的大きな川が存在している板屋Ⅲ遺跡、西川津遺跡で出土しているが、谷の緩斜面に存在している岩塚Ⅱ遺跡や丘陵地の日脚遺跡では検出されていない。これらの遺跡の規模を見てみると動物を捕獲する狩猟中心の集落と考えられる岩塚Ⅱ遺跡、日脚遺跡は小規模で季節ごとに移動するキャンプ地的な様相を呈しているのに対し、魚と動物の両方を捕獲していたと推定される板屋Ⅲ遺跡、西川津遺跡は規模が大きく拠点的集落の様相を持っているものと思われる。このようにこの時期には、2つおりの性格を持つ集落が存在していたことが明らかになったが、ラント遺跡は小規模で石錐を持たないことから狩猟を中心としたキャンプ的な集落になるものと思われる。

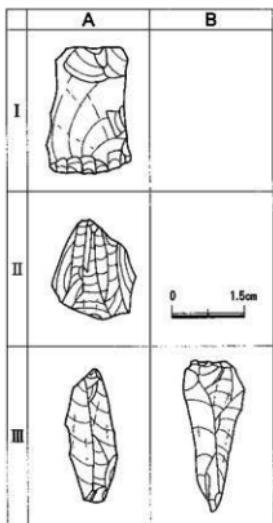
後晩期の石器を見てみると楔形石器がほとんど無くなる一方で、石鏸になると思われる打製石斧や砥石、石錐、石匙が増え、新たに収穫具の石鏸、石包丁そして装飾品である玉類が出現する。石鏸及び打製石斧は出雲市の蔵小路西遺跡から晩期の土器に伴って検出されており⁽¹⁵⁾、板屋Ⅲ遺跡からはこの時期の石包丁と思われるものが出土している。さらに、他県では縄文時代に出土している石錐⁽¹⁶⁾が縄文時代晩期と弥生時代前期の土器が共存している九郎原遺跡、三田谷Ⅰ遺跡から検出されており、これらの石器も縄文時代のものになる可能性がある。ともあれ、後晩期の石器は一つの集落で魚獵、狩猟、農耕といった食べ物を確保する手段が多様化してきていることを示してい



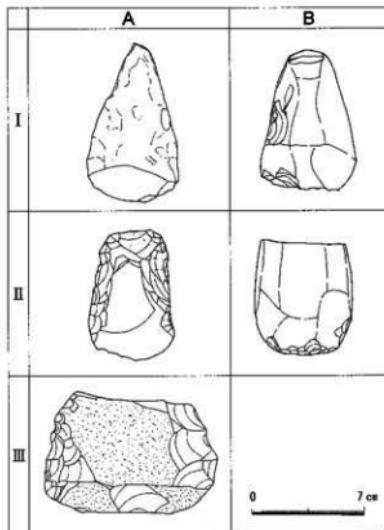
第36図 石鏃分類図



第37図 スクレイバー分類図



第38図 模形石器分類図



第39図 石斧分類図

第2表 繩文時代石器組成一覧表

石 器 名	早 期			中 期			後 期			晚 期		
	原 始 人 類	農 耕 人 類	漁 獵 人 類	原 始 人 類	農 耕 人 類	漁 獵 人 類	原 始 人 類	農 耕 人 類	漁 獵 人 類	原 始 人 類	農 耕 人 類	漁 獵 人 類
石 周 基 鋸	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石 周 基 の 他 形	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石 平 基 / 全体 刃 合	3/23(3)	1/8(12)	8/67(15)	3/55(3)	6/24(25)	6/44(13)	2/9(22)	38/75(50)	8/18(44)	5/10(50)	2/4(50)	5/10(50)
石 鋸 基 / 長さ / 幅	1.0以下	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
石 鋸 基 / 1.2以下	1.5以下	2	4	1	4	1	8	1	2	1	1	2
石 長 三 角 形	1.5以上	1	○	○	○	○	2	1.0	2	1	1	2
石 正 三 角 形	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石 打 局 部 槌 製	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石 斧 槌 製	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
尖 ス ク レ ー バ ー	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
板 槌 形 石 器	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石 級	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石 三 鎚 石	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石 線 縫	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石 包 丁	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石 工 品	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石 石 ナ イ フ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
そ の 他	莫形石器	草期末 早期 前中期 後半	早期 前期	早期 前期	前期前葉	後期	後期後半 晚期 你生前期	神型土器	燒 寬形石器	後期 晚期 你生前期	晚期中期 你生前期	後期中心 晚期中期
時 期	春	夏	前期	前期	前期	前期	後期	後期	後期	後期	後期	後期

		I						II					
	A	b	a	B	b	1	2	3	C	D	A	B	C
車・早期													
車・中期													
車・末・前期													
車・後・晚期													

第40図 岩槻塚における石器変遷図

るとともに、装飾品である玉類が出て来ることは注目され、定住的な集落が多くなっているものと推定される。

次に石器の種類毎に見てみたい。ラント遺跡から出土した石鎌は凹基無茎式（I類）と平基無茎式（II類）の二つに大別できる。前者は基部のえぐりが半円状のもの（A）と三角状のもの（B）側縁の中央部がややくびれ外反ぎみなもの（C）の3つに分けられる。IA類及びIB類は、さらに側縁が直線的なものとやや円弧ぎみで丸みを持つものに細分できる。このように石鎌には色々なタイプがあり形態の変遷がとらえにくく状況にある。そのため、今まで全時期を通しての検討はあまり行われていないのが現状で、わずかに2、3の遺跡で行われている程度である。

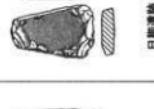
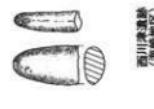
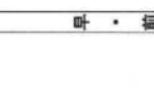
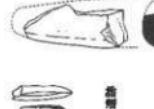
堀田上遺跡では層的に早期を古、中、新の3段階に分け、えぐりの浅いタイプ+平基のものが等量認められる時期→えぐりの深いタイプを中心に浅いタイプ+平基のものを伴う時期→えぐりが山形で深いものから深いものまで伴う時期の3つに分けている。また、日脚遺跡では繊維土器を二つに分け古い方が鍬形鎌を伴う確立が高いと報告されている。このように2つの遺跡だけでは全体的な流れがつかめないので凹基無茎式（I類）と平基無茎式（II類）に分けて検討してみた。

I類はさらに基部のえぐりが半円状のもの（A）三角状のもの（B）側縁部が外湾しているもの（C）円弧状のもの（D）に分けた。IA類の古いものはいわゆる鍬形鎌と呼ばれるもので、細長の石鎌（a）と長さの短い（b）がある。早期から出現するが、前期になるとえぐりがやや浅く、厚みもやや薄くなる傾向がみられる。後晩期になると、脚部の幅は狭く、端部が尖るものが多い。また、IB類は、古い段階にえぐりの深いものが存在しているが、新しくなるとほとんどなくなってしまう。ただ、えぐりの浅いタイプは全時期通して見られるようである。さらに、側縁部が外湾して屈曲しているIC類の石鎌は岩塚II遺跡など古い段階から存在するが、後晩期になると数を増し、屈曲の度合いも深くなってくる。

平基のII類はやや細い将棋の駒状の形態を持つもの（A）長三角形状のもの（B）正三角形状のもの（C）の3つに分けられる。早期～前期の平基の鎌は、鎌全体の5%～25%あまりと比較的割合が低く、長さ+幅の比率が1以下のC類が多い。また、側縁はやや丸みを持っているものが多く、長さの比率が1.5以上のB類は少ない。それに対し後晩期になると鎌全体の割合で22%～50%を占め、平基の鎌が増えてくる傾向がある。また、長さの比率でも1以下の幅広いC類がほとんど無くなってくるとともに1.5以上の細長いB類が増加していく。このように平基の石鎌は、古い時期では幅広のC類が主流で、石鎌全体の比率もさほど高くなかったものが、後晩期になると平基の石鎌が主流になり、細長いA、B類の鎌が数多く出土するようになる。

ラント遺跡では平基の石鎌が全体の13%あまりで比率が低いとともに、ラントIA類及びIB類の凹基のものは日脚遺跡に似たものがあり、IC類は岩塚II遺跡出土の石鎌に近い形態をなしている。また、II類の平基の石鎌も古い時期にあっても矛盾しないものであることから、ラント遺跡出土の石鎌は縄文時代早期～前期にかけての遺跡から出土しているものに近い様相を呈しているものと思われる。

ラント遺跡の楔形石器は短冊形を呈した長方形タイプ（I類）、幅広で上下の端部に丸みを持つもの（II類）、全体的に細長いもの（III類）の三つに分けられる。III類は側縁がやや膨らむタイプ（A）、頭部の幅が広く下部に行くしたがって細くなる三角形を呈したタイプ（B）に分けられる。楔形石器については県内では検討された実績がないので実態は明らかでないが後晩期の遺跡か

盛 製	局 部 製	打 制
早・前期	     	  
後・晚期	  	   

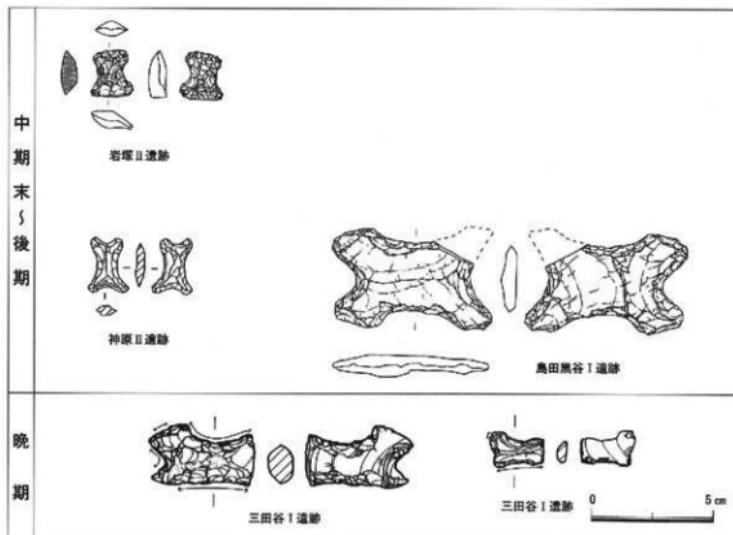
第41図 島根県における石斧整理図

らは出土例がほとんどないことから縄文時代早期～前期にかけて石器を造る過程で生じたものと推定される。ラント遺跡出土の楔形石器もこの時期のものと考えられる。

次にスクレイパーを見てみると縄文時代早期～晚期まで各時代をとおして出土しており、ラント遺跡からはサイドに刃を付けたもの（I類）下部に刃がくるもの（II類）に分けられ、II類は大形のもの（A）と小形のもの（B）に細分できる。石材は大形のII A類がサヌカイトで、I類とII B類は黒曜石で作られたものが多い。島根県下のスクレイパーについては西川津遺跡で分類されてい



第42図 島根県における石匙変遷図



第43図 島根県における異形石器変遷図

る程度⁽¹⁷⁾で、全体的な検討は行われていないためラント遺跡のものがどの時期になるか明らかでない。

ラント遺跡から1点ほど石匙が出土している。石匙は後晩期の遺跡から出土する例が多く、水田ノ上A遺跡をはじめ石見部では縦形の石匙が主流であるのに対し、出雲部では横形のものが大半を占めている。頓原町板屋Ⅲ遺跡の早期末～前期後半にあたる第3黒色土から出土した石匙は、横形であるが上部の端によつた所につまみが存在しており、ラントのものと形態がやや異っている。このタイプは後期の五明田遺跡⁽¹⁸⁾、後期～晩期の森遺跡⁽¹⁹⁾からも出土しており、出雲山間部でよく見られるものである。一方、出雲平野部では、大社町菱根遺跡や松江市の島根大学校内遺跡等早期～前期の遺跡から横形でつまみが中央部についているタイプのものが出土しており、平野部と山間部で様相を異にしているのは注目される。このようにラント遺跡の石匙は島根大学校内遺跡⁽²⁰⁾や菱根遺跡⁽²¹⁾のものに形態が近いことから縄文時代前期ごろと思われる。

ラント遺跡の石斧は基端が尖り、刃部に向かって広がっている撥形（I類）と基端に幅がある短冊形（II類）それに石鎚と思われる打製石斧（III類）に分けられる。I類、II類はそれぞれ磨製と局部磨製がある。短冊形の磨製石斧は縄文時代早期末～前期の日脚遺跡、岩塚II遺跡で現れ、後晩期の水田ノ上A遺跡まで続く。このタイプの石斧は堅い石を用いており、断面は長丸である。断面が比較的丸い乳棒状の磨製石斧は、早期末～前期の西川津遺跡や後晩期の森遺跡、神原II遺跡で出土しており、新しい時期になると円に近い断面を持つようになる。局部磨製の石斧は、古い時期の岩塚II遺跡や西川津遺跡で出土例があるが、後晩期になるとあまり見られなくなり、かわって後晩期に小形の磨製石斧が新たに出現する。次に打製の石斧は早期末～前期の日脚遺跡、西川津遺跡から検出されており、後晩期になると出土例が多くなる。扁平なものが多く、器形もさまざまな形態をなしている。後晩期になると大形化し、断面の厚いものが増える傾向がある。ラントの打製石斧は後晩期のものに類似しており、この時期のものと考えられるが、磨製及び局部磨製のものは日脚遺跡、西川津遺跡、岩塚II遺跡のものに近いことから縄文時代前期になると思われる。

最後に異形石器について検討してみたい。ラント遺跡の異形石器は身の中央部が湾曲していく、上下端が直線的になっている長さ1.6cm、幅1.2cmを計る黒曜石製のものである。この形態を持つ石器は現在のところ島根県において縄文時代早期～前期の遺跡からの出土例がなく、最も古いものと考えられているのは岩塚II遺跡A地点から中期～後期の上器と共に出土した石器である。これは、大きさ、形態ともラント遺跡のものと良く似ており、このタイプの石器は後期の江津市古八幡遺跡からも出土している⁽²²⁾。また、後期の神原II遺跡⁽²³⁾や島田黒谷I遺跡⁽²⁴⁾の異形石器は上下端にもくびれがあり大形化したもので、その形態はまさに四隅突出形墳丘墓を彷彿させるような形を呈している。島田黒谷I遺跡の石器はサヌカイト製で竹広氏の言う洗谷型剥片剝離技術を用いて作られおり⁽²⁵⁾、長さ4.3cm、幅6.9cmを計り、岩塚タイプとは用途が異なるものと考えられる。黒谷タイプは後期の三田谷I遺跡にも引き継がれるが、くびれに均一性を欠き、やや歪な形になってくる。このように異形石器は小形で左右にくびれが入る形態のものと大形で四辺すべてが湾曲しているタイプに分けられ、前者がやや古い傾向を示している。ラント遺跡のものは岩塚タイプに入るもので、現在の段階では縄文時代前期まで遡る確証がないが、福井県鳥浜貝塚では、このタイプの異形石器が前期から出土しているので⁽²⁶⁾古くなる可能性を持っている。

以上、ラント遺跡出土の石器について検討してきた。それらの石器は、打製石斧を除き、概ね縄

文時代前期ごろに位置付けられることが分かった。ラント遺跡は住居跡等の遺構を検出することが出来なかつたが、キャンプ地的な集落が近くに存在していたものと思われ、縄文時代の集落の変遷や文化を知る上に重要な遺跡であると言えよう。

註

- 1 鈴木義昌編 『日本の考古学 縄文時代』 河出書房 1965
- 2 島根県教育委員会 『朝鈴川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 1987
- 3 島根県教育委員会 『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』 1985
- 4 島根県教育委員会 『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』 1994
- 5 註2と同じ
- 6 島根県教育委員会 『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財報告書』 1991
- 7 註3と同じ
- 8 島根県教育委員会 『日脚遺跡』『日脚住宅跡地予定地内発掘調査報告書』 1985
- 9 島根県教育委員会 『神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡』『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8』 2000
- 10 島根県教育委員会 『森遺跡・板屋I遺跡・森脇山城跡・阿門谷山堂跡』『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2』 1994
- 11 島根県教育委員会 『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ』『三田谷I遺跡』 2000
- 12 島根県教育委員会 『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1980
- 13 匹見町教育委員会 『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』 1993
- 14 匹見町教育委員会 『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』『四見地区祭宮開場整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書IV』 1991
- 15 島根県教育委員会 『萩小路西遺跡』『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2』
- 16 鈴木道之 『石器の基礎知識Ⅲ』『縄文』 柏書房 1981
- 17 註2と同じ
- 18 頼原町教育委員会 『五明田遺跡』 1991
- 19 註10と同じ
- 20 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 『島根大学校内遺跡第1次調査(櫛櫛手地区)発掘調査報告』 1997
- 21 反詰仲男・石部正志 『山雲古文化調査团報告書』『島根県斐根遺跡発掘調査報告』 1959
- 22 島根県教育委員会 『神主城跡 室崎商店裏遺跡 古八幡付近遺跡 横路古墓』『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』 2000
- 23 註9と同じ
- 24 島根県教育委員会 『才ノ神 普請場遺跡 岩田黒谷I遺跡』『一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告9』 1995
- 25 註24と同じ
- 26 神井県教育委員会 『鳥浜貝塚』 一縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1 - 1979

第5章 野田遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の概要

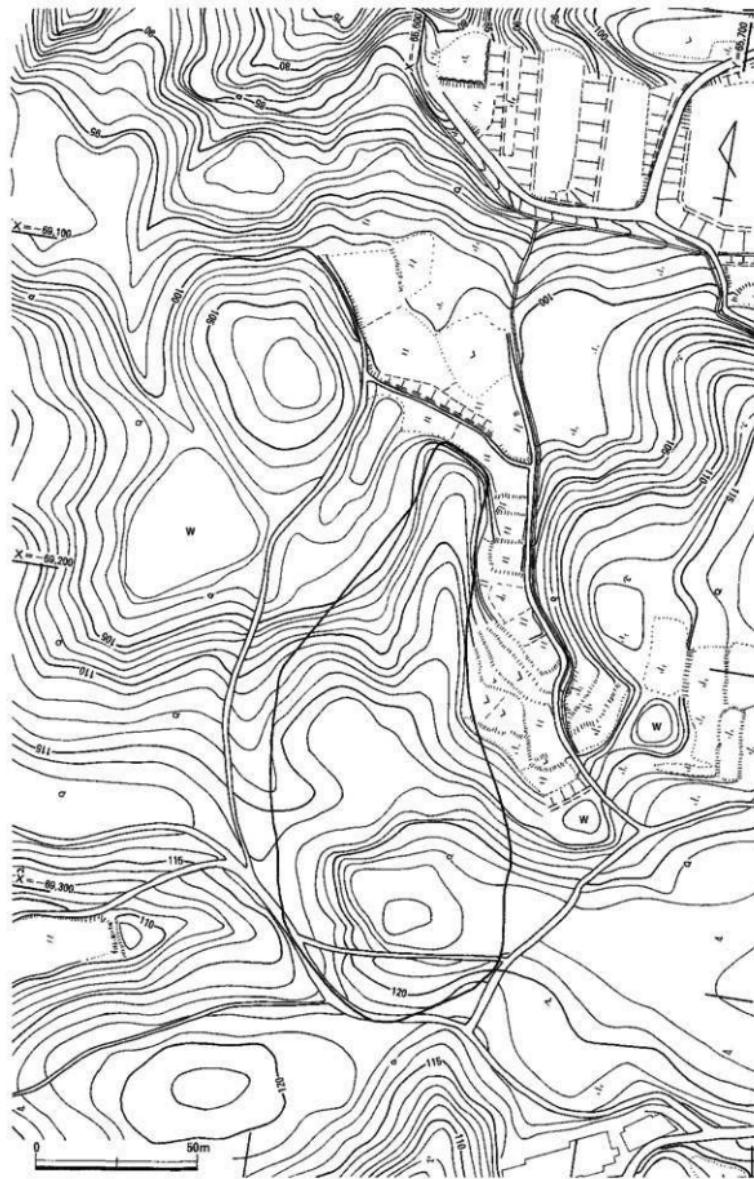
野田遺跡は、八束郡宍道町大字佐々布3091番地外に所在する。現在の宍道湖岸から約4.5km南方の標高約115～125m程の丘陵上に位置している（第44図）。南方にあたる加茂町岩倉畑の大山の山稜から北方の宍道湖に向かって大きく開口する谷間の緩斜面上に立地する。西方には斐川町学頭の大黒山の頂きを望み、北方眼下には宍道町伊志見、斐川町荘原の集落と平野、さらに宍道湖や遠く島根半島を眺望することができる。

調査前（分布調査時）の現地は雑木林からなる山林と竹林であった。一部（調査I区周辺）の地表面には中世から近世にかけてのものと思われる五輪塔が10基以上集積され、信仰の対象として祭られていた。しかし、今回の発掘調査着手時には旧地権者（日本道路公团による用地買収前の土地所有者）等により既に別の場所へ移設されたことが確認されている。

なお、遺跡名称については、当初、関係諸機関の教示により、「野添遺跡」と呼称していたが、その後の調査で当該地の字名は「野田」であることが判明した。そこで、当遺跡の名称についても正確な字名に依拠するものとし、「野田遺跡」と改称のうえ調査成果を報告する。

発掘調査は、事前に行なわれた分布調査およびトレンチによる試掘調査の結果をもとにI区・II区・III区の総面積約600m²弱の発掘調査区を設定し（第45図）、全面発掘によって実施した。平成11年8月2日から重機による表土掘削に着手し、同年9月9日の作業員撤収を以て終了した。

調査の結果、造構として中世末から近世初頭頃の土壙墓1基、性格不明の土坑3基、溝状造構1条、3箇所の炭化・焼土跡を検出した（第46図）。また、遺物としては土壙墓から副葬品と思われる古銭、土師質土器の杯などが出土したほか、造構外から磨製石斧、土師質土器数点が出土したのみである。

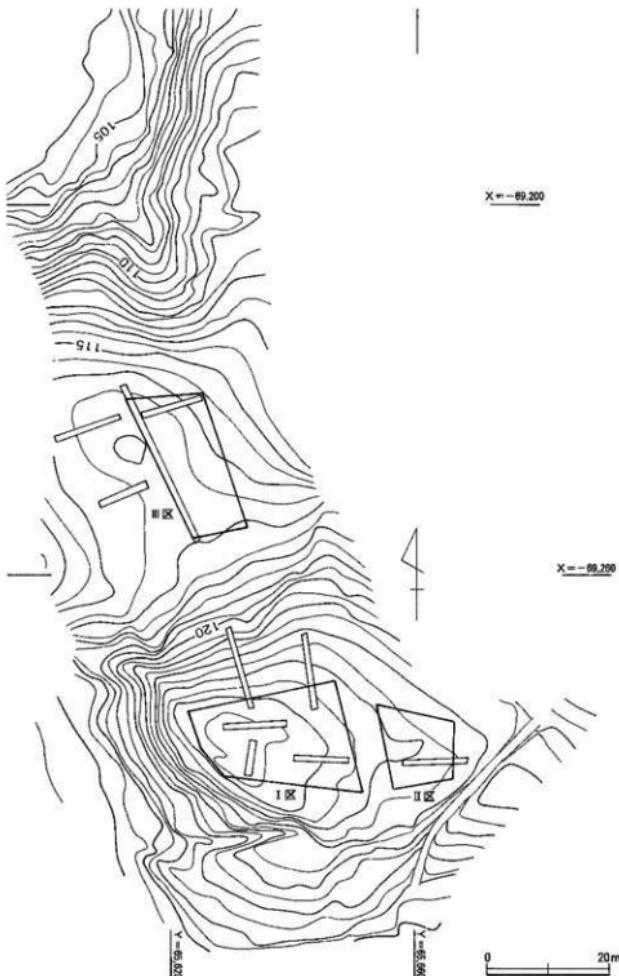


第44図 調査対象地位置図 (S = 1 : 3000)

第2節 調査の結果

(1) 基本層序 (第45・46・47・48図)

当遺跡は、雜木林からなる山林及び竹林であったため、現地表には大小の木根がはびこっていた。そのため人力での掘削は難渋を極め、止むを得ず全調査区についてトレンチ調査の結果を勘案しつつ重機による表土掘削を実施した。基本層序は、第48図のとおりで、表土下は赤褐色土が単層



第45図 調査前地形測量図・調査区配置図 (S = 1 : 800)

堆積し、造構検出面で、地山と判断した赤色及び黄色粘土に到達する。遺物は、この赤褐色土層と造構内堆積土中から検出されている。

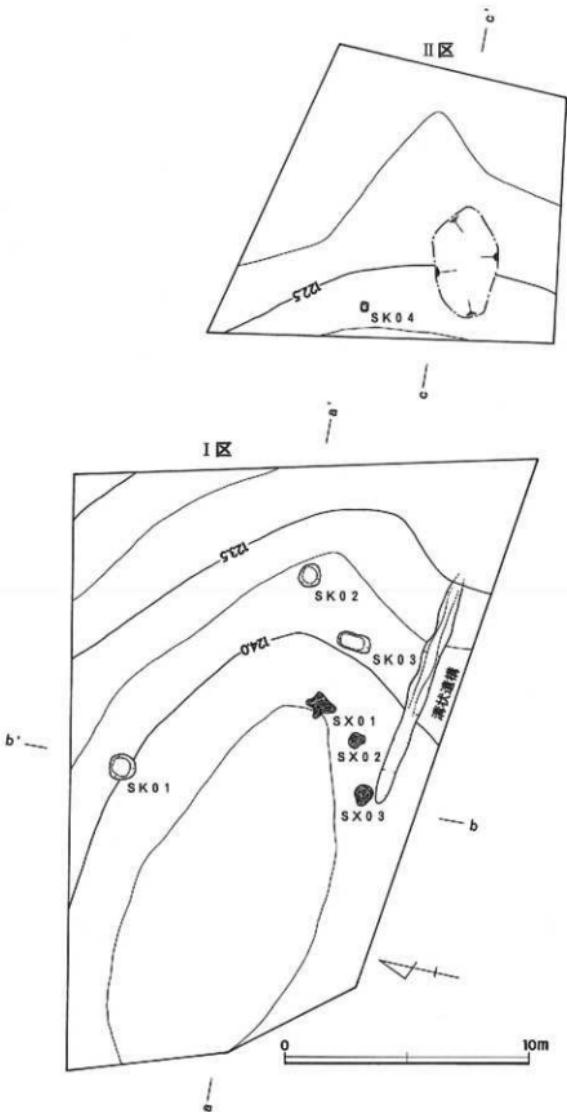
(2) I区の遺構

(第46図)

I区では、溝状遺構1、上坑3、炭化・焼土跡3が検出された。

溝状遺構(第49図)

I区の南端付近、標高123.5～124.25m付近から検出された平面形が直線を呈する溝状遺構である。長軸はほぼ東西方向にあり、底面は地形に沿って西から東へ緩やかに傾斜している。溝の断面形はゆるやかな弧状を呈している。規模は遺構検出面で最大長約9.8m、最大幅0.9m、深さ約0.1～0.2mを測る。覆土は、炭化物を微量に包含する暗褐色土が単層



第46図 I区・II区調査後地形測量図・遺構配置図 ($S = 1:200$)
検出された平面形が長方形を呈する土坑である。長軸はほぼ南北方向にある。トレンチ調査によつて、土坑の両長辺の一部は破壊されているが、規模は遺構上面で長軸径約1.35m、短軸径約0.6m、遺構底面で長軸径約1.05m、短軸径約0.55mを測り、深さは最大で0.25mを測るものと推定される。

堆積していた。遺物は出土せず、溝の時期と性格は不明である。

SK 0 1 (第50図)

標高124m付近から検出された平面形が円形を呈する土坑である。規模は、径1.15m、深さ0.22mを測る。覆土は、5層からなり炭化物を包含する。特に最下層はほとんど炭化物の堆積からなる。炭化物を多量に包含するものの、土坑の壁面や底面に焼けた痕跡は認められなかった。遺物は出土せず、時期、性格は不明である。

SK 0 2 (第51図)

標高123.75m付近から検出された平面形がほぼ円形を呈する土坑である。規模は、径0.95m、深さ0.14mを測る。覆土は、4層からなり炭化物を包含する。特に底面付近の第3層はほとんど炭化物の堆積からなる。炭化物を多量に包含するものの、土坑の壁面や底面に焼けた痕跡は認められなかった。遺物は出土せず、時期、性格は不明である。

SK 0 3 (第53図)

標高約124m付近から

覆土は2層からなり、第1層からは、土師質土器の皿1点（第57図-1）が内面を上向きにした状態で出土し、第2層の底面付近からは古銭4点（第58図-1・2 *共伴出土した他の2点は遺存状態悪く図化不可能）がほぼ水平に重なった状態で出土している。遺構の規模と形状、出土遺物から土壤基の可能性がある。遺物から中世末から近世初頭頃の遺構と考えられる。

S X 0 1 (第52図)

標高124.25m付近で検出された灰黒色土からなる炭化土・焼土の跡である。検出面は平面不定形を呈し、最大径1.25m、厚さ0.05mを測る。中央部には炭化物が特に集中して認められる。遺物は出土せず時期は判然としないが、人為的に火を焚いた跡と推測される。

S X 0 2 (第54図)

S X 0 1 から約1.2m離れた地点から検出された同様の炭化土・焼土の跡である。検出面は平面不定形を呈し、最大径0.7mを測り、深さ0.07m以内の浅い摺り鉢状の凹みに炭化土・焼土の堆積が認められる。中央部には炭化物が特に集中して認められる。遺物は出土せず時期は判然としないが、人為的に火を焚いた跡と推測される。

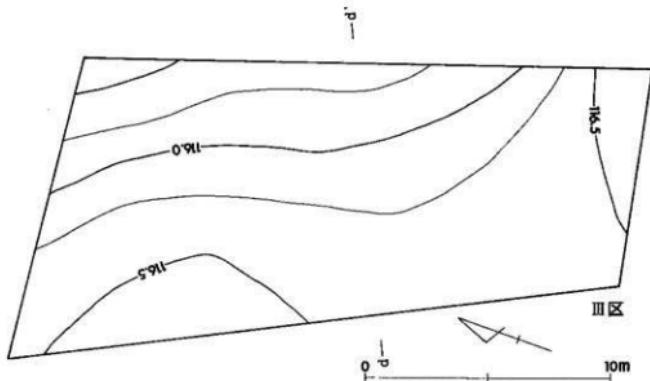
S X 0 3 (第55図)

S X 0 2 から約1.5m離れた地点から検出された同様の炭化土・焼土の跡である。検出面は平面不定形を呈し、最大径0.9mを測り、深さ0.12m以内の浅い摺り鉢状の凹みに単層堆積が認められる。人為的に火を焚いた跡と推測される。炭化物が特に集中して認められる範囲は図示した2箇所である。土師質土器の皿片（第57図-2）がその内の1箇所の炭化土の上層から出土している。付近に他の遺物が認められず、この土器がこの遺構に伴うとすれば、中世末から近世初頭頃の遺構と推測される。

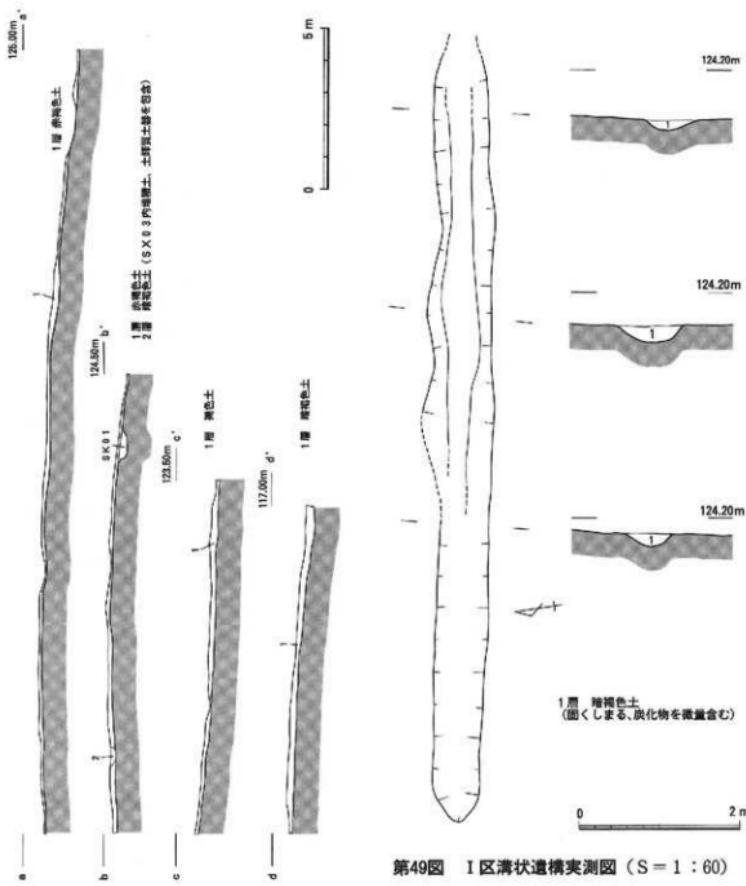
(3) II区の遺構 (第46図)

S K 0 4 (第56図)

II区で出土した唯一の遺構である。調査区の西壁に近い標高122.5m付近から検出された集石を



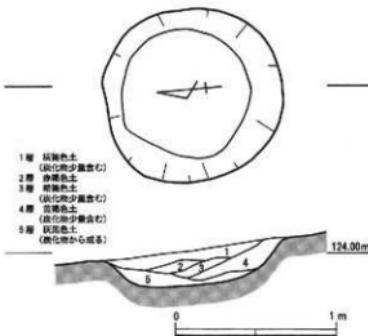
第47図 III区調査後地形測量図 (S = 1 : 200)



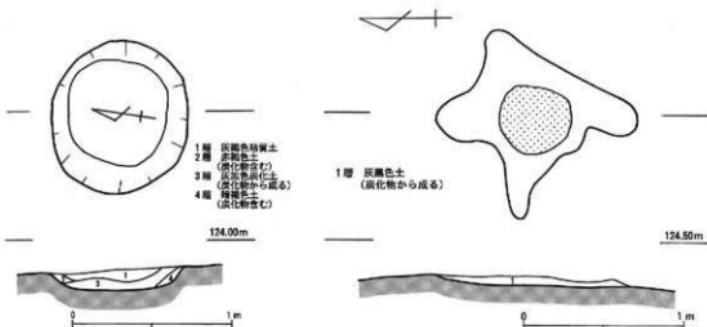
第48図 各調査区土層断面図 ($S = 1 : 150$)
(第46図 a-a', b-b', c-c', 第47図 d-d')

伴う小規模な土坑である。土坑両長辺の掘り込み面は判然としなかったが、検出面では平面長方形を呈し長軸はほぼ東西方向を向いている。規模は造構上面で長軸径約0.4m、短軸径約0.3m、造構底面で長軸径約0.3m、短軸径約0.18mを測り、深さは深いところで0.15m、浅いところで0.07mを測る。底面は地形の傾斜に逆らうように東から西へと傾斜している。覆土は2層からなり、径3~10cm程の平たい自然石が第

第49図 I区溝状造構実測図 ($S = 1 : 60$)



第50図 I区SK01実測図 ($S = 1 : 30$)



第51図 I区SK02実測図 ($S = 1 : 30$)

第52図 I区SX01実測図 ($S = 1 : 30$)
(平面図アミ部は炭化物が集中する部分を示す)

2層上面から第1層にかけて集中して出土した。遺構の近辺にこうした石は認められず、人為的に集積された可能性が高いといえる。他に遺物は出土せず、遺構の時期や性格は不明である。

(4) III区の遺構 (第47図)

標高約116mの平坦地を地山面まで掘り下げたが、明確な遺構・遺物は検出されなかった。

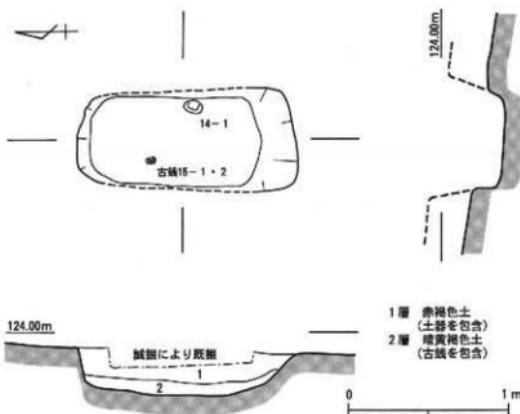
(5) 出土遺物

土師質土器 (第57図)

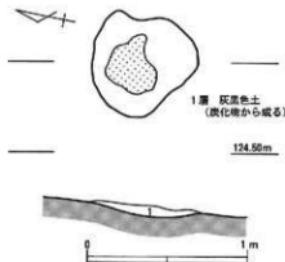
57-1は、I区SK03内の覆土中から出土したほぼ完形の皿である。口径11.1cm、底径4.7cm、器高2.2cmを測る。器表は風化によって調整は不明瞭であるが、外面の底から側面にかけてゆびおさえの痕跡が認められる。いわゆる京都系の皿と推測される。富田川河床遺跡SK184⁽³¹⁾や松江城二の丸番所跡SK01⁽³²⁾に類似しており、中世末から近世初頭頃の所産と推測される。

57-2は、I区SX03から出土した1と類似のいわゆる京都系の皿片である。復元すると口径11.6cm、底径6.8cm、器高1.8cmと推定される。1と同様に外面の底から側面にかけてゆびおさえの痕跡が認められる。1とほぼ同時期の所産であろう。

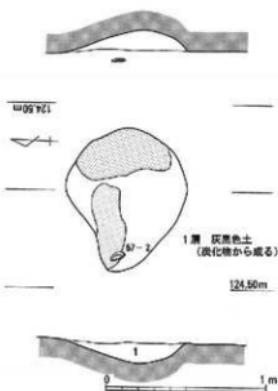
57-3は、I区遺構外の表土直下から採取した皿片である。復元すると口径11.6cm、器高2.4cmを測るものと推定される。1、2に比べ、底から口縁部にかけて若干内湾気味に立ち上がるが、法量、胎土、焼成は近似



第53図 I区SK03実測図 ($S = 1 : 30$)



第54図 I区SK02実測図
(S = 1 : 30)
(平面図アミ部は炭化物が集中する部分を示す)



第55図 I区SK03実測図・土器出土状況図(S = 1:30)
(平面図アミ部は炭化物が集中する部分を示す)

している。詳細は不明であるが、1・2とほぼ同時期の所産であろう。

磨製石器(第57図)

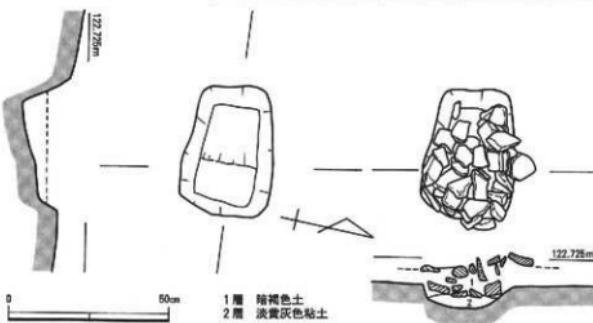
57-4は、出土地点ははっきりしないが、トレンチ調査中に地山直上から出土したとされる両刃の磨製石斧である。岩質は硬質感があり淡緑白あるいは灰白色を呈しているが、石材種は不明である。器表面は丁寧に研磨され、一部に擦痕が確認される。刃部はかなり使い込まれており、摩滅が著しく原形をとどめていない。残存部的最大長7.5cm、最大幅5.1cm、最大厚1.6cmを測る。形態から縄文時代の所産の可能性がある。

古銭(第58図)

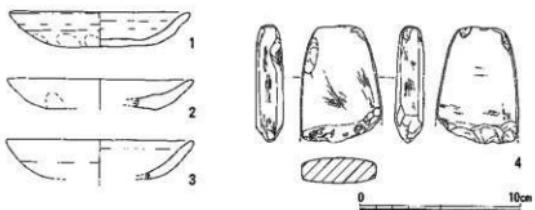
58-1、2はI区SK03から出土した銭貨である。1は、「政和通寶」で渡来銭と考えられるが、縁部が損傷しており詳細な計測は不能であった。SK03からは他に2点の銭貨が共伴出土したが、遺存状態が悪く拓本・図化不能であり銭種も不明である。

58-3、4は遺構外で採集された銭貨である。両者ともに表面が摩滅しており銭種は不明である。以下、永井久美男編「中世の出土銭—出土銭の調査と分類—」兵庫県埋蔵銭調査会(1994年)を参考に観察した結果を表化しておく。

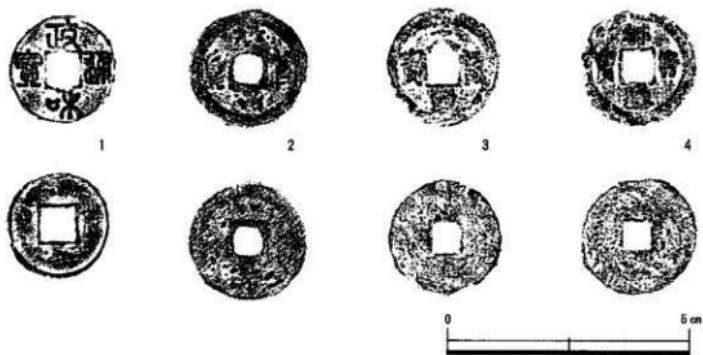
名 称	初銘年	銭径A/ 銭径B(m)	内径C/ 内径D(m)	銭 厚 (mm)	量 目 (g)
1 政和通寶	1111		21.35/ 21.80		1.80
2 □□□寶	不明	24.20/ 24.35	19.10/ 19.50	1.00~ 1.10	2.59
3 天□□寶	不明		23.31		0.79~ 1.10
4 □□□寶	不明	24.00	19.10/ 19.20	1.10~ 1.31	2.71



第56図 II区SK04実測図 (S = 1 : 15)



第57図 出土遺物実測図 (S = 1 : 3)



第58図 出土古銭拓影

その他

黒曜石チップ1点、土師質土器小片3点、陶磁器小片2点を遺構外の表土下より採取したが、図化は省略した。

第3節 小 結

I区で検出されたSK03は、その形状、出土遺物から中世末頃から近世初頭頃の土壤墓の可能性が高い。分布調査時に付近の地表面に五輪塔が集積されて祭られていたこと、発掘調査時に表土中から五輪塔の石材片が散見されたこと、土坑の長軸がほぼ南北方向に合うことなどもこれを傍証するであろう。付近で検出された他の遺構については時期、性格ともに判然としないが、SX03については、伴出した土師質土器の皿がSK03のそれとほぼ同時期の様相を呈している。SK03付近で火を吹く行為があったことを示唆する。これは、類似の規模と構造をもって近在するSX01・SX02の時期と性格についても当てはまる。当時の葬送に関する儀礼の一端を物語るものかもしれない。

野田遺跡が所在する岩倉畠、佐々布畠の集落中には、今でも五輪塔や宝篋印塔が多数点在する。また周辺には、高瀬城跡、佐々布要害山城跡など中世城郭が複数存在し、古戦地伝承や「首谷」

「屋敷」「西ヶ市」「中ヶ市」などの古地名も散見される。

この度の発掘調査で得られた成果は僅かであるが、今後この地域の中近世史を考えるうえで重要な資料を提示したものといえよう。

(註)

1 島根県教育委員会『富田川河床遺跡発掘調査報告書－Ⅲ－』(1983年)

2 松江市教育委員会『史跡松江城発掘調査－二ノ丸番所跡－』(1993年)

写 真 図 版

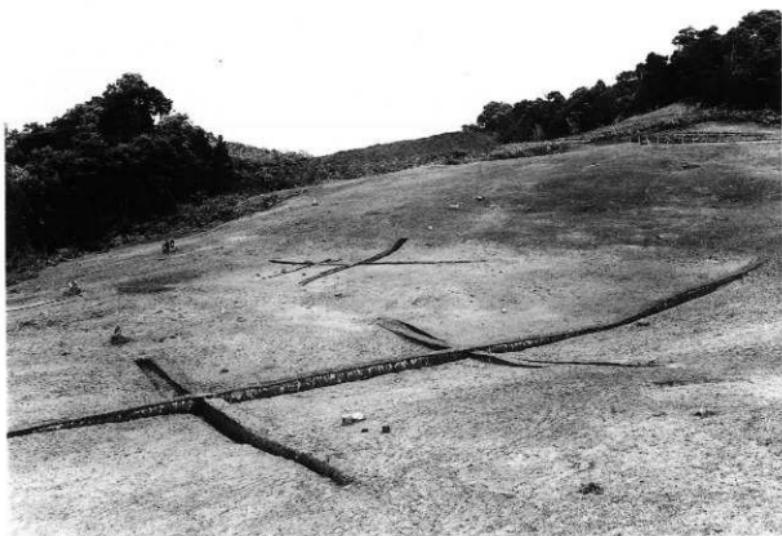


荒畠遺跡全景（南から）



荒畠遺跡全景（北から）

図版2



荒烟遺跡（西から）



荒煙遺跡（南東から）

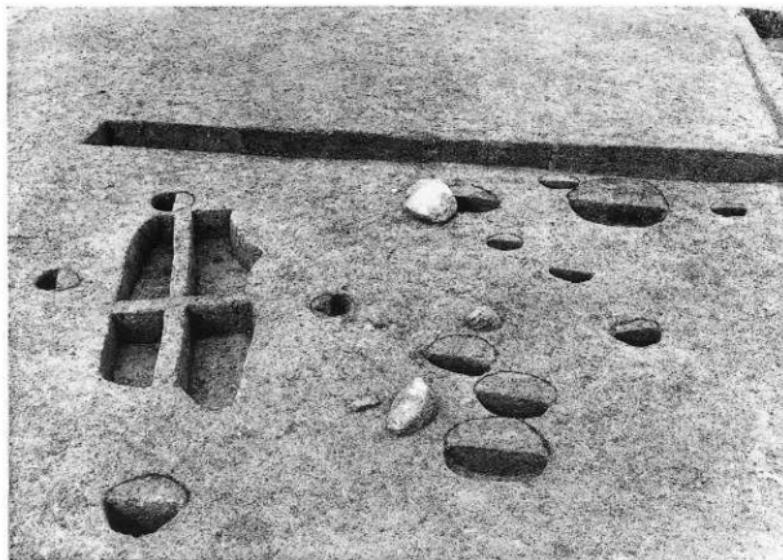


第2調査区遺構検出状況（南東から）



第2調査区遺構検出状況（南から）

図版 4



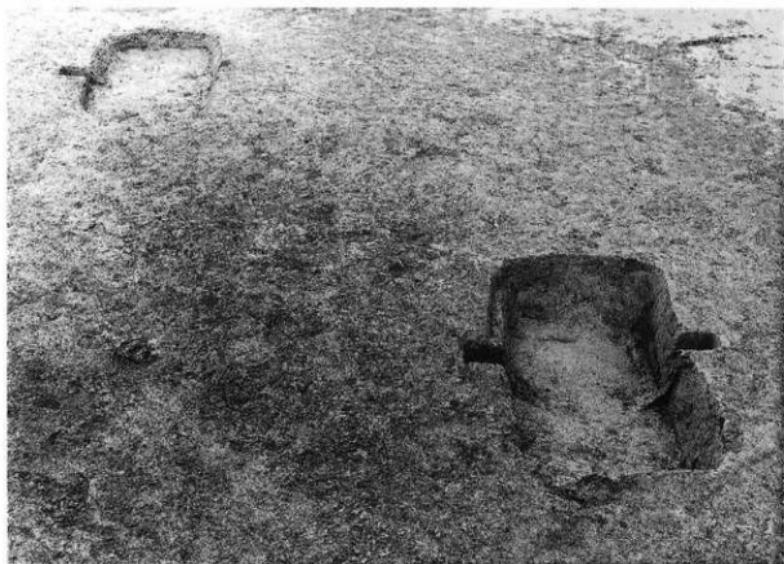
第2調査区第1土壤付近遺構検出状況



第2調査区第1土壤検出状況



第2調査区第2土壤検出状況



第2調査区第3・4土壤検出状況

図版 6



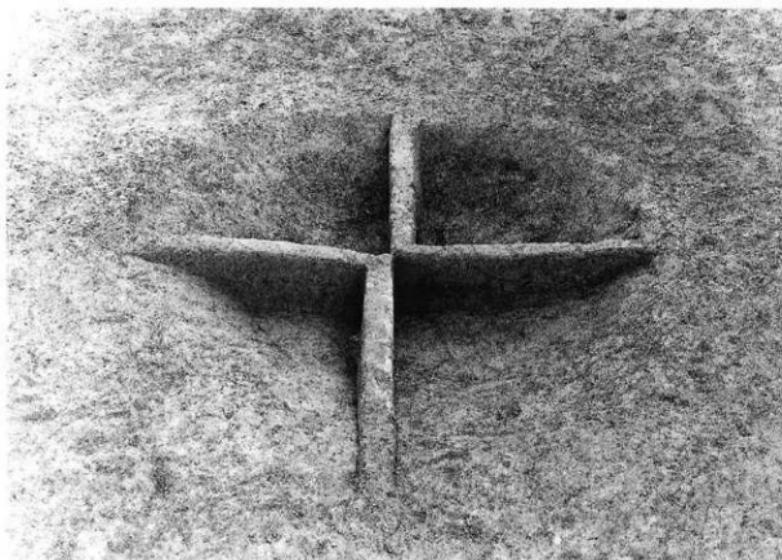
第2調査区第3土壤検出状況



第2調査区第4土壤検出状況

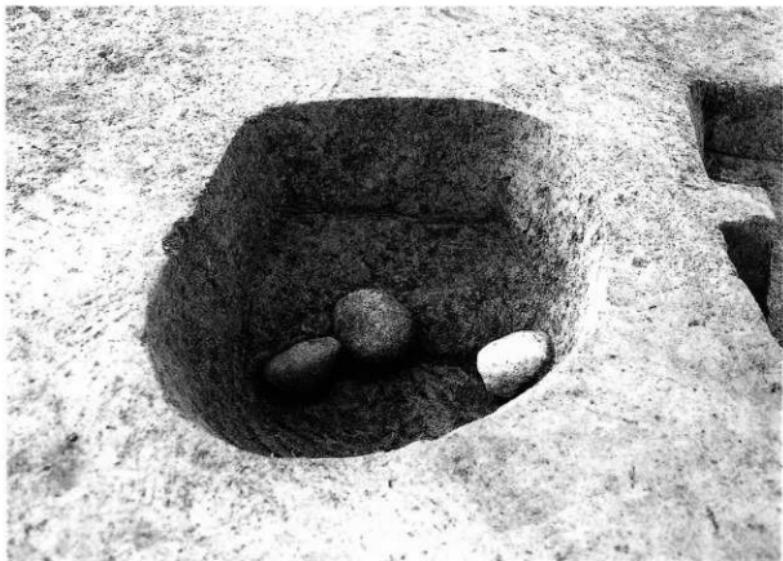


第2調査区第5土壤検出状況



第2調査区第6土壤検出状況

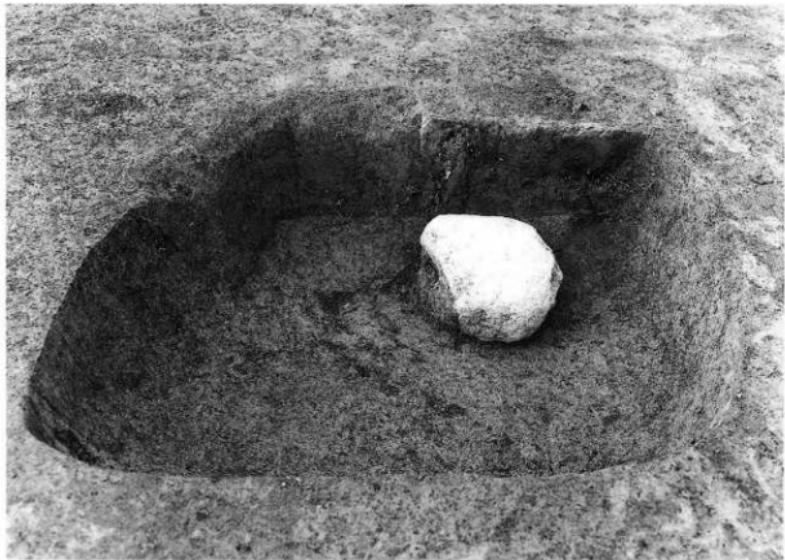
図版 8



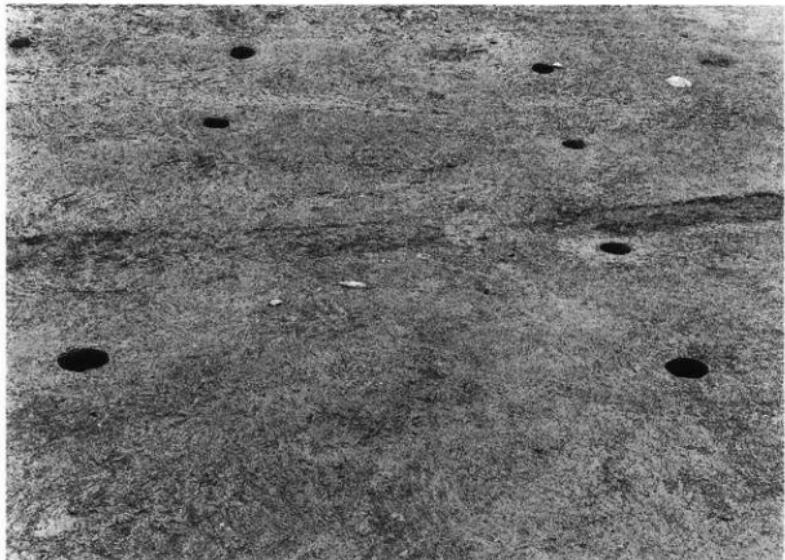
第2調査区第7土壤検出状況



第2調査区第8土壤検出状況

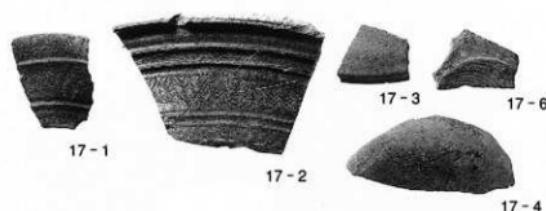


第2調査区第9土壤検出状況



第2調査区掘立柱建物跡検出状況

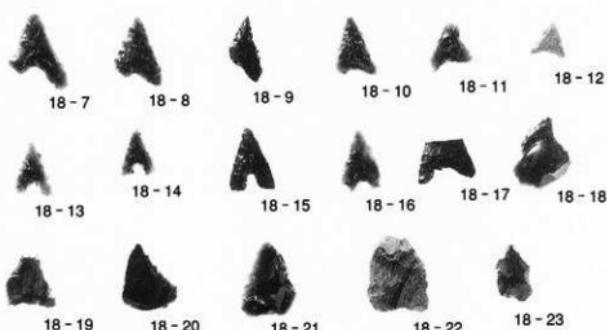
図版10



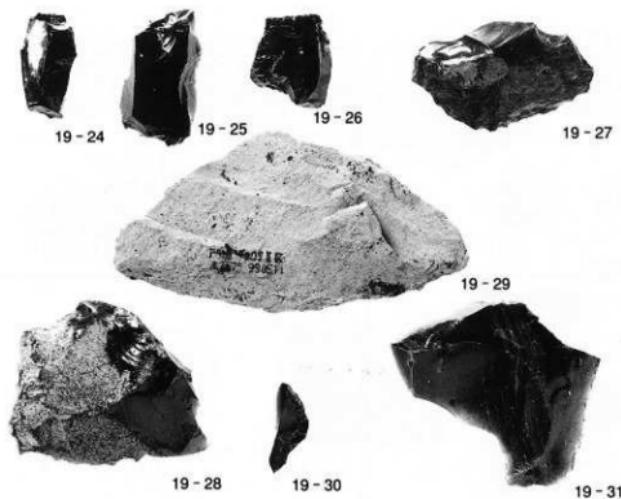
第1調査区出土土器



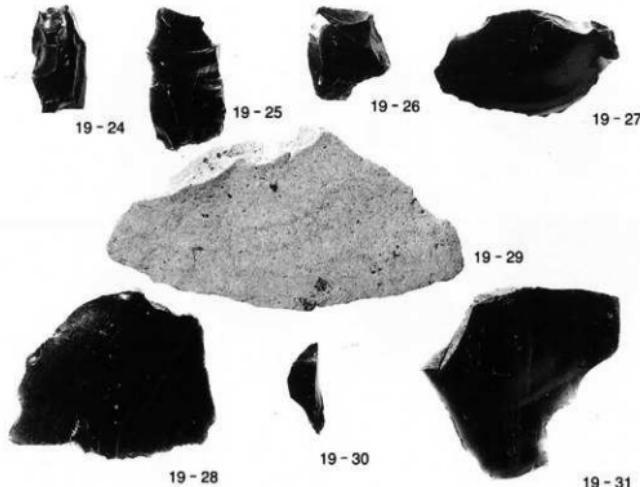
第1調査区出土土器



第1調査区出土石器

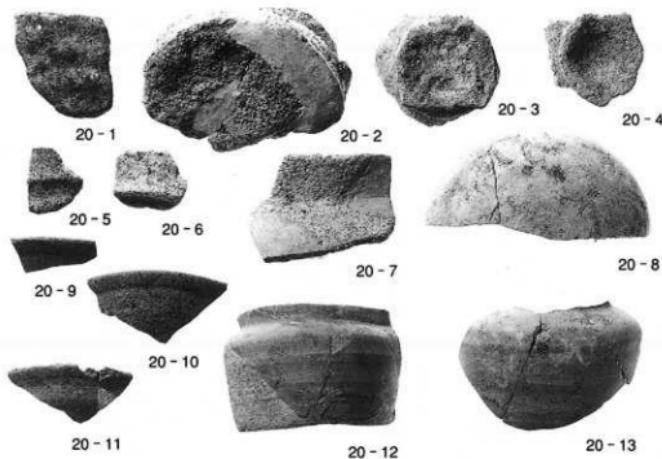


第1調査区出土石器

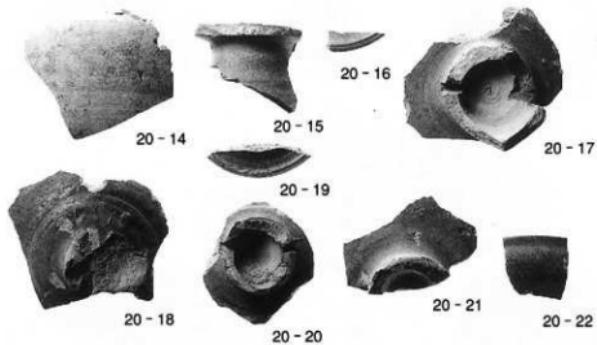


第1調査区出土石器

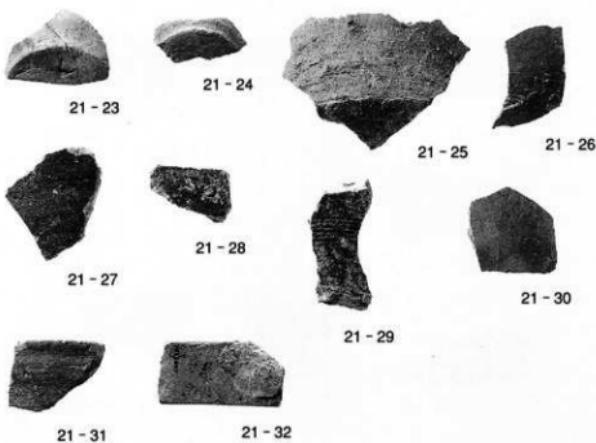
図版12



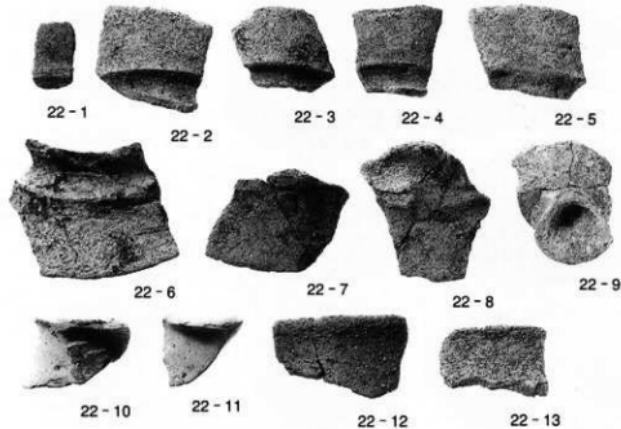
第2調査区A地区出土土器



第2調査区A地区出土土器

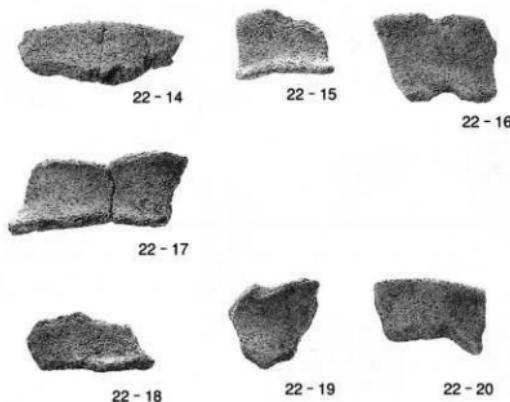


第2調査区A地区出土遺物

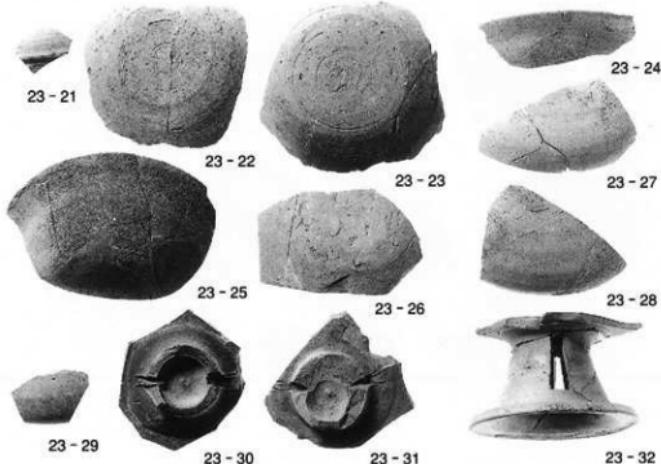


第2調査区B地区出土土器

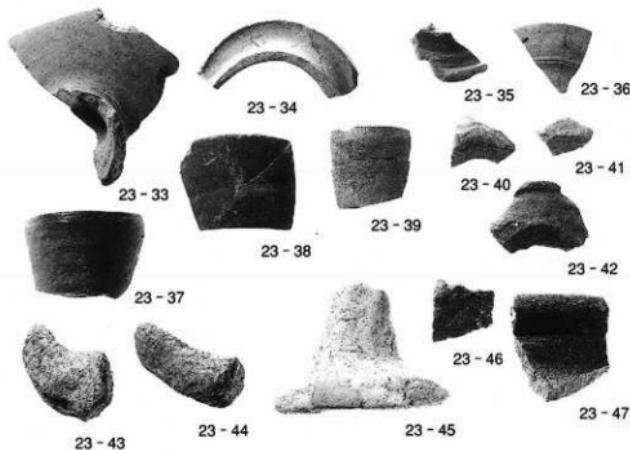
図版14



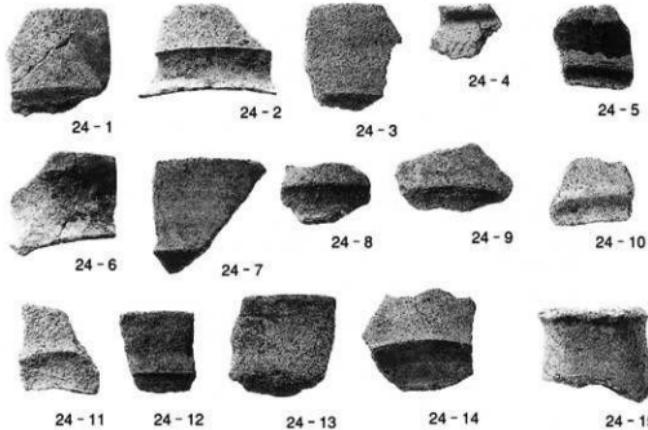
第2調査区B地区出土土器



第2調査区B地区出土土器

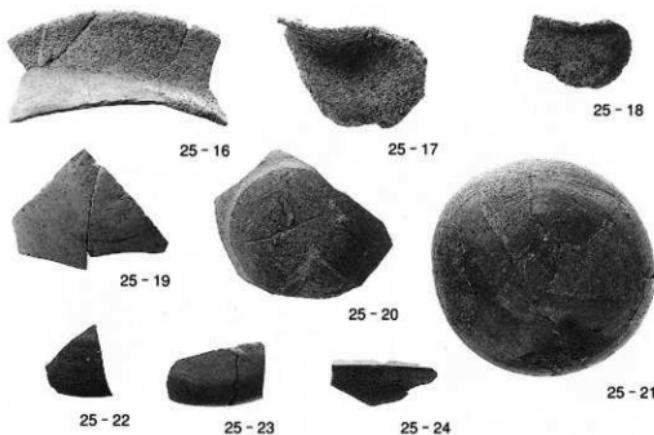


第2調査区B地区出土土器



第2調査区C地区出土土器

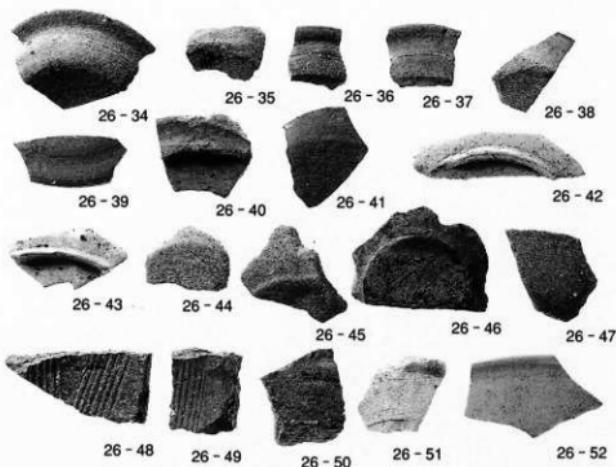
图版16



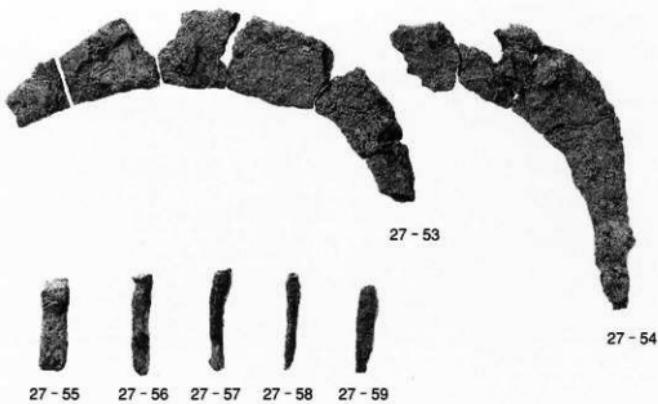
第2調查区C地区出土土器



第2調査区C地区出土土器



第2調査区C地区出土遺物

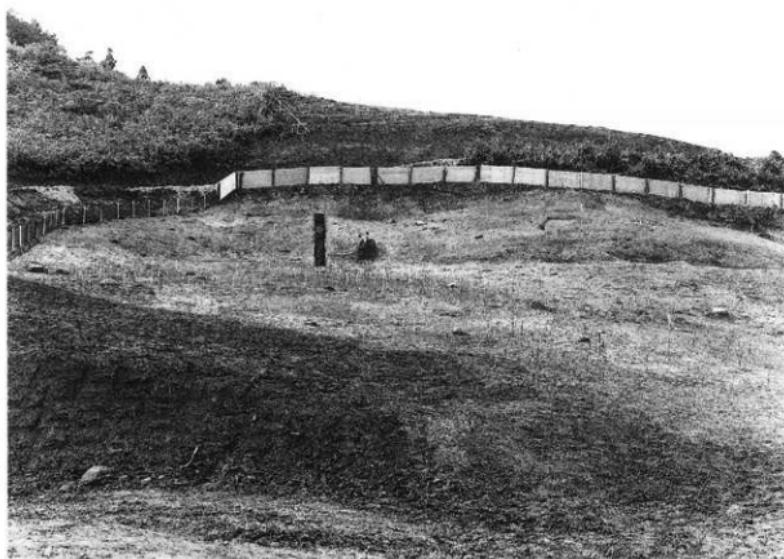


第2調査区出土鐵器

図版18



ラント遺跡全景（南から）



ラント遺跡全景（東から）

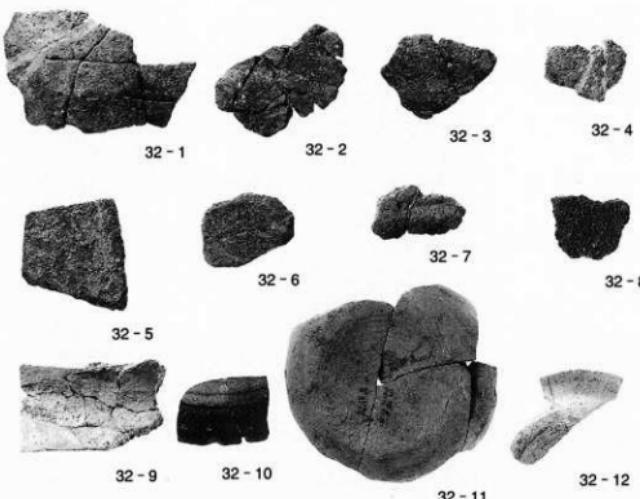


ラント遺跡全景（西から）

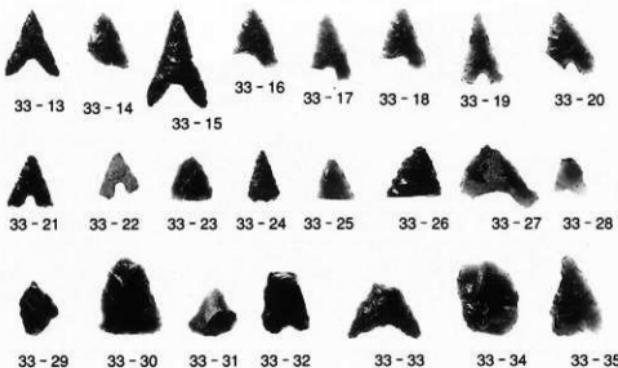


ラント遺跡全景（東から）

図版20



出土土器



出土土器